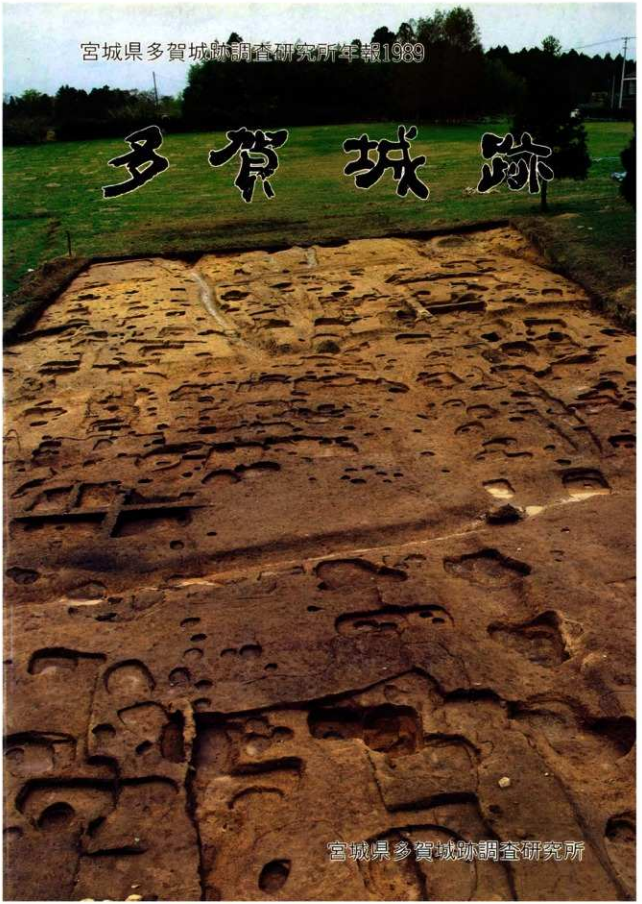

宮城県多賀城跡調査研究所年報1989
多賀城跡
宮城県多賀城跡調査研究所

序　文

多賀城跡の発掘調査は５か年計画を積み重ねる方法で実施している。計画ごとに、所定の目的を設定し、広大な史跡を効率良く解明するためである。本年度はその第５次５か年計画の初年度にあたり、第 56・57 次調査を実施した。当５か年計画の主な目的は外郭東門の南西に位置し、多賀城跡では最も広く平坦地が確保できる大畑地区での官衙群の構成と変遷を解明しようとしたものである。

第 56 次調査は奈良時代の東門および平安時代のある時期に西に移った東門の南に隣接する地域を対象とした。ここでは、８世紀中頃から 10 世紀前半にかけての官衙を検出し、これらが６時期に変遷する事が確かめられ、大畑地区全体の変遷を解明するための手掛りが得られた。また、10 世紀の地鎮に関する資料や全国的にも極めて資料の少ない８世紀中頃の私馬に関する漆紙文書の発見も注目すべきものであった。

第 57 次調査はこれまで外郭線の位置と構造が不明確であった大畑地区南端付近を対象としたものであったが、中世の大溝等の削平による破壊のため、外郭線の位置を推定するに止めざるをえなかった。

特別史跡多賀城跡の調査および整備活用の促進は広く県民から要望されているところである。当研究所では所員一同このことを認識し、多賀城の解明に努力する所存である。本年３月には多賀城へ供給した製鉄遺跡のひとつとして多賀城市柏木遺跡が特別史跡多賀城跡附寺跡に追加指定された。悦ばしいかぎりである。

本年度も多賀城跡調査研究指導委員会・文化庁の諸先生には適切なご指導・ご助言をいただいた。また、県当局、多賀城市の関係各位をはじめ、多くの方々から当研究所業務についてご理解とご援助をいただいた。巻頭にて関係各位に深く感謝の意を表したい。

平成２年３月

宮城県多賀城跡調査研究所
所長　桑原滋郎

目　次

Ⅰ　調査の計画……1
Ⅱ　第56次調査……4
　1　調査の目的……4　　4　発見した遺構と遺物……11
　2　調査経過……6　　5　考　　察……70
　3　基本層序……8
Ⅲ　第57次調査……79
　1　調査の目的と経過……79　　3　考　　察……91
　2　発見された遺構と遺物……82　　4　ま と め……95
Ⅳ　付　　章……95
　1　関連研究・普及活動……96　　2　研究成果刊行物……97
図　版

例　言

1．本書は平成元年度に実施した多賀城跡第56次調査の概要と第57次発掘調査の報告を収録したものである。

2．発掘調査の測量原点は政庁正殿跡（SB150B）の南入側柱列の中央に埋設したコンクリート柱である。この原点と政庁南内のほぼ中心を結ぶ線を南北の基準線、原点を通りこれに直交する線を東西の基準線と定めた。南北の基準線の方向は真北に対して1°04′00″東に偏している。

　遺構の位置は、南北・東西の基準線からの距離で示すこととし、例えば南北の基準線から東へ50mの位置はE50ないしE50mのように記している。

3．政庁跡の遺構期と瓦の分類基準については、宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡－政庁跡本文編－』1982による。

4．土色については『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄：1976）を参照した。

5．本書の作成にあたっては桑原滋郎・高野芳宏・丹羽　茂・古川雅清・後藤秀一・村田晃一・柳沢和明の協議・検討を経て、執筆はⅠ・Ⅳを古川、Ⅱ－1・2・3・5を後藤、Ⅱ－4を後藤・古川、Ⅲを柳沢が分担し、編集については後藤が担当した。またこれらの作業を古川淳一、多田玲子、小林史子、富士宏子、及川禎子、小野千恵子、千田祐美恵、神山晶子、後藤はつみ、阿部美津子、鈴木文子、佐藤友子、小幡悦子、斉藤由起が援けた。

I　調査の計画

平成元年度は第24回多賀城跡調査研究指導委員会（1988）で承認された第5次5か年計画の初年次にあたり、大畑地区および外郭東辺南半部を対象に実施した。

大畑地区および外郭東門地区を対象にした調査は、これまで第13、14、23、53、54次調査を実施している。大畑地区では外郭東門から城内に通ずる道路跡と道路跡の南側で、八脚門跡や多数の竪穴住居跡などを検出している。また、外郭東門、東辺については、第53・54次調査(研究所年報 1988)の結果、奈良時代と平安時代で位置をかえていることが判明している。

しかし、調査は大畑地区の北西部を主に実施しており、本地区全体における遺構の分布状況の把握が充分ではないこと、さらに外郭東辺の移動が判明した結果、外郭東辺の位置の確認および、これまで城外と考えられていた地域の奈良時代における遺構の存在や、変遷を把握する調査の必要性が生じたことなどにより、当地区を中心とした継続調査を計画し、実施することとした。

第56次調査は、まず遺構の東西方向の分布状況の把握に主眼をおいた。調査区は第23次調査区の東端部から東へ約110mに位置する奈良時代のSF380築地跡までの間に設定した。なお、調査区のほぼ中央部をSF300築地跡と重複している農道が南北に通るため、その東側を東地区、西側を西地区とした。この他に第23次調査で検出したSD706東西溝の東端部の状況を確認するため、北西地区を設定した。

第57次調査は、政庁東側の作貫地区の南南東に張り出す丘陵とその前面に広がる沖積地とが接する丘陵の突端の地点を対象とした。外郭東辺におけるこれまでの調査結果(第11、24、41、51、52、55次調査)を踏まえ、低湿地から丘陵にかかる地域での外郭東辺の位置を確定してその構造と変遷を把握することを目的として計画した。

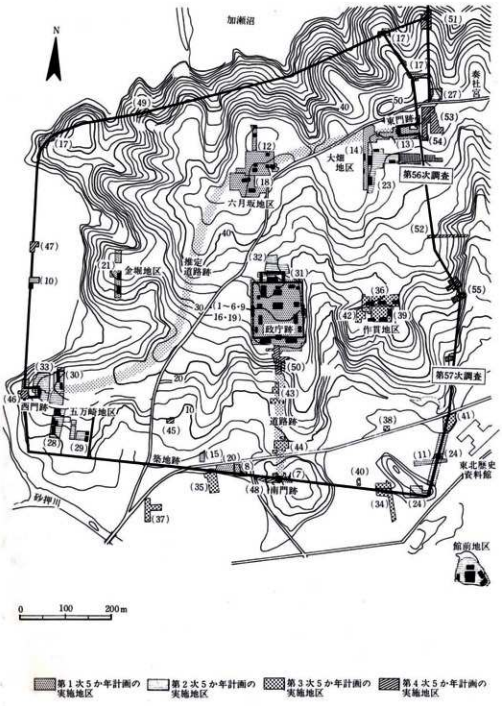
本年度の調査実施地区と実施状況は第1図、表1に示した通りである。また第5次5か年計画は表2の通りである。

年次	次数・発掘調査地区		調査面積			予算
平成元年度	第56次調査	東地区	1,000㎡	1,550㎡	2,050㎡	29,000千円
		西地区	500㎡			
		北西地区	50㎡			
	第57次調査		500㎡			

表1　平成元年度発掘調査実績

年次	次数・発掘調査地区	調査面積	予算
平成2年度	(1)　第58次　大畑地区	1,500㎡	3,000㎡	35,000千円
	(2)　第59次　大畑地区	1,500㎡	
3年度	(1)　第60次　大畑地区	1,500㎡	2,000㎡	35,000千円
	(2)　第61次　湧ノ池地区	500㎡	
4年度	(1)　第62次　大畑地区	1,500㎡	2,300㎡	35,000千円
	(2)　第63次　政庁南西前面地区	800㎡	
5年度	(1)　第64次　大畑地区	1,500㎡	2,300㎡	35,000千円
	(2)　第65次　城前地区	800㎡	
合計	8　地区		9,600㎡	140,000千円

表2　多賀城跡発掘調査第5次5か年計画（第2年次以降）



第1図　多賀城跡調査実施地区　（　）は調査次数

Ⅱ　第 56 次調査

1．調査の目的

【調査対象地】

第 56 次調査は、多賀城跡の北東部に位置する外郭東門の西側に隣接する通称大畑地区を対象に実施したものである（第 1 図）。本地区は、東側を外郭東辺に、また西側を南から入り込む沢によって画されている南へ緩やかに傾斜する丘陵平坦面となっており、その範囲は南北・東西ともおよそ 300mほどである（第 2 図）。

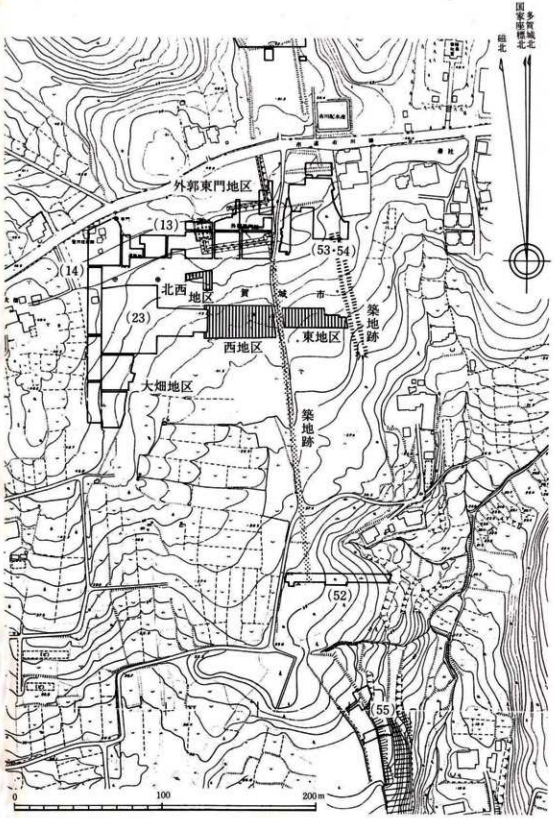
【これまでの調査の成果】

大畑地区および外郭東門地区については、これまで第 13・14・23・53・54 次調査を実施している（第 1 図）。大畑地区では、北西部～外郭東門周辺を中心に調査を実施してきており、外郭東門から城内へ通ずる道路跡とその道路跡の南側で八脚門跡、さらにその南で柱筋を揃えて南北に並ぶ 2 棟の南北棟建物跡をはじめとして、多数の建物跡・竪穴住居跡などを検出している。そしてこれらの各遺構では、八脚門跡と 2 棟の南北棟建物跡（奈良時代）→建物跡・竪穴住居跡群（平安時代）→建物跡といった変遷が考えられている。

外郭東門・東辺については、一昨年度・昨年度実施した第 53・54 次調査の結果、奈良時代と平安時代で位置を変えていることが判明した。すなわち、それまで創建期からの外郭東門・東辺築地と考えてきた城内に「コ」字状に入り込んだ位置にある SB307 外郭東門跡とそれに取り付く SF300 築地跡の東側で、新たにそれ以前の奈良時代の外郭東門（SB1762）・東辺築地（SF380）を検出したのである。そしてこの SB1762 と SF380 が 780 年（宝亀 11 年）の伊治公呰麻呂の乱で焼失した外郭東門・築地であり、城内に「コ」字状に入り込んだ位置にある SB307 とそれに取り付く SF300 は、SB1762 と SF380 の一時的な修復の後に、新たに西側に位置をかえて造営された平安時代の外郭東門・築地であることを把握したのである。したがって、これまで未調査であった両築地跡で囲まれた地域は、実は奈良時代には城内であることが明らかになったのである。

【調査の目的】

以上のような調査成果を踏まえ当研究所では、今年度から始まる第 5 次 5 ヵ年計画の中で、大畑地区における官衙ブロックの解明を主な目的とした継続調査を予定している。今回の第 56 次調査はその初年度にあたることから、まずこれまでの調査で検出されている遺構の東西方向の分布状況の把握に主眼をおいて実施した。そこで調査区は、これまで未調査であった両築地跡で囲まれた地域における遺構の分布状況の把握も含めて、第 23 次調査



第２図　第56次調査区と周辺の地形図

区の東端部からその東約 110m に位置する奈良時代の SF380 築地跡までの間に設定した。なお調査区は、ほぼ中央部を SF300 築地跡と重複している農道が通るため東西に分断されており、東側を東地区、西側を西地区とした。この他第 23 次調査で検出した SD706 溝の性格を追及するために北西地区を設定した（第 1 図）。

2．調査経過

第 56 次調査では前述のように、東・西・北西の 3 地区の調査を実施した。東地区からその経過についての概要を記述してゆくことにする。

「東地区の調査」

東地区の調査は、4 月下旬から木の伐採・抜根作業を開始し、5 月 29 日から表土剥ぎに取りかかった。表土下には炭化物を多く含む暗褐色土の第 2 層が調査区のほぼ全域に分布していた。そこでこの第 2 層上面で遺構検出を行ったが、若干の小ピットを検出しただけであることから、それらを掘り下げた後に第 2 層を除去した。その結果、SB1930 建物跡、SD1815・1931・1932・1937 溝、SE1933 井戸、SK1934・1935 土壙などを検出したが、一方調査区内では堆積層の状況が複雑であることも判明した。すなわち調査区中央部～東半部ではマンガン粒が多く付着する暗褐灰色土である第 3・4 層が分布していたが、その東には奈良時代の SF380 築地の崩壊土とみられる焼土・炭化物・瓦を多量に含む黄褐色土・褐色土が、また西側には調査区西端部で平安時代の SF300 築地の崩壊土が、さらに SD1815 の東側には東西幅 2 mほどで南北に帯状に続く SD1815 溝を掘り上げた時の残土とみられる黄褐色地山小ブロック・岩盤ブロックを多量に含む褐灰色土がみられ、これらが複雑に堆積していることが予想されたのである。

その後 SD1815 と重複して新しい SK1934・SE1933 を完掘し、その他の各遺構の精査を進めた結果、検出面は SK1935 土壙が地山面、SB1930 建物跡が第 4 層上面、SD1932 溝が第 3 層上面であることが判明するなど、遺構面も複数存在することを把握した。そこでこの時点で平面図の作成が必要と考えられたため、平面実測に取りかかった。その後の調査は、西地区・北西地区の調査の終了後に行う予定であったが、調査期間の関係から本年度は、SB1930 建物跡、平安時代の SF300 築地に伴う SD1815 溝についてだけ断ち割り調査を行うことにし、その他のものについては来年度改めて行うことにした。

「西地区の調査」

西地区の調査は 7 月 5 日から表土剥ぎを開始した。その結果、西半部では直ちに地山や岩盤が露われたが、東半部では調査区中央部から東端部の平安時代の SF300 築地に伴う

城内側の SD1910 溝にかけて、西側から黒褐色土の第４層、須恵系土器を多量に含む黒褐色土の第２B 層、暗褐色土の第２A 層が分布していた。これらの各堆積層のなかで、第２B 層・第２A 層は斑状に凹みに薄く堆積したもので上面では遺構を検出することはできなかったが、第４層上面では SB1893～1896 建物跡、SX1928 土器埋設遺構を検出した。一方中央部から西半部の地山面で SB1881～1890・1897～1900 建物跡、SI1902～1904 竪穴住居跡、SX1906・1908 土器埋設遺構、SE1909 井戸の他 SD1910・1911 溝、SK1912～1916・1918・1920・1929・1954・1956 土壙などを、また西端部北半の地山面で SX1907 土器埋設遺構、南半の岩盤面で SB1891・1892 建物跡、SI1901 竪穴住居跡、SX1905 土器埋設遺構などを検出した。

これらの各遺構の精査を進めた結果、４棟の竪穴住居跡は出土遺物からいずれもほぼ同時期のもので建物跡より古く（A 期）、建物跡で B 期：SB1881～1883→C 期：SB1884・1885・1897・1898→D 期：SB1886・1887→E 期：SB1888～1892→F 期：SB1893～1896→G 期：SB1899・1900 という６時期の変遷を把握できた。また SK1929 は平安時代の SF300 築地に伴う城内側の SD1910 溝と重複してこれより新しい土壙であり、その堆積層には基本層序の第４層、灰白色火山灰層の第３層、第２B 層がみられた。この他 SX1905 土器埋設遺構は、自然石６個を納めた須恵系土器の甕の口縁部に須恵系土器の杯 12 個を重ねて小土壙に埋設したものであり、G 期の地鎮の跡の可能性が考えられた。

遺物で注目されるものとしては、SI1903 竪穴住居跡の床面から出土した漆紙文書がある。これは馬と馬に関係する人物に関するもので、天平６年の出雲国計会帳に見られる伯(百)姓牛馬帳のような私馬の帳簿と考えられた。その後写真撮影、平面実測、断ち割りなどの補足調査を行い 12 月 12 日に調査を終了した。

「北西地区の調査」

西地区の調査と併行して北西地区の調査を実施した。北西地区では西端部の地山面で、東端部が北へ屈折する東西溝を検出した。この溝は、第 23 次調査で検出した SD706 溝の東延長線上に位置することから、SD706 溝と一連のものと考えられた。SD706 溝は、断ち割り調査の結果自然堆積で埋没したとみられ、方向が平安時代の SB307 外郭東門から城内側へ通じる道路の方向とほぼ一致し、東門の手前で北へ折れ曲がり、本調査区の北に位置する第 13 次調査区内まで延びていないことから、平安時代の道路の南側溝の可能性が高くなった。

なお調査面積は、東地区が約 500 ㎡、西地区が約 1000 ㎡、北西地区が約 45 ㎡である。またこの間、一応の成果が整理できた 12 月３日に報道機関に対して調査成果を発表し、６日には一般を対象とした現地説明会を実施した。

3．基本層序

東地区、西地区、北西地区の順に記述してゆく。

「東地区」

第１層：暗褐色（10YR3/4）土の表土で、厚さは 15～20cm である。

第２層：炭化物・焼土を含む黒褐色（10YR2/1）土で調査区全体にみられ、南東部にかけて厚く堆積している。厚さ 10～15cm である。

第３層：明黄橙色（10YR7/8）地山細粒を含む締まりのない灰色(5Y5/1)土で調査区中央部付近で部分的にみられる。厚さ約 10cm 以内である。

第３A 層：焼土粒・炭化物・黄褐色地山土ブロックを多く含む灰色(5Y5/1)土で、調査区中央部南端部で検出した東西溝の南側に分布している。

第４層：多量のマンガン粒の付着する硬く締まった灰褐色(10YR4/1)土で調査区東半部に分布している。厚さ約 15cm である。

第５層：地山で、岩盤小粒を含む黄橙色(10YR7/8)～赤褐色(5YR4/6)土である。

第５層以下は凝灰岩の岩盤である。

「西地区」

第１層：東地区と同様に暗褐色(10YR3/4)土の表土で、厚さは 10～20cm である。

第２A 層：炭化物・焼土を少量含む暗褐色(10YR3/4)土で、調査区東半部に分布している。厚さ５cm 以内である。

第２B 層：炭化物・焼土を多量に含む黒褐色(10YR2/2)土で、調査区東半部に分布し、南側ほど厚く堆積している。厚さ 10cm 以内である。

第３層：灰白色火山灰層。SK1929 土壙の堆積層中にみられる。厚さ約５cm である。

第４層：炭化物・焼土を多量に含む黒褐色(10YR2/2)土で、調査区東半部で検出した平安時代の SF300 築地に伴う城内側の SD1910 大溝と SK1929 土壙の堆積層中とその西側に分布し、南側ほど厚く堆積している。厚さ 10cm 以内である。

第５層：黄褐色(10YR5/6)地山土小ブロックを含む褐灰色(10YR4/1)土で、調査区東半部で斑状にみとめられる。厚さ２～３cm である。

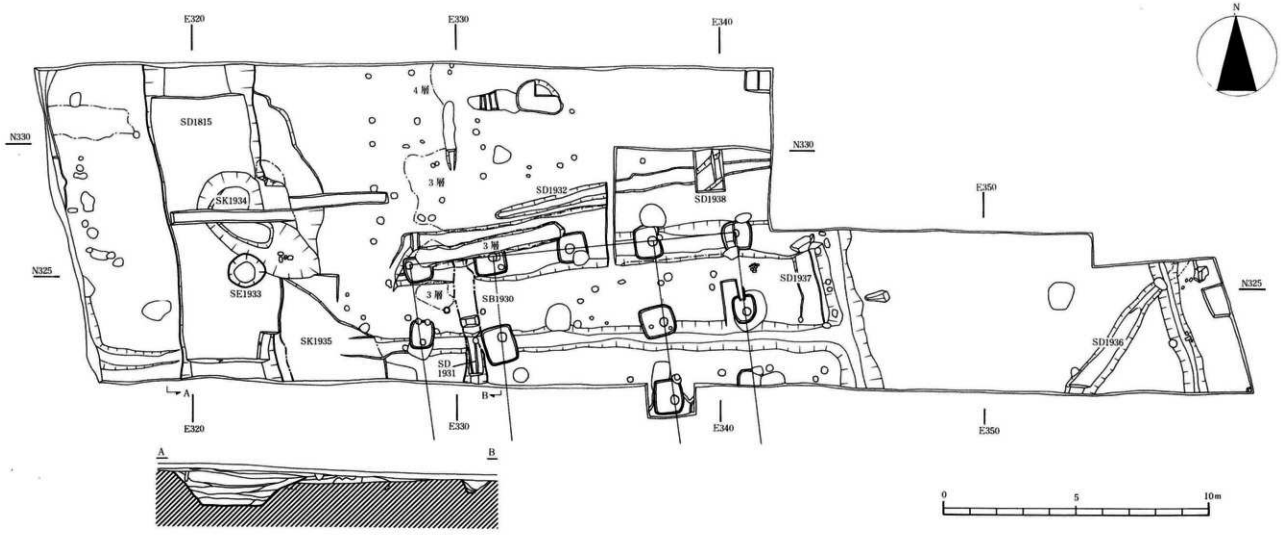
第６層：地山で、岩盤小粒を含む黄橙色(10YR7/8)・黄褐色(10YR5/6)土である。

第６層以下は凝灰岩の岩盤である。

「北西地区」

第１層：暗褐色(10YR3/4)土の表土で、色調で３層に細分され、厚さ約 25cm である。

第１層以下は凝灰岩の岩盤である。



第３図　東地区検出遺構全体図

4．発見した遺構と遺物

今回の第 56 次調査は、調査区を東地区・西地区・北西地区の３箇所に設定したことは前述の通りである。以下では各地区の概要について東地区から記述してゆくことにする。

なお遺物の記載については、土器では土師器の内面黒色処理されているものを内黒、両面黒色処理されているものを両黒とし、また瓦は整理が終了していないため、現段階で判明したことだけを記載することにした。

１．東　地　区

東地区の調査は、調査期間の関係から途中で終了せざるを得なかった。また遺物の整理も終了していないことからここでは検出した遺構についてだけ概略を報告する。なお、東地区については、東地区の南を対象とした第 59 次調査を来年度実施する予定であることから、これと合わせて改めて報告を行うことにしたい。

東地区で検出した主な遺構には建物跡１、SF300 築地に伴う城外側の大溝１の他、井戸１、土壙２、溝４がある。建物跡から概要を説明する。

（1）　建　物　跡

SB1930（第３・４図）

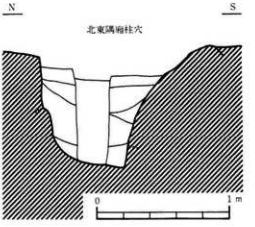
南北３間以上、東西４間の東西廂付の南北棟掘立式建物跡である。方向は東側柱列でみると発掘基準線に対し、北が西に約７度偏している。柱穴は建物の南半部が調査区外であるため北半部のみであるが、第４層上面で検出し、そのすべてで柱痕跡を確認した。

平面規模は、桁行方向の総長が不明であるが、柱間は東入側柱列で北より 3.07m・2.94 m である。梁行は身舎部分の北妻で総長が 6.07m、柱間が西より 2.95m・3.12m である。また廂の出は西が 3.14m、東が 3.11m である。

柱穴は身舎が一辺約 1.1m、廂が一辺約 1.0m 程の方形で、壁は若干斜めに掘り込まれ、深さは約 0.8m 程残っている。柱は身舎が径 0.3～0.35m、廂が径 0.2～0.25m である(第４図)。

なお本建物跡は第３層に覆われていた。

遺物はいずれの柱穴からも出土していない。



第４図　SB1930 建物跡柱穴断面図

（2） 溝

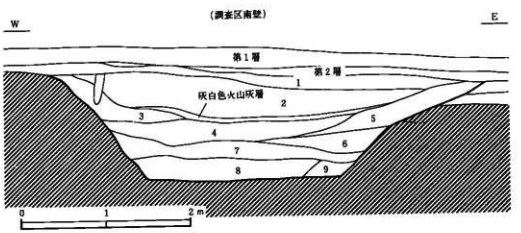
SD1815（第３・５図）

調査区西端部の地山面で検出した平安時代の SF300 築地に伴う城外側の大溝である。第 54 次調査で検出した平安時代の SF300 築地に伴う城外側の SD1815 大溝の南延長線上に位置する。方向は、中心でみると北で約７度西へ偏している。上端幅 4.0～4.2m、底面幅 2.2～2.4m、深さは約 1.3m 残っている。断面は逆台形をなし、底面は平坦で南へ傾斜している。

堆積土は 10 層に細分され、第４層の灰白色火山灰層を除けばいずれも地山や岩盤小ブロック・細粒を含む褐灰色土・灰黄褐色土である(第５図)。

本溝は、SE1933 井戸、SK1934 土壙と重複し、いずれよりも古い。

遺物は須恵器・土師器・須恵系土器・瓦が出土している。

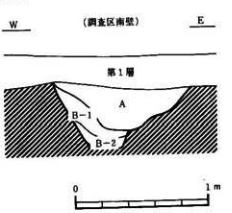


第５図　SD1815 大溝断面図

SD1931（第３・６図）

調査区西半部南端の第４層上面で検出した南北溝である。調査区内では長さ約５m 検出しているが、さらに調査区の南へ延びている。本溝は、２箇所での断ち割り調査の結果、重複しているとみられた(第６図)。

新しい溝は上端幅約１m、底面幅約 0.3m で、深さは約 0.3m 残っており、方向は溝の西上端部でみると北で約５度西へ偏している。



第６図　SD1931 溝断面図

断面形は歪んだU字形をなす。堆積土は、黄褐色地山細粒・焼土・炭化物・暗褐色土小ブロックを含む褐灰色土の1層である。

古い溝は、東上端部が新しい溝によって壊されているため推定であるが、上端幅 0.7m 前後、底面幅約 0.3m で、深さは約 0.5m 残っており、方向は底面の中心でみると北で約5度西へ偏している。断面形は逆台形をなす。堆積土は黄褐色地山細粒・暗褐色土小ブロックを含む褐灰色土で、含有物の多寡により上した2層に分けられる。

なお、本溝は SB1930 建物跡と重複しているが、直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。また性格については今年度の調査で決めきれなかったため、来年度の第 59 次調査で再度検討する予定である。遺物は出土していない。

SD1932（第3図）

調査区中央部北寄りの第3層上面で検出した東西溝で、平面確認に留めてある。長さ約 11m 検出しているがさらに調査区の東へ延びる。方向は中心でみると、西で約 11 度南へ偏している。上端幅 0.5～0.7m、底面幅約 0.3m、深さは 10～15cm 残っており、断面は緩やかなU字形をなす。堆積土は黄褐色地山細粒、炭化物を含む褐灰色土である。遺物は出土していない。

SD1937（第3図）

調査区東半部の第3層上面で検出した南北溝で、平面確認に留めてある。約5m検出しているが、さらに調査区の南北両側へ延びる。方向は中心でみると、北で約 11 度西へ偏している。上端幅 0.7～0.9m、底面幅 0.6～0.7m、深さは 10cm 前後残っており、断面は浅く緩やかなU字形をなす。堆積土は焼土・炭化物を少量、黄褐色地山・岩盤小ブロック、暗褐色土小ブロックを含む褐灰色土である。遺物は出土していない。

SD1938（第3図）

調査区中央部北寄りに設定した試掘抗の第5層(地山面)上面で検出した東西溝である。長さ約1m 検出しただけであるが、方向は中心でみると、北で約 36 度東へ偏している。上端幅約1m、底面幅 0.6m、深さは約 30cm 残っており、断面は逆台形をなす。堆積土は黄褐色地山細粒を含む褐灰色土である。なお本溝は第4層に覆われている。遺物は出土していない。

（3） 井戸・土壙

SE1933（第3図）

調査区西端部で検出した素掘りの井戸である。平面形・規模は径約 1.2m、壁はほぼ垂直に掘られ、深さは約 1.3m 残っている。堆積土は黄褐色地山細粒・岩盤小ブロックや少量の炭化物を含む褐灰色土で、含有物の多寡で4層に細分される。また最下層はグライ化

した粘質土で青灰色を呈する。本井戸は、SD1815・SK1934 土壙と重複し、いずれよりも新しい。

遺物は須恵器・土師器・須恵系土器、瓦の他木製品の椀が出土している。

SK1934（第３図）

調査区西端部で検出した土壙である。平面形は中央部北側がくびれる楕円形をなし、規模は長径（北西～南東）約 5.7m、短径（北東～南西）約 3.6m で、壁は緩やかに立ち上がり、特に南東部では途中に平坦面がみられる。深さは約１m 残っている。

堆積土は９層に細分される。１～３層は黄褐色地山細粒・岩盤小ブロック、炭化物を含む褐色土・暗褐色土、４～６層は黄褐色地山細粒・岩盤小ブロック、炭化物を含むグライ化した暗オリーブ灰色粘質土、７層は砂質層、８・９層はグライ化した灰オリーブ粘土である。本土壙は SD1815 大溝・SE1933 井戸と重複し、SD1815 より新しく SE1933 より古い。

遺物は須恵器・土師器・須恵系土器、瓦の他木製品の皿・椀が出土している。

SK1935（第３図）

調査区西半部南端の地山面で検出した土壙であり、さらに調査区の南へ延びる。西半部を SD1815 に大きく壊されているため平面形は不明であるが、東西・南北とも４m 以上で、深さは完掘していないが SD1815 の東壁で見ると 10cm 前後残っている。堆積土は黄褐色地山細粒、岩盤小ブロック・細粒、小量の炭化物を含む褐灰色土である。本土壙は SD1815 と重複してこれより古い。遺物は土師器が微量出土している。

（4） 堆積層出土の遺物

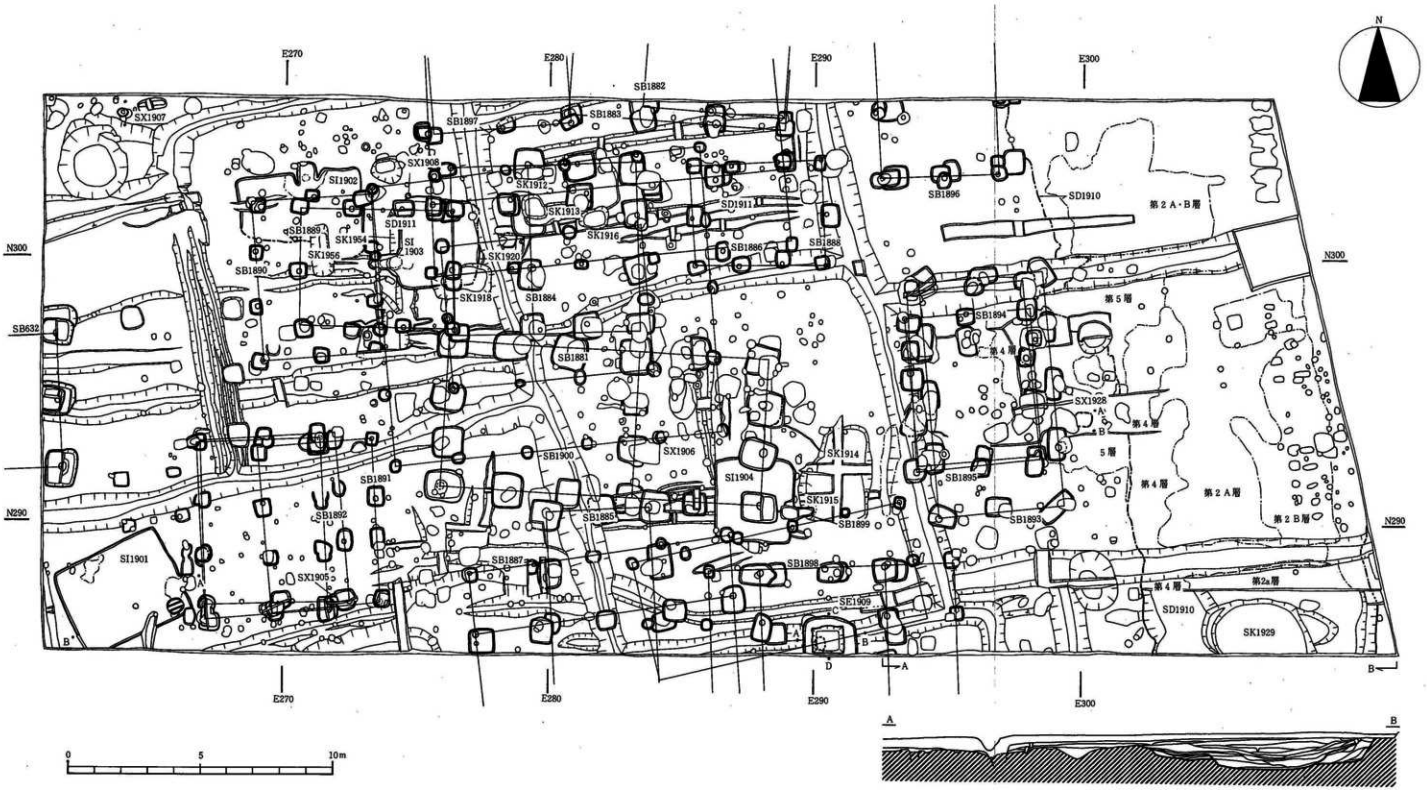
堆積層から出土した遺物については、現在整理途中であるため、ここでは第３層から出土したものについてだけ記述する。

第３層から出土したものには須恵器と土師器がある。いずれも小破片で図示できるものはないが、須恵器では杯・甕・瓶類がある。土師器では、器壁の保存状況が悪く調整の特徴を判断できるものが少ないが、非ロクロ調整と調整不明の内黒の杯と甕があり、明らかにロクロ調整のものは認められない。

２．西　地　区

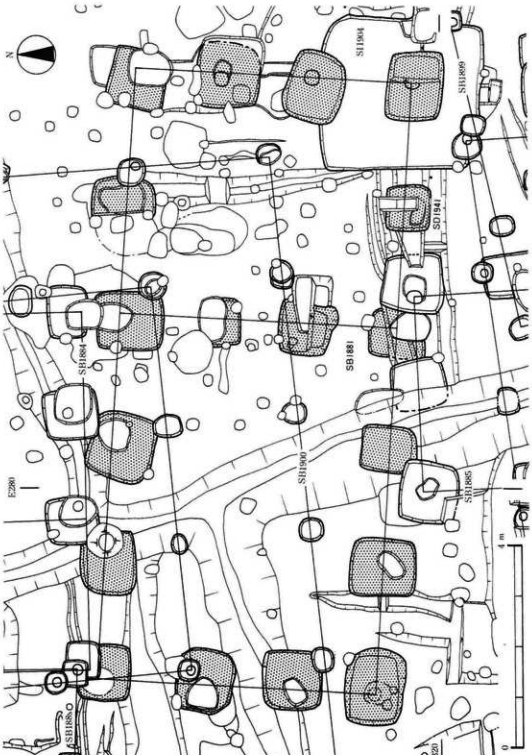
西地区で検出した主な遺構には、同位置での建て替えや部分的な検出も含めて掘立柱建物跡 26、竪穴住居跡４、SF300 築地に伴う城内側の溝１、土器埋設遺構５、井戸１があり、この他多数の土壙・溝・ピットを検出している。ここではこれらの遺構の中で主なものについて建物跡から記述してゆくことにする。

（1） 建　物　跡



第７図　西地区検出遺構全体図

SI1903
第5層　第5層



第８図　SB1881 建物跡・SD1941 溝平面図

SB1881（第８・９図）

東西５間、南北３間の東西棟掘立式建物跡で、東妻より２間目に間仕切を伴う。方向は南側柱列でみると、発掘基準線に対し東が南に約３度偏する。柱穴はすべて地山面で検出し、柱痕跡はこのうち４箇所で確認した。大半の柱穴が柱抜取を伴っている。

平面規模は、桁行が南側柱列で総長 12.17m で、柱間は等間に計画されたと推定すると約 2.43m となる。梁行は柱間が東妻で南より２間分が 1.98m・1.82m であり、等間に計画されたと推定すると両柱間の平均 1.90m であり、総長は約 5.70m となる。

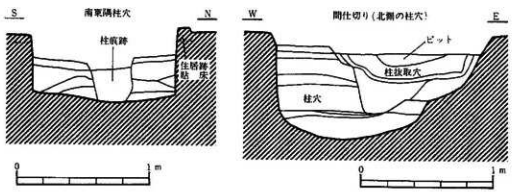
柱穴は間仕切柱穴も含め、一辺 1.2m 前後の方形で、壁はほぼ垂直に掘られ、深さは 0.9 m 前後残っている。柱穴埋土は、互層をなし丁寧に突き固められている。柱は柱痕跡より径 0.3～0.35m である（第９図）。

本建物跡は、これより古い SI1904 と、また新しい SB1884、SB1885、SB1889、SB1900、SD1941 と重複している。なお、SI1904 は人為的に埋戻されており、これは本建物構築に際して行われたものと考えられる。

遺物はすべて破片資料であるが、柱穴と抜取穴から須恵器と土師器が出土している。

柱穴から出土したものには須恵器の杯１点、土師器では非ロクロ調整の杯、甕と調整不明の高台杯、甕がある。このうち杯・高台杯はすべて内黒で杯の中には体部外面に弱い屈曲がみられるものがある。この他調整不明の甕の内面には漆状物質が付着しているものがみられる。

抜取穴からは少量の須恵器と比較的多量の土師器が出土している。須恵器には杯、瓶類があり、このうち杯には底部がヘラ切り無調整のものがみられる。土師器は非ロクロ調整のものが主体を占め、これにロクロ調整のものが微量みられる。非ロクロ調整のものには内黒の杯、甕があり、杯の中には体部外面の口縁部と、体部の境に沈線がみられるものがある。ロクロ調整のものには内黒の杯、甕があり、杯の中には底部が回転ヘラ削り調整・



第９図　SB1881 建物跡柱穴断面図

手持ちヘラ削り調整のものがみられる。

SB1882（第 10 図）

東西２間分の柱穴より推定したものである。さらに東西には柱穴が存在しないことより、検出した柱穴は南北棟掘立式建物跡の南妻で、建物は調査区外の北へ延びるものと考えられる。方向は発掘基準線に対し、東が南に若干偏している。柱穴はすべて地山面で検出したが、他の建物跡と重複しているため、形状、柱痕跡の有無等は不明である。

平面規模は桁行が不明であるが、梁行は確認した柱穴のほぼ中心に柱位置を想定すると、総長約 5.4m、柱間約 2.7m 等間と考えられる。

なお、本建物跡はこれより新しい SB1883 と重複している。

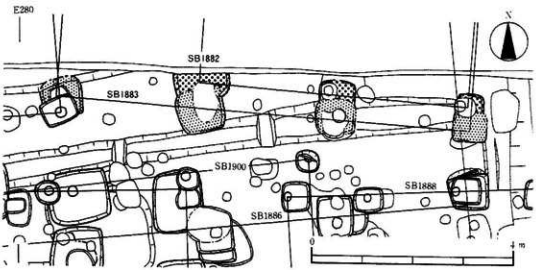
遺物はいずれも破片資料であるが、抜取穴から須恵器の杯と土師器の甕が各２点出土している。須恵器の杯は底部が回転ヘラ削り調整のものであり、土師器の甕は非ロクロ調整で、１点は内黒である。

SB1883（第 10 図）

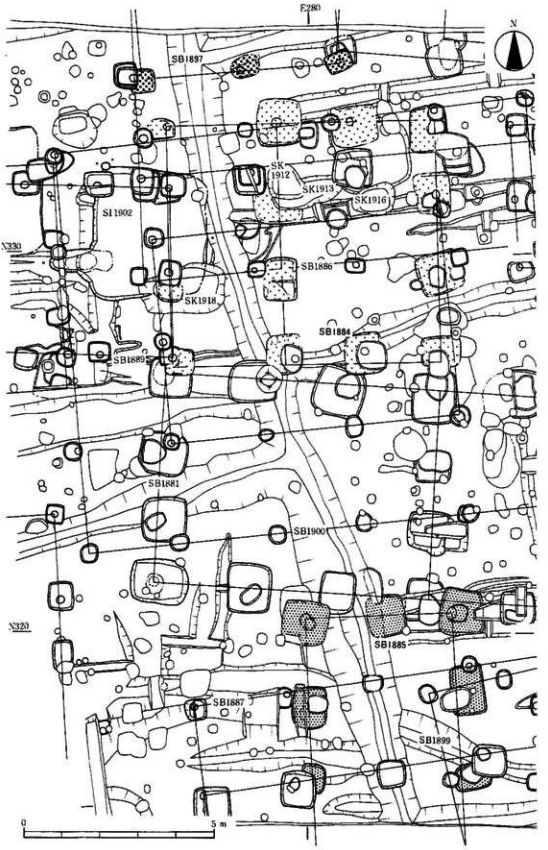
東西３間分の柱穴を検出したもので、東西棟掘立式建物跡と考えられる。方向は発掘基準線に対し、ほぼ SB1881 と同方向で、東が南へ若干偏する。柱穴は地山面で検出し、そのほとんどに抜取穴を、さらにこの中の一つで柱あたり痕跡を確認している。

平面規模は、桁行が総長約 8.1m、柱間約 2.7m 等間と推定される。梁行は不明である。柱穴は一辺 0.8m 前後の方形で、柱は柱あたり痕跡より約 0.3m である。

本建物跡はこれより古い SB1882 と、新しい SB1897 と重複している。なお、SB1881 とは東妻柱筋が揃い、建物の方向も一致することより同時期と推定される。



第 10 図　SB1882・1883 建物跡平面図



第 11 図　SB1884・1885・1897 建物跡平面図

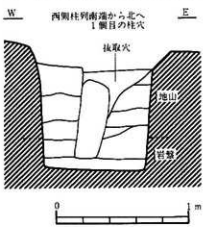
遺物は出土していない。

SB1884（第 11・12 図）

南北３間、東西３間、西廂付きの南北棟掘立式建物跡である。方向は西入側柱列でみると、発掘基準線に対し北が西に約３度偏している。柱穴はすべて地山面で検出し、大半に柱抜取穴が伴っている。このうち身舎で３箇所、廂で１箇所、柱痕跡を確認している。

平面規模は桁行が身舎西側柱列の北端と、それより２間目で確認した柱痕跡を参考にすると、柱間約 2.1m 等間、総長は約 6.3m となる。梁行は東妻の柱痕跡を参考にすると、身舎柱間が 1.95m 等間で、総長は約 3.9m となる。また、廂の出は 2.90m である。

柱穴は身舎が一辺 1.2m 前後の方形で壁はほぼ垂直に掘られ、深さは約 1.0m 残存している。廂部分については一辺 0.7m 前後の方形で、身舎柱穴より小さく浅い。柱穴埋土は、厚さ 0.1m～0.2m で互層をなし、丁寧に突き固められている。柱は身舎、廂とも径約 0.2 m である（第 12 図）。



第 12 図　SB1884 建物跡柱穴断面図

本建物跡はこれより古い SI1903、SB1881 と、また新しい SB1886・1889・1900、SK1912・1913・1918・1954、SD1911 と重複している。

また、SB1885 とは身舎側柱筋を揃え、南北に並んでおり同時期と考えられる。なお、廂については、身舎柱間に比べ廂の出がかなり大きいこと、また柱穴が小さく浅いことなどから土廂の可能性を考えておきたい。

遺物はすべて破片資料であるが、抜取穴から須恵器と土師器が微量出土している。須恵器には杯、瓶類、甕が、土師器にはロクロ調整の甕と調整不明で内黒の杯、甕がある。

SB1885（第 11 図）

南北３間以上、東西２間の南北棟掘立式建物跡である。方向は、北妻でみると発掘基準線に対し、北が西へ若干偏している。柱穴は建物跡北半のみであるが、地山面で検出した。柱痕跡は北東隅の柱穴で１箇所確認している。

平面規模は、柱痕跡以外の柱位置を抜取穴などの状況により推定すると、桁行柱間が約 2.1m 等間で総長は不明である。梁行が総長約 3.8m、柱間約 1.9m 等間となる。

柱穴は一辺 1.2m 前後の方形で、柱は径約 0.3m である。

本建物跡は、これより古い SB1881、また新しい SB1887、SB1899 と重複している。

なお、SB1884 とは東西側柱筋を揃え、南北に並んでいることより同時期と考えられる。

遺物は出土していない。

SB1886A・B（第 13・14・28 図）

東西 5 間、南北 3 間以上の東西棟掘立式建物跡で南側に廂が付く。方向は南入側柱列でみると発掘基準線に対し、東が北へ約 7 度偏する。建物跡北半は調査区外で不明であるが南半は地山面で柱穴を検出した。このうち身舎のみ A・B2 時期があり、廂がどちらに伴うかは不明である。柱痕跡は身舎で 5 箇所、廂で 3 箇所確認している。

平面規模は桁行が総長約 13.5m、柱間約 2.7m 等間、梁行の柱間は身舎が約 2.7m、廂の出が 2.6m 前後で、総長は不明である。

柱穴は B の身舎が一辺 0.8m 前後の方形で、埋土は厚さ 0.1～0.2m 程度の互層をなし、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。廂は一辺 0.5m 前後の不整方形で身舎に較べて若干小さい。柱は身舎が径 0.2～0.25m、廂が径 0.15～0.2m である（第 13 図）。

本建物跡はこれより古い SB1884、SI1903、SK1913 と、また新しい SB1888・1889、SK1916・1918・1954 と重複している。

なお、SB1887 とは方向が同じで西妻柱筋が一致することなどから、両建物は同時期と推定される。

遺物は SB1886A では抜取穴から底部が回転糸切り無調整の須恵器の杯が 1 点出土している。

SB1866B では柱穴から少量の須恵器・土師器、抜取穴から少量の須恵器・土師器の他、軒丸瓦、硯、鞴の羽口が出土している。

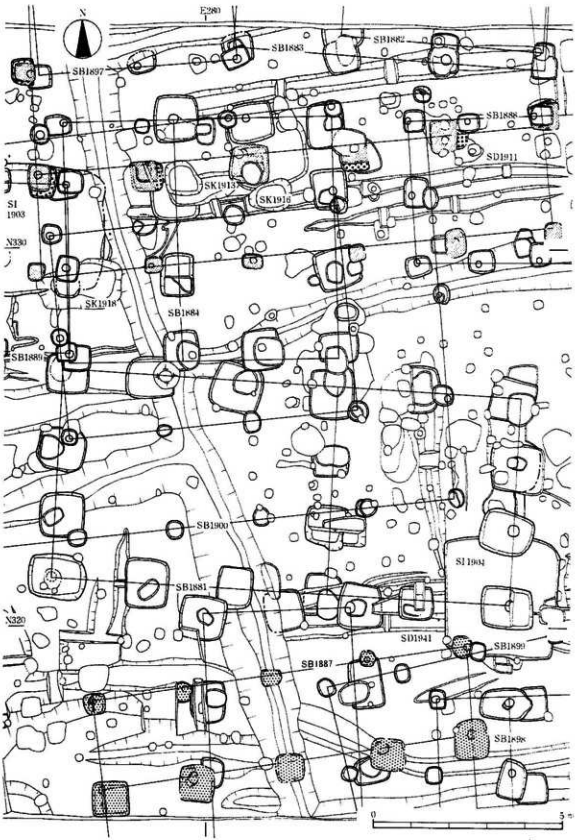
柱穴から出土しているものには、須恵器では杯、瓶類、甕があり、杯には底部がヘラ切り無調整のものがみられる。土師器では非ロクロ調整の甕 1 点、ロクロ調整の甕、調整不明の内黒の杯と甕がある。

抜取穴から出土したものには須恵器には杯、瓶類、甕が、土師器には非ロクロ調整の甕 1 点、ロクロ調整、調整不明の内黒の杯、甕がある。この中で須恵器の杯には底部が回転糸切り無調整のものがみられる。この他、427 歯車文軒丸瓦(第 28 図 12)、鞴の羽口と風字硯の端部の破片が各 1 点出土している。

第 13 図　SB1886 建物跡柱穴断面図

SB1887（第 14・15 図）

東西 4 間、南北 2 間以上の東西棟堀立式建物跡で北側に廂が付く。方向は北側柱列でみると発掘基準線に対し、方向は東が北へ約 9 度偏する。建物跡南半は調

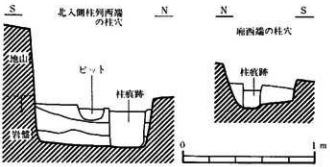


第 14 図　SB1886・1887 建物跡平面図

査区外で不明であるが、北半の柱穴はすべて地山面で検出した。これらの柱穴のうち2箇所を除いて柱痕跡を確認している。

平面規模は桁行が北入側柱筋で西より 2.47m・5.01m(2間分)・2.45m で総長は 9.93m、北廂で 2.50m・4.92m(2間分)・2.64m で総長は 10.06m である。梁行は廂の出が西妻で 2.31m、東妻で 2.26m であり、身舎部分は不明である。

柱穴は身舎が一辺 0.9m 前後の方形で埋土は厚さ 0.1～0.2m の互層をなし、壁は垂直に掘り込まれ、深さは約 0.6m 程残している。廂は一辺 0.5m 前後の不整方形で深さ約 0.2m 程が残り、壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、身舎に較べ小さく浅い。柱は身舎で径 0.25m、廂で径約 0.15m である(15 図)。



第 15 図　SB1887 建物跡柱穴断面図

本建物跡は、これより古い SI1904、SB1885 と、また新しい SB1899 と重複している。

なお、SB1886A・B とは建物の方向が同じで西妻柱筋が一致していることから、両建物は同時期のものと推定される。

遺物はすべて破片資料であるが、柱穴から少量の須恵器・土師器が出土している。須恵器には杯、瓶類があり、この中の杯では底部が回転ヘラ削り調整のものがみられる。土師器にはロクロ調整の甕と調整不明の内黒の杯、甕がある。

SB1888（第 16 図）

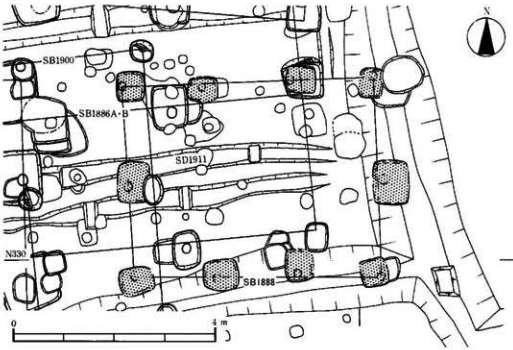
東西 3 間、南北 2 間の東西棟掘立式建物跡である。方向は北側柱列でみると発掘基準線に対し、東が北へ約 3 度偏している。柱穴は、地山面で検出し、柱痕跡もすべての柱穴で確認している。

平面規模は桁行が北側柱列で総長が 5.00m、柱間は西より 1.62m・1.73m・1.65m、南側柱列で総長が 4.91m、柱間は西より 1.67m・1.63m・1.61m である。梁行は西妻で総長が 3.78m、柱間は 2.02m・1.76m、東妻で総長が 3.98m、柱間は 2.06m・1.92m である。

柱穴は一辺 0.6m 前後の方形であるが、大きさ、形状に多少ばらつきがある。柱は径 0.15～0.2m である。

本建物跡は、これより古い SB1886 と、また新しい SB1900、SD1911 と重複している。

遺物はすべて破片資料であるが、柱穴から少量の須恵器・土師器が出土している。須恵器には杯・高台杯、瓶類、甕があり、このうち杯には底部が回転糸切り無調整のもの、ヘ



第 16 図　SB1888 建物跡平面図

ラ切り無調整のものがみられる。土師器には非ロクロ調整の甕、ロクロ調整の内黒の杯、高台杯、甕、調整不明の内黒の杯、甕がある。このうちロクロ調整の杯には底部が回転糸切り無調整のものがみられる。

須恵系土器は杯類の口縁部・体部・底部破片が各 1 点出土している。

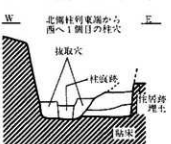
SB1889（第 17・18 図）

東西 3 間、南北 2 間の南北棟掘立式建物跡である。方向は東妻でみると発掘基準線に対し、北が西へ約 1 度偏している。柱穴は地山面で検出し、そのうち 6 箇所で柱痕跡を、また 4 箇所で柱抜取穴を確認している。

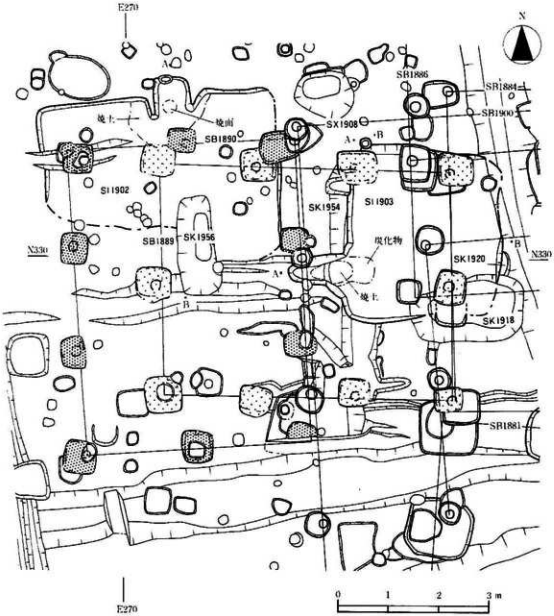
平面規模は、桁行が総長約 5.7m、柱間約 1.9m 等間と考えられるが柱間については多少ばらつきがある。梁行は東妻で総長 4.27m、柱間が北より 2.05m・2.22m である。

柱穴は一辺 0.6m 前後の方形で埋土は厚さ 0.1m 前後の互層をなす。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、深さは約 0.3 m 程残っている。柱は径約 0.2m である（第 17 図）。

本建物跡は、これより古い SI1902、SI1903、SB



第 17 図　SB1889 建物跡
柱穴断面図



第 18 図　SB1889・1890 建物跡・SI1902・1903 竪穴住居跡、SX1908 土器埋設遺構、SK1918・1920・1954・1956 土壙平面図

1881、SB1884、SB1886、また新しい SB1890・1900、SK1918・1954、SD1911 と重複している。

遺物は、柱穴から須恵器の甕の底部破片１点と、土師器ではロクロ調整で内黒の杯の体部破片が各１点出土している。この他、柱痕跡から土師器で調整不明の甕の体部破片が１点出土している。

SB1890（第 18 図）

南北３間、東西２間の南北棟掘立式建物跡である。方向は西側柱列でみると発掘基準線に対し、北が西へ約３度偏する。柱穴は地山および岩盤面で検出し、そのうち６箇所で柱痕跡を確認した。

平面規模は、桁行が西側柱列で総長 5.98m、柱間が北より 1.90m・2.02m・2.06m である。梁行は北妻で総長 4.46m、柱間が西より 2.31m・2.15m である。

柱穴は一辺 0.6m 前後の方形で、柱は径約 0.2m である。

本建物跡は、これより古い SI1902、SB1889 と、また新しい SB1900 と重複している。

なお、SB1891 とは方向が同じで南北に並び、両側柱筋がほぼ一致しているため、同時期の建物と考えられる。

遺物は柱穴から、須恵器では杯の体部破片１点、甕の体部破片２点、土師器では調整不明の内黒と甕が微量出土している。この他種別不明の土器片が１点出土している。

SB1891（第 19・20 図）

南北３間、東西２間の南北棟掘立式建物跡である。方向は東側柱列でみると、発掘基準線に対し、北が西へ約３度偏する。柱穴はすべて地山から岩盤にかけて検出し、そのうち５箇所で柱痕跡を確認した。

平面規模は桁行が東側柱列で総長 4.52m、柱間が北より 2.24m・1.65m・2.28m である。梁行は総長約 4.8m、柱間が約 2.1m 等間と推定される。

柱穴は１辺 0.6m 前後の方形で、壁はほぼ垂直に掘り込まれ、深さは約 0.5m 程が残存している。柱は径 0.2～0.25m である。

本建物跡はこれより新しい SB1892・SX1905 と重複している。

なお、SB1890 とは同方向でほぼ南北に並び、側柱筋がほぼ一致するため、同時期の建物と考えられる。

遺物は、柱穴から須恵器の甕の体部破片が１点出土している。

SB1892A・B・C（第 19・20 図）

南北３間、東西２間の南北棟掘立式建物跡で A・B・C３時期分を確認している。方向は東側柱列でみると発掘基準線に対し、いずれも北が西へ５度前後偏している。柱穴はすべて岩盤面で検出し、残存状況はあまり良くない。このうちいくつかで柱抜取穴を確認している。柱痕跡は A で２箇所、C で２箇所確認したのみである。

平面規模は推定であるが、A は桁行が総長約 6.3m で、柱間約 2.0m 等間、梁行が総長約 5.2m、柱間約 2.6m 等間と考えられる。B・C は、桁行が総長約 6.3m、柱間約 2.1 m 等間、梁行が総長約 4.8m、柱間約 2.4m 等間と考えられる。なお、A の東側柱列の位

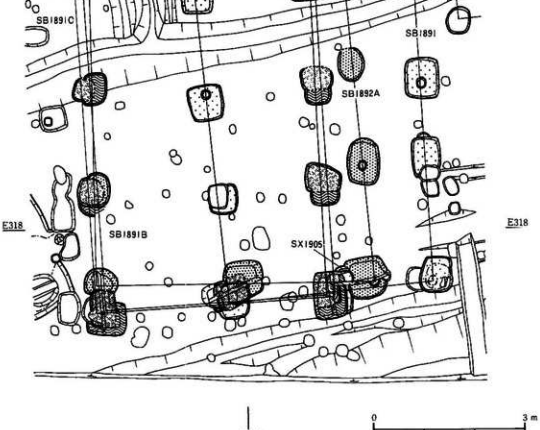
置は、B・C より若干東へずれる。

柱穴は A・B・C いずれも一辺 0.7m 前後の不整方形、または径 0.5～0.7m の円形で、形状、大きさにばらつきがある。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、深さは約 0.4m ほど残っている。柱は A・C で確認している柱痕跡よりいずれも径約 0.15～0.2m である。

本建物跡は、これより古い SB1891 と、また新しい SX1905 と重複している。

遺物は SB1892A・B・C の各柱穴と SB1892C の抜取穴から出土している。

SB1892A の柱穴からは須恵器の杯、瓶類の他、風字硯の底部破片が 1 点出土しており、



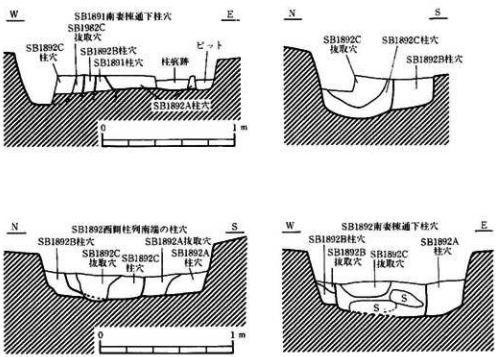
第 19 図　SB1891・1892 建物跡、SX1905 土器埋設遺構平面図

このうち須恵器の杯には、底部が回転糸切り無調整のものがみられる。

SB1892B の柱穴からは須恵器の長頸瓶頸部破片１点、土師器の調整不明で内黒の杯体部破片２点が出土している。

SB1892C の柱穴からは、須恵器の杯、瓶類、甕が少量と、調整不明の土師器の甕体部破片１点が出土しており、この中の須恵器の杯には内面に漆が付着しているものがみられる。

SB1892C の柱抜取穴からは、須恵器の杯口縁部破片が１点出土している。



第 20 図　SB1891・1892 建物跡柱穴断面図

SB1893（第 21・22・28 図）

南北４間、東西２間の南北棟掘立式建物跡である。方向は西側柱列でみると発掘基準線に対し、北が約５度西へ偏している。柱穴はすべて柱抜取穴を伴い、第４層上面で検出した。そのうち３箇所で柱痕跡を確認している。

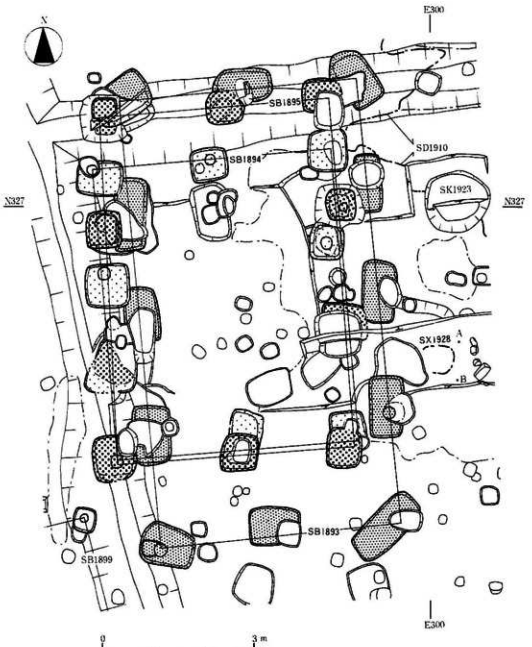
平面規模は桁行が総長 8.81m で、柱間は等間と考えると約 2.2m となる。梁行は柱間を約 2.3m 等間とすると総長は約 4.6m である。

柱穴は長辺 1.2m、短辺 0.7m 前後の長方形で壁はほぼ垂直に掘り込まれ、深さは約 1.0 m 程残っており、埋土は互層となっている。柱は径約 0.2m である。

本建物跡は、これより新しい SB1894、SB1895 と重複している。

遺物は柱穴から少量の須恵器・土師器の他、種別不明の土器片および硯が、また抜取穴から多量の須恵器・土師器の他、鞴の羽口、瓦が出土している。

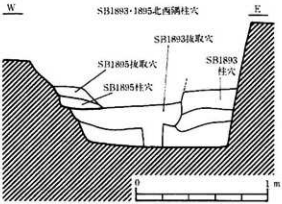
柱穴から出土したものには、須恵器の杯・高台杯、蓋、瓶類、甕があり、杯には底部が



第 21 図　SB1893~1895 建物跡、SX1928 土器埋設遺構平面図

ヘラ切り無調整のもの、手持ちヘラ削り調整のもの、ヘラ切りで手持ちヘラ削り調整のものがみられる。また蓋には硯に転用されたものが1点ある。

土師器には非ロクロ調整の甕の他、調整不明の内黒の杯、甕がある。硯は風字硯の破片で漆状物質が内面に付着している。



第 22 図　SB1893・1895 建物跡柱穴断面図

抜取穴から出土したものには須恵器の杯・高台杯、蓋、瓶類、甕がある。杯には底部が静止糸切りで回転ヘラ削り調整のもの、ヘラ切り無調整のもの、ヘラ切りで手持ちヘラ削り調整のもの（第 28 図 2）、回転ヘラ削り調整のもの、手持ちヘラ削り調整のものがあり、手持ちヘラ削り調整のものが主体を占める。

土師器には、非ロクロ調整とロクロ調整、および調整不明の内黒の杯と甕があり、ロクロ調整のものが主体を占める。この中でロクロ調整の内黒の杯には、底部が回転ヘラ削りのもの(1)がみられる。

この他に輪の羽口1点と丸瓦が1点出土している。

SB1894（第 21・28 図）

南北3間、東西2間の南北棟掘立式建物跡である。方向は梁行方向でみると発掘基準線に対し、東が北に約8度偏している。柱穴は第4層上面で検出し、柱抜取穴を伴うものもあるが柱痕跡を2箇所で確認した。

平面規模は桁行が総長約 5.9m、柱間約 2 m 弱等間で、梁行が総長約 4.4m、柱間約 2.2 m 等間と推定される。

柱穴は一辺 0.7m～1.0m 程の方形で、柱は径約 0.2m である。なお、抜取穴埋土中には焼土、木炭を多量に含むものもある。

本建物跡は、これより古い SB1893 と、また新しい SB1895 と重複している。

遺物はいずれも破片資料であるが、柱穴から少量の須恵器・土師器が、また抜取穴から比較的多量の須恵器・土師器の他、瓦が出土している。

柱穴から出土したものには、須恵器では杯、蓋、甕があり、杯には底部がヘラ切りで手持ちヘラ削り調整のもの(第 28 図 3)がみられる。土師器には非ロクロ調整の甕、ロクロ調整の甕の他、調整不明の内黒の杯、甕がある。

抜取穴から出土したものには、須恵器では杯、蓋（4）、瓶類、甕があり、土師器では非

ロクロ調整の甕、ロクロ調整の内黒の杯、甕、調整不明の内黒の杯、甕がある。この中で土師器のロクロ調整の杯には底部が回転糸切り無調整のもの、回転ヘラ削り調整のものがみられる。瓦は311細弁蓮華文軒丸瓦(11)である。

この他、柱痕跡から須恵器では杯、土師器では非ロクロ調整と調整不明の内黒の杯、ロクロ調整の甕が微量、ロクロ調整のかわらけの小型の杯(5)が1点出土している。

SB1895（第21・22・28図）

南北3間、東西2間の南北棟掘立式建物跡である。方向は発掘基準線に対し、北が西へ若干偏している。柱穴は第4層上面で検出したが、ほとんどの柱穴に柱抜取穴を伴う。そのうちの1箇所で柱あたり痕跡を確認した。

平面規模は桁行が総長約6.9mで、柱間は約2.3m等間、梁行が総長約4.4mで、柱間は約2.2m等間と推定される。

柱穴は一辺0.8m前後の不整方形で埋土は互層になっており、一部埋土中に焼土を含むものもある。柱はあたり痕跡より径約0.15mである。

本建物跡は、これより古いSB1893、SB1894と重複している。

遺物はすべて破片資料であるが、比較的多量の須恵器・土師器が柱穴と抜取穴から出土している。

柱穴から出土したものには、須恵器では杯・高台杯、瓶類、甕があり、杯には底部が静止糸切りで回転ヘラ削り調整のもの、回転糸切りで無調整のもの、手持ちヘラ削り調整（第28図6）のものがみられる。土師器では非ロクロ調整の甕、ロクロ調整と調整不明の内黒の杯、甕があり、ロクロ調整の杯は底部が回転ヘラ削り調整のものである。この他断定できないが須恵系土器の可能性のある杯類の体部破片が1点出土している。

抜取穴から出土したものには須恵器では杯、蓋、瓶類、甕があり、杯には底部が手持ちヘラ削り調整のものがみられる。土師器には非ロクロ調整、ロクロ調整、調整不明の杯、甕があり、このうち杯は、非ロクロ調整のものの中に内面が黒色処理されていないものが1点みられる以外すべて内黒である。この他、種別不明の土器片が1点出土している。

SB1896A・B・C（第23図）

南北2間以上、東西2間の南北棟掘立式建物跡で、A・B・C3時期分を確認している。方向はCの南妻でみると発掘基準線に対し、東が約3度北に偏している。A・Bについても、ほぼ同方向と考えられる。柱穴はA・B・Cとも4層上面で検出し柱抜取穴、柱痕跡は最も新しいCでのみ4箇所確認した。

平面規模は柱痕跡を確認しているCでみると、桁行が柱間2.53mで総長は不明、梁行が総長4.29mで、柱間は南妻西より2.30m・1.99mである。A・Bについてもほぼ同様の規

模と推定される。

柱穴は、A が一辺 1.0m 前後の方形、B が一辺 0.7m 前後の方形、C が径 0.5～0.6m の円形である。柱は C で確認した柱痕跡より径 0.2m 前後である。

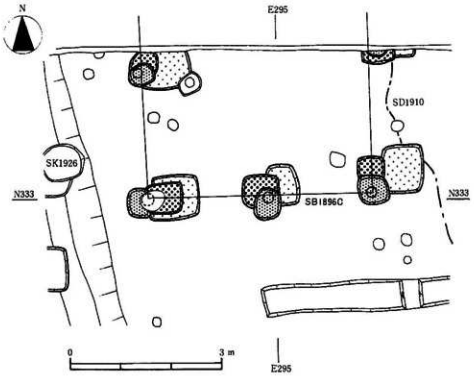
本建物跡は A・B・C いずれもこれより古い SD1910 と重複しているが、検出状況よりこの溝がほとんど埋没してしまった後、建てられたものと考えられる。

なお、本建物跡は A が SB1893 と、B・C が SB1894、SB1895 とほぼ同方向で南北に並び、東・西側柱筋が一致するため、それぞれ計画的に配置された同時期の建物と考えられる。

遺物は、SB1896C については抜取穴出土であることが判明しているが、SB1896A・B については柱痕跡が確認できないことから、抜取穴出土のものとした。

SB1896A 抜取穴から出土したものには、須恵器では杯、蓋、瓶類、甕が、土師器では非ロクロ調整、ロクロ調整の内黒の杯、調整不明の内黒の杯、甕と緑釉陶器の小破片が 1 点出土している。このうちロクロ調整の杯には底部が回転糸切り無調整のものがみられる。

SB1896B 抜取穴から出土したものには須恵器では杯、瓶類、甕が、土師器では非ロク



第 23 図　SB1896 建物跡平面図

ロ調整の甕、ロクロ調整の内黒の杯、調整不明の内黒の杯があり、ロクロ調整の杯には底部が回転糸切り無調整のものがみられる。

SB1896C 抜取穴から出土したものには、須恵器では杯、甕が、土師器では非ロクロ調整の甕、調整不明の内黒の杯、甕があり、この他小破片で断定できないが、須恵系土器とみられる杯類が1点出土している。

SB1897（第11図）

調査区北端で検出した、東西2間分の柱穴を南妻として推定した南北棟掘立式建物跡である。方向は発掘基準線に対し、東が北へ約5度偏している。柱穴はすべて地山面で検出し、その2箇所で柱痕跡を確認している。

平面規模は南妻のみで桁行が不明であるが、梁行は総長約 5.2m、柱間約 2.6m 等間と考えられる。柱穴は一辺約 0.7m の方形で、柱は径約 0.2m である。

本建物跡はこれより古い SB1883 と、また新しい SB1886 と重複している。

遺物は出土していない。

SB1898A・B（第24・28図）

南北2間以上、東西4間で東西に廂の付く南北棟掘立式建物跡である。身舎のみ A・B 2時期を確認している。方向は北妻でみると、発掘基準線に対し東が北へ約3度偏している。柱穴は地山面で検出し、柱痕跡は身舎 B で5箇所、また廂で2箇所確認した。

ところで身舎 A の柱痕跡は確認していないが、B より柱穴の位置が若干東南にずれることなどの検出状況より、柱位置も同様にずれると考えられる。一方、身舎 B と廂で確認した柱痕跡は、梁行方向に柱筋が通り、廂は身舎 A とはずれることになる。従って、柱の位置関係より B の時期に廂が伴うものと考えられる。

平面規模は南側の大半が調査区外で桁行総長が不明であるが、B でみると柱間は 1.84m、梁行は、身舎北妻で西より 2.41m・2.26m であり、廂の出は西が 2.02m、東は推定であるが約 2.5m である。

柱穴は身舎部分が A・B とも一辺 0.9m 前後の方形、廂部分が一辺 0.5m 前後の不整方形で身舎に較べ小さく浅い。柱は身舎が径 0.2～0.25m、廂が径約 0.2m である。

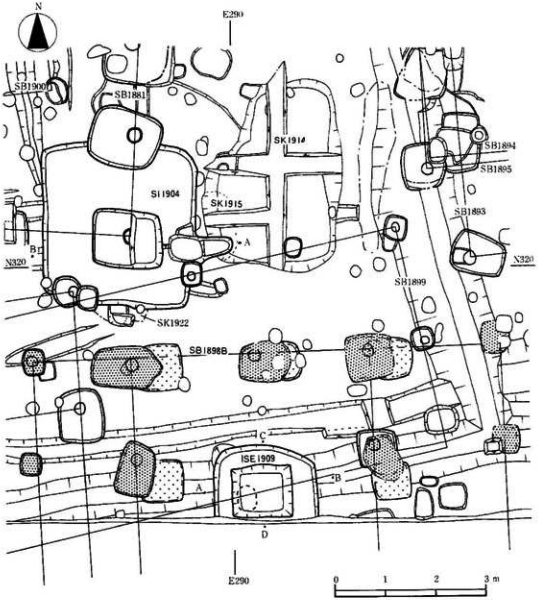
本建物跡は SB1887、SB1899、SE1909 と重複するが、新旧関係は不明である。

遺物はすべて破片資料であるが、SB1898B 柱穴と SB1898A 抜取穴からそれぞれ須恵器と土師器が微量出土している。

SB1898A 抜取穴から出土したものは須恵器の蓋、土師器では非ロクロ調整の甕と調整不明の内黒の杯、甕がある。

SB1898B 柱穴から出土したものには須恵器の杯、土師器では非ロクロ調整の甕、ロク

ロ調整の甕、調整不明の内黒の杯、甕がある。この中の須恵器の杯には底部が手持ちヘラ削り調整のもの(第28図7)がみられる。



第24図　SB1898建物跡、SI1904竪穴住居跡、SE1909井戸、SK1914・1915土壙平面図

SB1899（第25・28図）

東西5間、南北2間の東西棟掘立式建物跡で西南部分が調査区外となる。方向は、北側柱列でみると発掘基準線に対し、東が北へ約13度偏している。柱穴は地山面で検出し、柱

痕跡は３箇所で確認した。

平面規模は推定であるが、桁行が総長約 10.4m で、柱間が 2.1m 弱の等間、梁行が総長約 4.6m で、柱間は約 2.3m 等間と考えられる。

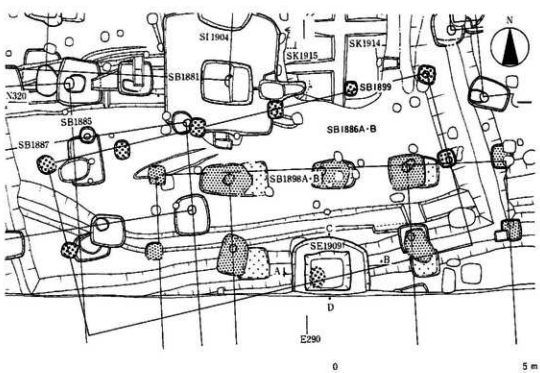
柱穴は径 0.4～0.6m 程の不整円形で深さは約 0.4m 程残存している。埋土は黒褐色土が主体をなし、これより柱穴は２B 層上面より掘り込まれたものと考えられる。柱は径 0.15～0.2m である。

本建物跡は、これより古い SB1885、SB1887、SI1904、SE1909 と、また新しい近世以降と考えられる溝と重複している。

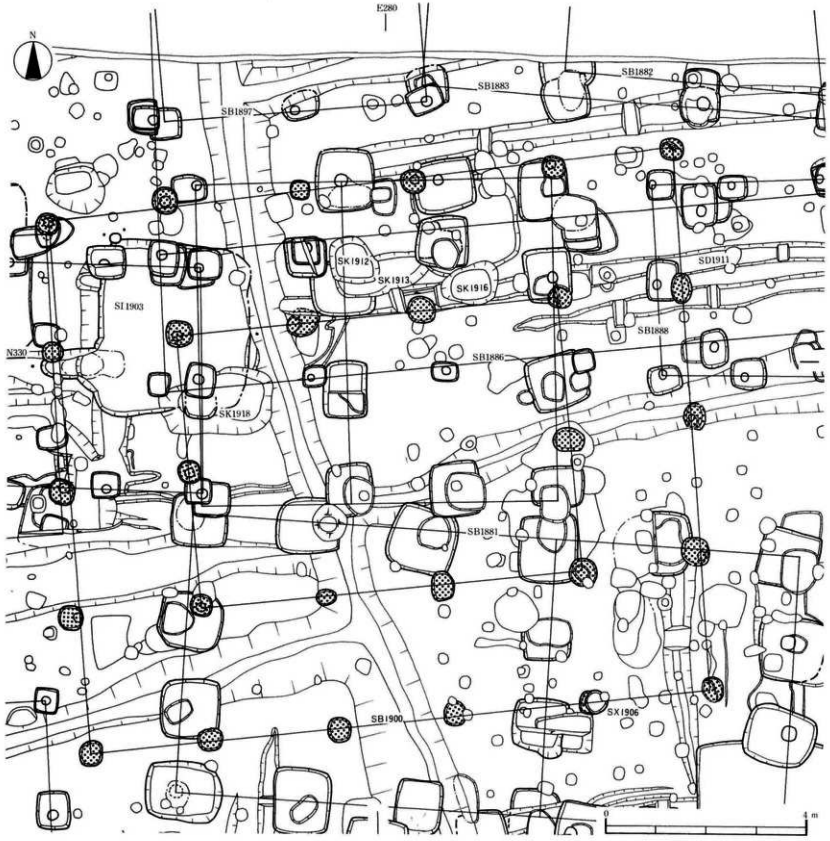
なお、SB1900 とは若干方向が異なるが、柱穴の形状や規模、また埋土の特徴がきわめて類似するため、同時期の建物と考えられる。

遺物はすべて破片資料であるが、柱穴から微量の土師器が、また抜取穴から微量の須恵器・土師器・須恵系土器が出土している。

柱穴からはロクロ調整、調整不明の内黒の杯が出土しており、前者は底部が回転糸切り無調整のものである。



第 25 図　SB1899 建物跡平面図



第26図　SB1900 建物跡、SX1906 土器埋設遺構、SK1912・1913・1916 土壙平面図

抜取穴から出土したものには、須恵器の瓶類、土師器では非ロクロ調整の甕、調整不明の内黒および両黒の杯、甕、須恵系土器の小型杯・小皿(第 28 図 8)がある。

SB1900（第 26～28 図）

東西 5 間、南北 4 間で 4 面廂付の東西棟掘立式建物跡である。方向は北側柱列でみると発掘基準線に対し、東が北へ約 8 度偏する。柱穴は地山面で検出し柱抜取穴、柱穴の大半で柱痕跡を確認している。

平面規模は桁行が身舎北入側柱列で総長 7.26m、柱間は西より 2.68m・4.94m(2 間分)である。梁行は、西入側柱列で身舎部分の総長が 5.26m、柱間は北より 2.70m・2.56m である。廂の出は北で 2.56m、南で 2.72m である。

柱穴は、身舎、廂とも径 0.6m 前後の円形または楕円形で、壁はほぼ垂直に掘られ、深さは 0.7m 程が残存する。埋土は厚さ 0.05～0.1m 程の互層となっており、2 B 層とした黒褐色土が多量に含まれている。これより柱穴は 2 B 層上面から掘り込まれたと考えられる。柱は身舎が径 0.25～0.3m、廂が径約 0.2m である。

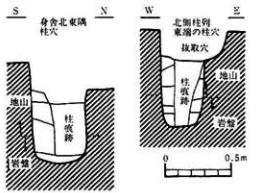
本建物跡はこれより古い SB1881・1884・1888・1889・1890、SI1903、SK1954、SD 1911 と、また新しい SX1906 と重複している。

なお、SB1899 とは方向が若干異なるが、柱穴の形状、規模、および埋土の特徴がきわめて類似することより、同時期と考えられる。

遺物はすべて破片資料であるが、柱穴から少量の須恵器、比較的多量の土師器、少量の須恵系土器が、また抜取穴から少量の須恵器、多量の土師器、比較的多量の須恵系土器の他、少量の瓦および灰釉陶器と石製の巡方が各 1 点出土している。この他、柱痕跡から須恵器・土師器・須恵系土器が少量出土している。

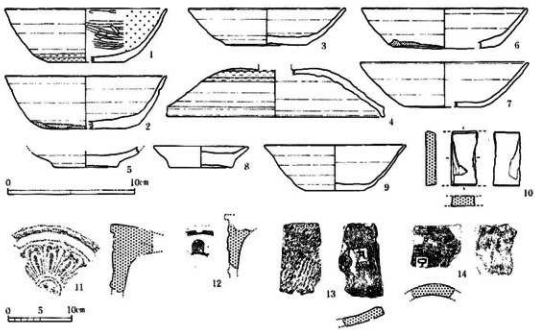
柱穴から出土したものには、須恵器では杯、瓶類、甕、土師器では非ロクロ調整・ロクロ調整の内黒の杯、甕、調整不明の内黒・両黒の杯、甕、須恵系土器の杯類がある。この中で、ロクロ調整の土師器の杯には底部が回転糸切り無調整のものがみられる。

抜取穴から出土したものには、須恵器では杯、瓶類、甕、土師器では非ロクロ調整・ロクロ調整・調整不明の内黒の杯、甕、須恵系土器では杯類(第 28 図 9)と鉢がある。このうち須恵器の杯には底部が回転糸切り無調整のもの、またロクロ調整の土師器の杯には底部



第 27 図　SB1900 建物跡柱穴断面図

が回転ヘラ削り調整のもの、回転糸切り無調整のものがみられる。また須恵器の甕には、底部破片を硯に転用したものが1点ある。灰釉陶器は皿の体部小破片である。瓦は平瓦と丸瓦が各1点出土しており、平瓦には刻印「丸」A(13)が、丸瓦には刻印「占」(14)がみられる。巡方(10)は玉髄製とみられ、両端が破損しているものである。



番号	層　位	種　類	器　種	備　考	箱番号	番号	層　位	種　類	器　種	備　考	箱番号
1	SB1893 抜取穴	土師器	坏	ロクロ調整	7978	8	SB1899 抜取穴	須恵系土器	小　皿		7978
2	SB1893 抜取穴	須恵器	坏	手持ちヘラ削り	7978	9	SB1900 抜取穴	須恵系土器	坏		7978
3	SB1894 柱　穴	須恵器	坏	手持ちヘラ削り	7978	10	SB1900 抜取穴	石　製　品	巡　方	玉髄か?	8002
4	SB1894 抜取穴	須恵器	甕		7978	11	SB1894 抜取穴	瓦	軒丸瓦	311 細弁蓮華文	8030
5	SB1894 柱痕跡	かわらけ	坏	ロクロ調整	7978	12	SB1886B 抜取穴	瓦	軒丸瓦	427 重弁文	8030
6	SB1895 柱　穴	須恵器	坏	手持ちヘラ削り	7978	13	SB1900 抜取穴	瓦	平瓦Ⅱ類	刻印「丸」A	8031
7	SB1898B 柱　穴	須恵器	坏	手持ちヘラ削り	7978	14	SB1900 抜取穴	瓦	丸　瓦	刻印「占」	8031

第 28 図　SB1886･1893～1895･1898～1900 建物跡出土の遺物

(2)竪穴住居跡

竪穴住居跡は4棟(SI1901～1904)検出している。これらのなかで、SI1901は建物跡と重複しないが、その他のSI1902・1903・1904は建物跡と重複し、いずれも建物跡より古い。

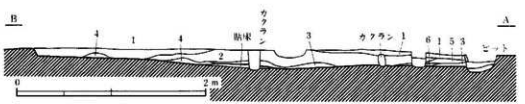
SI1901（第7・29・30図）

調査区の西南隅部の地山面(岩盤)で検出した竪穴住居跡である。残好状況は極めて悪く、最も良好な部分でも壁高は10cm弱である。平面形は、長方形をなし、規模は長辺約4.2m、短辺約3.4mである。方向は北辺でみると東で約26度北へ偏している。

カマドは、本体が残存していないことから竪穴住居跡の廃絶時に取り払われたとみられるが、東辺中央やや南寄りで、東西約 40cm、南北約 60cm の焼面とその上面で支脚とみられる据えられた土師器の甕を検出したことから、この場所に付設されていたと考えられる。また煙道が残存していないことから、奥壁より直ちに煙り出し孔に続く構造のカマドと考えられる。

床は灰褐色粘質土ブロックを含む黄褐色地山で全面貼床されており、ほぼ平坦である。また床面直上には多量の炭化物がみられた。この他カマド前面の南側には径約 60cm の円形をなす深さ約 10cm の浅い皿状のピットがみられたが、周溝・主柱穴は認められない。

堆積層は住居跡・カマド内で６層認められ、黄褐色地山ブロック・炭化物を含む灰黄褐色粘質土（１～３・５層）、黄褐色地山ブロック・炭化物・焼土を含む灰黄褐色粘質土（６層）、黄褐色地山ブロック・炭化物を含む明黄褐色粘質土(４層)である。



第 29 図　SI1901 住居跡断面図

なお本竪穴住居跡は直接重複する遺構はないが、SB1892 とは近接することから同時に存在したとはみられない。

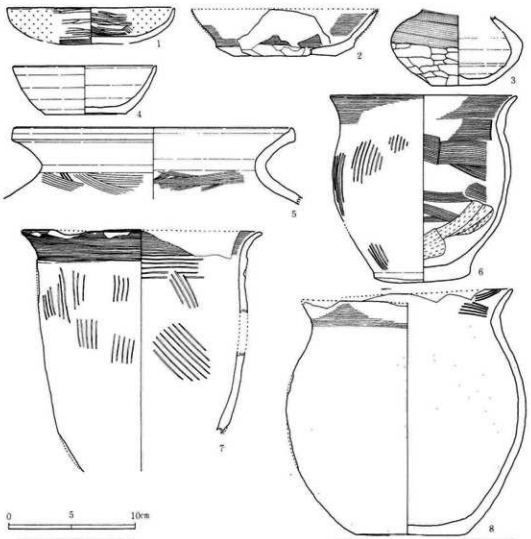
遺物は床面から比較的多量の土器と瓦１点、カマド内から土師器の甕１点、堆積層から多量の土器と瓦１点、鉄製品１点が出土している。このなかで土器は器壁の保存状況の悪いものが多く、ほとんどが破片資料である。

床面から出土したものには、土器では須恵器と土師器があり、瓦は丸瓦である。須恵器には小型の短頸瓶(第 30 図３)・瓶類・甕(５)、土師器では非ロクロ調整の杯(１・２)・甕(６・８)と調整不明の杯・甕がある。このなかの土師器杯では１が両黒、２が非内黒のものである。この他土師器では非ロクロ調整の杯に、内黒で体部が内湾しながら立ち上がる丸底風のものや、平底のものがある。丸瓦は小破片で、胎土・焼成の状況からみれば、多賀城政庁跡遺構期第Ⅰ期のものとみられる。

カマド内から出土したものには、非ロクロ調整の土師器の甕(７)がある。これはカマド底面の中央部に倒立して据えられていたことから支脚として利用されたものと考えられる。

堆積層から出土したものには、土器では須恵器と土師器があり、瓦は丸瓦、鉄製品は鉄滓である。須恵器には杯・高台杯・瓶類・甕、土師器では非ロクロ調整の杯と甕、調整不

明の褒がある。このうち須恵器の杯には底部が回転糸切り無調整のもの（4）がみられる。また土師器の杯には内黒と両黒のものがあり、内黒のものでは体部が内湾しながら立ち上がる丸底風のものや平底のものがみられる。丸瓦は小破片で、床面出土のものと同様に胎土・焼成の状況からみれば多賀城政庁跡遺構期第Ⅰ期のものとみられる。



番号	層位	種類	器種	備考	図番号	番号	層位	種類	器種	備考	図番号
1	床面	土師器	皿	非ロクロ、両黒	7971	5	床面	須恵器	甕		7971
2	〃	土師器	坏	非ロクロ、非内黒	7971	6	〃	土師器	甕	非ロクロ	7971
3	〃	須恵器	短頸瓶		7971	7	カマド底面	土師器	甕	非ロクロ	7971
4	埋土1層	須恵器	坏	糸切り無調整	7971	8	床面	土師器	甕	非ロクロ	7971

第30図　SI1901住居跡出土の遺物

SI1902（第18・31図）

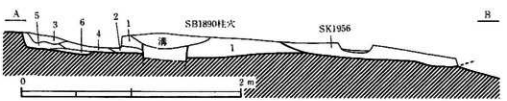
調査区西半部北寄りの地山面で検出した竪穴住居跡である。本住居跡は南半部が完全に

削平されており、最も残存状況の良好な北辺でも壁高が約 10cm 前後である。検出した部分でみると、住居跡の平面形・大きさは北辺約 4.7m、東辺約 3.3m 以上の方形をなすと考えられる。方向は、北辺でみると東で約７度北へ偏している。

カマドは、SI1901 と同様に本体が取り払われているため焼面が認められるだけであるが、北辺中央部に付設されており、幅(東西)約 70cm、奥行(南北)約 80cm で、煙道がないことから奥壁より直ちに煙り出し孔に続く構造のものと考えられる。

床は、灰褐色土ブロックを含む黄褐色地山土でほぼ全面貼床されており、平坦で多少南側へ傾斜している。また周溝・主柱穴は認められない。

堆積層は、住居跡で２層(１・２層)、カマド内で４層(３～６層)認められる。住居跡の堆積層はいずれも黄褐色地山ブロックを含む褐色土である。カマド内の堆積層は、焼土・炭化物を多く含む黒色土・褐色土である。



第 31 図　SI1902 住居跡、SK1956 土壙断面図

本住居跡は SB1889・1890 建物跡・SK1956 土壙と重複しており、いずれよりも古い。また、SB1900 とは近接することから同時に存在したとはみられない。

遺物は床面、住居跡・カマド内の堆積層から少量の土器がそれぞれ出土している。土器はいずれも破片資料でまた器壁の保存状況も悪いため、特徴を把握できるものがあまり多くない。

床面から出土したものには、須恵器の杯の体部破片１点、非ロクロ調整の土師器の杯と甕の体部破片５点、調整不明の甕の体部破片１点がある。

住居跡の堆積層からは、須恵器の杯の体部破片１点、瓶類の口縁部・体部破片各１点、甕の口縁部破片１点、非ロクロ調整の土師器の甕の体部破片７点、調整不明の杯の底部破片３点・体部破片４点、甕の体部破片８点が出土している。

カマド内の堆積層からは、非ロクロ調整の土師器の杯の体部破片１点・甕の口縁部破片１点・体部破片 16 点が出土している。

SI1903（第 18・32～34 図）

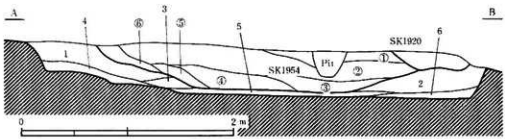
調査区の西半部北寄りの地山面で検出した竪穴住居跡で、SI1902 のすぐ東側に位置している。残存状況は良好で、壁の高さは 30～55cm である。住居跡の平面形は方形をなし、

大きさは、西辺約 3.4m、北辺約 3.1mである。方向は北辺でみると、西で約３度北へ偏している。

カマドは西辺南半部に付設されているが、SI1901・1902・1904 と同様に廃絶時に本体が取り払われており、底面の焼面が認められるだけである。これによればカマドは、幅(南北)約 70cm、奥行(東西)約 50cm で、奥壁が約 10cm 立ち上がり煙道へ続く。煙道は約 60cm 西へ延びそのまま煙り出しとなっている。

床は、褐灰色土を含む地山土・岩盤ブロックを主体とする黄褐色土で全面貼床されており、ほぼ平坦である。周溝・主柱穴は認められない。

堆積層は住居跡とカマド内で各３層認められる。住居跡の堆積層(１・５・６層)は黄褐色地山土小ブロック・炭化物を含む灰黄褐色粘質土、にぶい黄褐色粘質土である。カマド内の堆積層(２～４層)は、多量の黄褐色地山土ブロック、少量の炭化物を含む灰黄褐色粘質土、炭化物を含む褐灰色粘土、少量の炭化物を含む黄褐色地山土である。

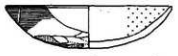


第 32 図　SI1903 住居跡、SK1920・1954 土壙断面図

本住居跡は、SB1884・1886・1889・1890・1900 建物跡、SK1918・1920・1954 土壙、SD1911 溝と重複し、いずれよりも古い。

遺物は床面と住居・カマド内の各堆積層からそれぞれ出土している。

床面からは少量の須恵器・土師器・鞴の羽口１点・鉄滓６点の他、漆紙文書が出土している。これらの中で土器はいずれも破片資料で、器壁の保存状況の悪いものが多い。須恵器には杯・蓋・甕、土師器には非ロクロ調整の杯(第 33 図)・甕の他、調整不明の杯・甕がある。このうち須恵器の杯には底部が回転ヘラ削り調整のものがみられる。また鞴の羽口は破片資料である。



番号	層位	種　類	器種	備　考	遺番号
1	床面	土師器	杯	非ロクロ、内黒	7972

第 33 図　SI1903 住居跡出土の土器

カマド内からは、煙道の埋土から調整不明の土師器の甕の体部破片が２点出土している。

住居跡の堆積層からは、非ロクロ調整の土

師器の甕の口縁部・底部破片が各１点、調整不明の土師器の杯の底部破片１点、甕の体部破片４点が出土している。

〔漆紙文書〕

漆紙文書は、住居跡北東隅の床面から漆面を上にして出土したものである(第 34 図)。漆面の裏をＡ面、漆面をＢ面とすると、Ａ面からみて中央やや右下よりで約６cm 四方の不整方形に破損しているが、直径約 13cm のほぼ円形で、漆のフタ紙として再利用された後に折り畳まれずに廃棄されたものとみられる。文字はＡ面では肉眼でも見られる。Ｂ面では漆

第 34 図　漆　紙　文　書

の層の剥離した部分で赤外線テレビによって確認できたが、判読はできていない。

〔釈文〕

A

1 （小破片）

戚

2

3

4

5

6

B □

〔年代〕共伴する遺物より出土遺構の年代は８世紀中頃と捉えられ、それが文書の年代の下限となる。当文書はこれまでに多賀城跡から出土した漆紙文書の中でも最も古いものである。

〔記載様式と内容〕A面の２～６行の行間には押界による縦界線がA面の側から引かれている。界線の間隔は実測値では３行目が約 2.3cm、４行目が約 2.1cm、５行目が約 2.0cm である。

１行目と４行目は人名の記載で年齢と身体特徴が割註で書かれている。４行目には「同戸口」とあり、１・４行目の「丈部某」が同じ戸に属していることを示す。丈部は非蝦夷系の姓で、陸奥国では南部の白河・会津・安積・信夫・柴田・磐城・標葉郡や所謂黒川以北十郡に属する賀美・新田・小田郡に分布する。身体特徴註記は計帳歴名や各種貢進歴名などに見られ人物確認のために付される註記である。

２・３行目は馬に関する記載で、５・６行目も同様と思われる。「歳」の字のある破片が同時に出土しているが、２・３行目のいずれかの破損部分にあたるものであろう。馬については毛色・性別・年齢を記している。廐牧令 10 駒犢条に官牧の馬の登録の際に毛色・年齢を帳簿に記すことが定められている。これは官牧の馬に限る記載様式ではなく、平城宮跡出土の過所符(平城宮木簡 1926 号)(註)にも「鹿毛牡馬歳七」と記されており、馬の記載の通例である。

〔文書の性格〕当文書の性格について推論を提示しておく。

馬に関する令の編目である廐牧令は１～３条が左右馬寮の馬、４～13 条が官牧の馬牛、

14～18条および20～22条が駅伝馬、19条は軍団官馬、23・24条は逃れた馬牛の処理、25条は官私馬牛帳の進官、26～28条は馬牛の病気・死亡時の処理についての規定という構成である。中でも6牧牝馬条と10駒犢条には官牧の馬の出産と登録に関する帳簿が見え、25官私馬牛条には「官私馬牛帳」を朝集使に付して太政官に進めることが定められている。

「官私馬牛帳」は実際には馬牛の種類に応じてそれぞれの帳簿が作られていたらしい。正倉院文書の一つである『天平六年度出雲国計会帳』は出雲国の公文書の授受を記録した帳簿だが、天平五(733)年十月、出雲国の朝集使が弁官(太政官の文書受付機関)に進めた公文の中に「駅馬帳一巻」・「伝馬帳一巻」・「種馬帳一巻」・「繋飼馬帳一巻」・「伯姓牛馬帳一巻」・「兵馬帳一巻」がある。「駅馬帳」・「伝馬帳」は駅馬・伝馬、「繋飼馬帳」は官牧の馬、「兵馬帳」は軍団の馬に関する帳簿にあたる。「種馬帳」もおそらく官牧での繁殖に用いられる馬の帳簿であろう。これらによって厩牧令に見える地方の公的な馬は把握されていたのである。残る「伯姓牛馬帳」は百姓(良民)の私有する牛馬の帳簿であろう。

以上から当文書に表れる馬について駅馬・伝馬・官牧の馬・軍団の馬・私馬の可能性が挙げられるが、私馬と考えるのがもっとも妥当であろう。当文書は「同戸口」の文言から一つの戸の中の複数の戸口がそれぞれ複数の馬に関わっていることが知られる。ところが令の規定では、官牧の人的構成は牧長・牧帳各一人と牛馬百匹の群ごとに牧子二人というものであり、また駅馬は馬一匹ごとに駅戸の中中戸一戸が飼養することになっている。したがって、当文書の示す人馬の関係は明らかに官牧・駅のそれとは異なる。次に軍団の馬は兵士の中から「家富堪養」なる者を選んで飼養させることになっている。正丁が兵士になるのが原則だが、1行目の「丈部某」の年齢「廿」の下には文字がありそうになく、彼は20歳の少丁(中男)である。4行目の「丈部某」も文字の残画からやはり20歳の少丁(中男)である可能性がある。兵士でないものが軍団の馬を飼養するとは考え難い。また、およそ一戸から一兵士とする見方があり、このことも先に示した「同戸口」の解釈とは合わない。当文書は軍団の馬に関わる文書でもないと考えられる。伝馬は郡ごとに5匹置かれ、「家富兼丁」ある者(家が豊かで正丁・少丁が二人以上いる者)が飼養することになっている。一家に複数の馬が付されることがあるかどうか定かでなく、戸との関係も不明である。したがって、伝馬については積極的に否定する根拠はない。だが肯定する材料もなく、伝馬である可能性は残るが、「丈部某」の所有する私馬であるとしておくのが適当である。

以上より当文書は「伯(百)姓牛馬帳」やそれに関連する私馬の帳簿である可能性が高い。人名の下に年齢・身体特徴註記があることは、ただ単に所有関係を示すだけでなく、馬を用いた労役に人を徴発するためにこの帳簿が利用されたことを示すのではないだろうか。私馬を征行や物資輸送に徴発することも頻繁だったようである。そうした意味では当文書

は馬を有する人の把握を主眼とした文書とも言えよう。

なお、3行目は字が細くまた2行目の「毛」と3行目の「毛」との間には筆跡の違いが認められる。さらに5・6行目と破片の「歳」もそれぞれ筆跡に異同が認められる。また3・4行目の「赤毛」・「同戸口」はそれぞれ行頭と思われるが2行目と揃わず、特に2・3行目の文字の並びは不自然である。こうした不体裁は当文書が正式の文書・帳簿やその案文(国衙保存の控)ではなく、それらを作成するための草案や関係資料であることによる可能性がある。界線が墨線ではなく押界であることや、複数人物によって書かれた可能性があることもこうしたことによるのかもしれない。

SI1904（第24・35図）

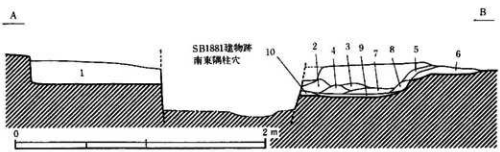
調査区中央部南半の地山面で検出した竪穴住居跡である。壁高が18～26cmと残存状況は比較的良好である。住居跡の平面形は方形をなし、大きさは西辺約3.4m、北辺約3mである。方向は、北辺でみると東で約2度南へ偏している。

カマドは、東辺南半部に付設されているが、SI1901～1903住居跡と同様に廃絶時に本体が取り払われており、焼面がみられるだけである。これによればカマドは、幅(南北)約60cm、奥行(東西)約70cmで、奥壁が約12cm立ち上がり煙道へ続いている。煙道は東へ約60cm延びてそのまま煙出しとなっている。

床は暗褐色土ブロック・褐灰色土ブロックを含む明黄褐色地山土でほぼ全面貼床されており、平坦で多少南へ傾斜している。また周溝・主柱穴は認められない。

堆積層は住居跡内で2層、カマド内で8層に分けられる。住居跡内の堆積層は、上層が旧表土とみられる黒褐色土ブロックを斑状に含む明黄褐色地山土で、下層が少量の焼土・黒褐色土ブロックを含む明黄褐色地山土である。カマド内の堆積層は、いずれも明黄褐色地山土ブロック・炭化物を含む赤褐色土焼土で、その含有物の多少で細分される。

本住居跡は、SB1881・1887・1899建物跡、SK1914・1915・1921・1922土壙と重複しいずれよりも古い。



第35図　SI1904住居跡断面図

遺物は、床面と堆積層から須恵器と土師器が少量出土しており、すべて破片資料であり、器壁の保存状況が悪い。

床面からは須恵器では短頸瓶の口縁部破片が1点、土師器では非ロクロ調整の甕の底部破片1点・体部破片4点、調整不明の甕の体部破片1点が出土している。

堆積層からは須恵器では杯の体部破片が1点、土師器では非ロクロ調整の杯・甕と調整不明の甕が少量出土している。この中で、非ロクロ調整の杯には体部外面に屈曲をもつものが2点みられる。

(3) 土器埋設遺構

SX1905（第19・36・37図）

調査区南西部で検出した須恵系土器の埋設遺構である。中に自然石6個を納めた須恵系土器の甕(第37図13)の口縁部に須恵系土器の小型杯を12個(1～12)重ね、小土壙に埋設したものである(第36図)。

土壙は長径約35cm、短径約30cmの楕円形をなし、深さは約23cm残っていた。性格は地鎮の可能性が考えられる。

なお本土器埋設遺構は、SB1892建物跡と重複しこれより新しい。

SX1906（第26・40図）

調査区中央部で検出した土器の埋設遺構(第26図)で、径約45cmの円形をなす小土壙に須恵系土器の小型杯(第40図3)1個を口縁部を上にして埋設したものである。埋土は黄褐色地山土や岩盤ブロック・細粒、少量の炭化物を含む黒褐色土である。

なお本土器埋設遺構は、SB1900建物跡と重複しこれより新しい。

SX1907（第7・38・40図）

調査区北西隅の地山面で検出した土器の埋設遺構である(第7図)。非ロクロ調整の土師器の小型甕(第40図1)1個を小土壙に斜めに埋設したものである(第38図)。土壙は、規模・平面形が長径約45cm、短径約30cmの楕円形をなし、深さは約35cm残っていた。

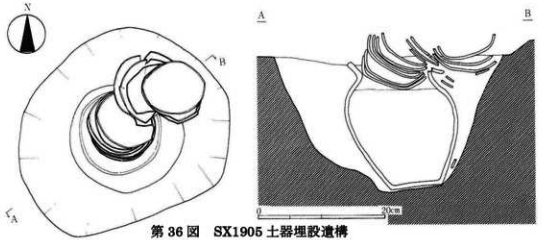
埋土は多量の黄褐色地山細粒や岩盤小粒、炭化物を含む灰黄褐色土である。

なお埋設されている小型甕は、再び火を受けたため赤褐色に変色しており、また外面には炭化物が広範囲に付着している。

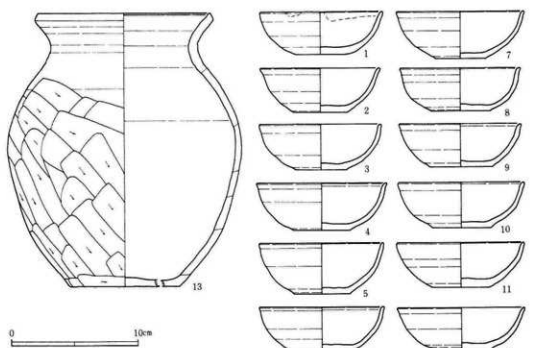
SX1908（第18・39・40図）

調査区中央部北半、SI1903竪穴住居跡のすぐ北側の地山面で検出した土器の埋設遺構である(第18図)。須恵系土器の高台を有する小型皿(第40図2)を口縁部を上にして埋設したものである(第39図)。土壙は、規模・平面形が径約20cmの円形をなし、深さは約12cm残っていた。

埋土は２層に分けられ、上層が黄褐色地山細粒と少量の炭化物を含む黒褐色土、下層が地山ブロックと少量の炭化物を含む褐灰色土である。

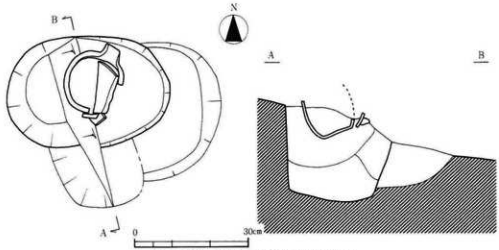


第 36 図　SX1905 土器埋設遺構

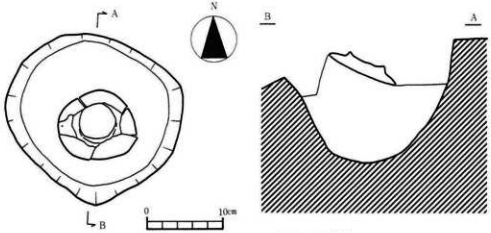


番号	層位	種類	器種	備考	箱番号
1	SX1905	須恵系土器	小型坏		7974
2	SX1905	須恵系土器	小型坏	口縁部 煤状付着	7974
3	SX1905	須恵系土器	小型坏		7974
4	SX1905	須恵系土器	小型坏		7974
5	SX1905	須恵系土器	小型坏		7974
6	SX1905	須恵系土器	小型坏		7974
7	SX1905	須恵系土器	小型坏		7975
8	SX1905	須恵系土器	小型坏		7975
9	SX1905	須恵系土器	小型坏		7975
10	SX1905	須恵系土器	小型坏		7975
11	SX1905	須恵系土器	小型坏		7975
12	SX1905	須恵系土器	小型坏		7975
13	SX1905	須恵系土器	甕		7976

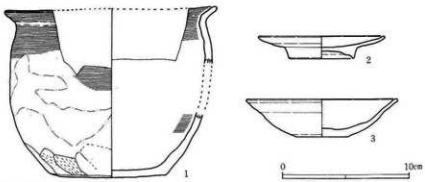
第 37 図　SX1905 土器埋設遺構の土器



第 38 図　SX1907 土器埋設遺構



第 39 図　SX1908 土器埋設遺構

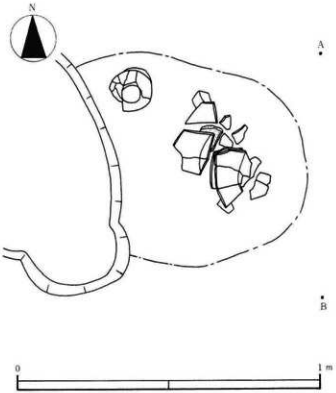


番号	層位	種類	器種	備考	箱番号	番号	層位	種類	器種	備考	箱番号
1	SX1907	土師器	甕	非ロクロ	7976	3	SX1906	須恵系土器	坏		7977
2	SX1908	須恵系土器	高台皿		7977						

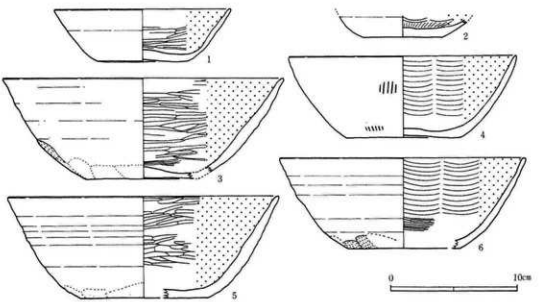
第 40 図　SX1906・1907・1908 土器埋設遺構の土器

SX1928（第 21・41・42 図）

調査区東半部中央の第４層上面で検出した土器の埋設遺構である。残存状況が悪いため明瞭ではないが、規模・平面形が東西 70cm 以上、南北約 70cm 不整円形をなすとみられる土壙に、ロクロ調整の土師器の大型杯３ないし４個と杯２個を埋設したものと考えられる（第 41 図）。このうち大型杯（第 42 図３・５・６）３個は、口縁部を上にして密接しているが、杯２個はそのすぐ西側で底部を上にして重ねられている。大型杯３個は、１個がほぼ完形であり、その他は破片資料であるが、本来はいずれも完形



第 41 図　SX1928 土器埋設遺構



番号	層位	種類	器種	備考	箱番号	番号	層位	種類	器種	備考	箱番号
1	SX1928	土師器	坏	ロクロ調整、内黒	7977	4	SX1928	土師器	大型坏	ロクロ調整、内黒	7977
2	SX1928	土師器	坏	ロクロ調整、内黒	7977	5	SX1928	土師器	大型坏	ロクロ調整、内黒	7977
3	SX1928	土師器	大	ロクロ調整、内黒	7977	6	SX1928	土師器	大型坏	ロクロ調整、内黒	7977

第 42 図　SX1928 土器埋設遺構の土器

であったとみられる。また杯２個は上のもの(第 42 図１)が完形であるが、下のもの(２)は口縁部を欠いている。埋土は炭化物を多く含む暗褐色土である。なお本遺構の検出時に、その上層でロクロ調整の土師器の大型杯(４)１個体分の破片が出土しているが、これも本来は本遺構に埋設された土器の可能性が高いと考えられる。

(４) 井　戸

SE1909（第 24・43・44 図）

調査区東半部南端の地山面で検出した井戸である(第 24 図)。SE1909 は、深さが約 2.5 m 残っていたが、東西約２m、南北 1.4m 以上で平面形が隅丸方形の深さ約１m の据方を伴っており、その底面はちょうど地山と岩盤の境になっている(第 43 図)。そこでは四隅に縦材の痕跡のみられる臍穴を持つ方形に組合わせられた材が認められ、また井戸内の堆積層から板材が出土していることから SE1909 は、岩盤面から上には板材を組合わせた井戸枠を持つ井戸であったと考えられる。井戸枠は、規模・平面形が四隅の臍穴の間隔から内法一辺約１m の正方形をなすとみられ、高さは地上部の立ち上がりが不明であるが、１m 以上と考えられる。

岩盤面より下は素掘りであり、上半部が抉れてオーヴァハングしているが、底面は東西約 0.9m、南北約 0.7m の隅丸方形をなし、深さ約 1.5m である。

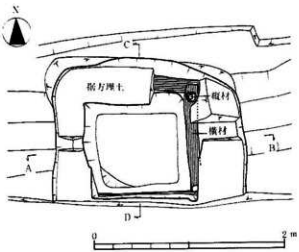
据方の埋土は、褐灰色土ブロック・岩盤小粒・炭化物を含む黄褐色地山土である。

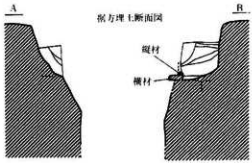
井戸内の堆積土は、５層に分けられる。第１層は極少量の灰白色火山灰細粒、少量の炭化物を含む黒褐色粘質土である。第２～５層は地山ブロック・細粒、岩盤小粒、炭化物を含む暗青灰色粘質土であり、このうち第３層には砂質土が含まれる。

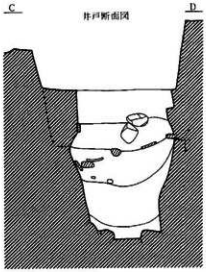
なお本井戸は SB1899 建物跡と重複し、これより古い。

遺物はいずれも破片資料であるが、据方の埋土から少量の土器が、また井戸内の各堆積層から土器・灰釉陶器・瓦の他、硯・鉄製品・木製品・獣骨・炭化した種子などが出土している。据方の埋土から出土した土器には、須恵器と土師器がある。須恵器には杯・瓶類があり、このなかの杯には底部が回転糸切り無調整で、底部外面に墨書(第 44 図５)のみられるものがある。土師器には非ロクロ調整・ロクロ調整の内黒の杯や甕の他、調整不明の杯・高台杯・甕がある。このなかではロクロ調整のものが主体を占め、ロクロ調整の杯には、底部が回転糸切り無調整で底部外面に墨書(６)のみられるものがある。

井戸内の各堆積層からは多量の土器が出土しており、須恵器には杯・瓶類(４)・甕が、土師器には非ロクロ調整・ロクロ調整・調整不明の杯・甕がある。このなかで須恵器の杯について底部の切り離し技法・調整をみると、第５層では回転糸切りで周縁部を手持ちヘラ削り調整したもの、第４層ではヘラ切り無調整のもの・回転ヘラ削り調整のもの・手持







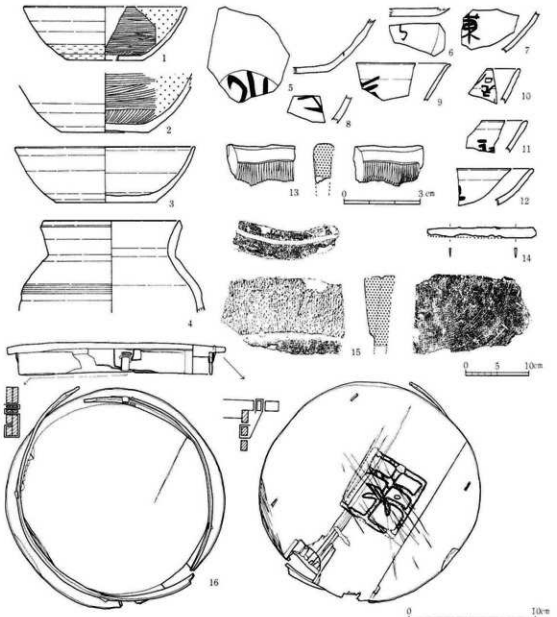
第43図　SE1909井戸平面図・断面図

ちヘラ削り調整のもの、第3層では回転糸切りで体部下端から底部を手持ちヘラ削り調整したもの・手持ちヘラ削り調整のもの、第1層では回転糸切りで無調整のもの(3)・回転ヘラ削り調整のもの・手持ちヘラ削り調整のものがみられ、切り離し技法では回転糸切りのもの、調整では手持ちヘラ削り調整のものが主体をしめる。

土師器のロクロ調整の杯について底部の切り離し技法・調整をみると、第5層では回転糸切りで無調整のもの(2)・回転ヘラ削り調整のもの(1)・手持ちヘラ削り調整のもの、第4層では回転糸切りで無調整のもの・回転ヘラ削り調整のもの、第3層では回転糸切りで無調整のもの・回転ヘラ削り調整のもの・手持ちヘラ削り調整のもの、第1層では回転糸切りで無調整のもの・回転ヘラ削り調整のもの・回転糸切りで手持ちヘラ削り調整のものがみられ、切り離し技法では回転糸切りのもの、調整では回転ヘラ削り調整のものが主体をしめる。また第5・4・1出土のロクロ調整の杯の中には、墨書のみられるものがある（7～12)。

灰釉陶器は第5層から椀の体部破片が1点、また硯は第1層から風字硯の小破片が1点それぞれ出土している。

瓦は第1層から640単弧文軒平瓦(15)の他、第1～3層から平瓦・丸瓦が出土しており、このなかの平瓦では



番号	層位	種類	器種	備考	箱番号
1	第5層	土師器	坏	回転ヘラ削り	7990
2	第5層	土師器	坏	回転糸切り→無調整	7990
3	第1層	須恵器	坏	回転糸切り→無調整	7990
4	第1層	須恵器	短頸壺		7990
5	掘方埋土	須恵器	坏	墨書	7990
6	掘方埋土	土師器	坏	墨書	7990
7	第4層	土師器	坏	墨書	7990
8	第1層	土師器	坏	墨書	7990

番号	層位	種類	器種	備考	箱番号
9	第4層	土師器	坏	墨書	7990
10	第5層	土師器	坏	墨書	7990
11	第5層	土師器	坏	墨書	7990
12	第4層	土師器	坏	墨書	7990
13	第5層	木製品	櫛		
14	第5層	鉄製品	刀子		
15	第1層	瓦	軒平瓦	640 単弧文	8030
16	第5層	木製品	曲物蓋	表に墨印	

第 44 図　SE1909 井戸出土の遺物

多賀城跡政庁遺構期第Ⅲ期のものがみられる。

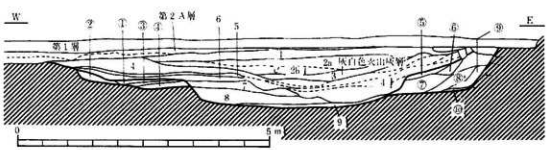
鉄製品では第5層から刀子(14)、木製品では第5層から表に 5.3×5.1cm の方形の枠を持つ焼印のある曲物の蓋(16)や櫛(13)の他、用途不明のものが出土している。またこの他に第3層から獣骨、第5層から炭化した種子類が出土している。

(5) 溝

SD1910（第7・45図）

調査区東端で検出した南北溝で、平安時代の SF300 築地に伴う城内側の大溝である(第7図)。本溝は完掘しておらず南端部で断割り調査を実施しただけであるが、規模は上端部幅約9m、底面幅約 7.8m、深さ約1m で、断面形は逆台形をなす。底面は西端部付近で凹凸がみられる以外は平坦で、南へ緩やかに傾斜している。溝の方向は西側上端部でみると、北で約15度西へ偏している。

堆積土は、SK1929 土壙と重複するため中央部が不明であるが、東西で層相が異なる。築地側では岩盤小粒・細粒を含む黄褐色土・にぶい黄褐色土・明黄褐色土が6層(⑤～⑩)に細分され、西半部では黄褐色・明黄褐色地山細粒、岩盤小粒・細粒を含む褐灰色土・黒褐色土が4層(①～④)に細分される(第45図)。



第45図　SD1910 溝・SK1929 土壙断面図

なお本溝は、SB1896A 建物跡、SK1929 土壙と重複しいずれよりも古い。そしてこの SK1929 の堆積層中には、10 世紀前半頃に降灰したと考えられる灰白色火山灰層がみられることから、本溝は 10 世紀前半頃からさほど遡らない時期にはかなり埋まっていたと考えられる。

遺物はすべて破片資料であるが、少量の須恵器・土師器と瓦の他、灰釉陶器1点と漆紙の小破片が数点出土している。

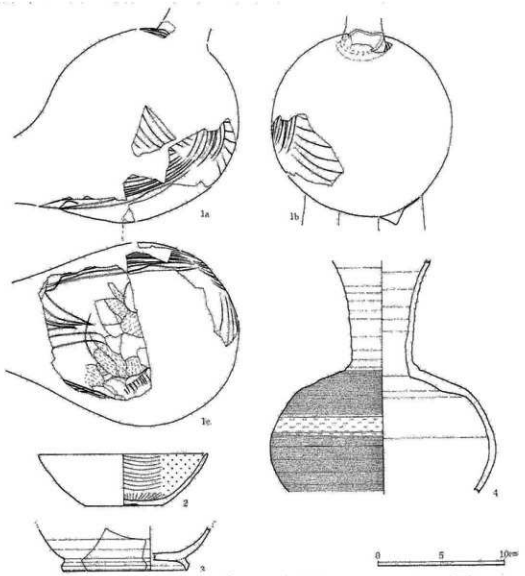
須恵器には杯・高台杯・瓶類・甕があり、このなかの杯には底部が回転糸切り無調整のものと手持ちヘラ削り調整のもの、瓶類には長頸瓶がある。土師器には非ロクロ調整の甕、ロクロ調整の杯・甕、および調整不明の杯・高台杯・甕がある。このなかでロクロ調整の

杯には、底部が回転ヘラ削り調整のものがみられる。灰釉陶器は皿の口縁部破片である。瓦は丸瓦と平瓦である。

漆紙は、３～１cm 前後の大きさのものがまとまって出土したが、一部で墨痕の確認できるものもみられるが、小破片のため判読できない。

SD1911（第７・46図）

調査区中央北半部で検出した東西溝(第７図)で、多少蛇行している。長さ約 16m 検出し



番号	層位	種類	器種	備考	箱番号
1	SD1911 堆積層	須恵器	高杯土器		7984
2	SD1911 堆積層	土師器	坏	底部糸切り無調整	7984

番号	層位	種類	器種	備考	箱番号
3	SD1911 堆積層	灰釉陶器	椀		8002
4	SD1911 堆積層	須恵器	長頸瓶		7984

第 46 図　SD1911 溝出土の遺物

ており、上端幅約 50cm、底面幅約 30cm で、深さは約 20cm 残っている。断面形は緩やかなU字形をなす。底面は平坦で、東へ傾斜している。堆積層は１層で、黄褐色地山細粒を含む褐色土である。

なお本溝は SB1884・1888・1889・1900 建物跡、SI1903 竪穴住居跡、SK1913・1916・1954 土壙と重複し、SK1916・SB1900 より古いが、それ以外のものよりは新しい。

遺物はすべて破片資料であるが、比較的多量の土器と瓦が出土している。土器には少量の須恵器と多量の土師器、微量の須恵系土器の他、灰釉陶器が４点ある。須恵器には杯・蓋・瓶類(第 46 図４)・甕の他に鳥形土器(１)があり、このうち杯では底部の切り離しが回転糸切りで無調整のもの、手持ちヘラ削り調整のものがみられ、前者が主体を占める。また鳥形土器は、頸部・胸～羽根の部分・腹～尾部の破片６点が出土している。球形に整形した胴部に、頸部・脚を貼り付け尾を作り出したものとみられ、腹～尾部の破片には脚が剥落した痕跡がみられる。

土師器はロクロ調整のものと調整不明のものが多く、確実に非ロクロ調整のものは杯にはなく、甕に微量みられるだけである。ロクロ調整のものには杯・高台杯・甕がある。このなかの杯はすべて内黒で、底部が回転糸切り無調整のもの(２)が大部分を占める。

須恵系土器は、杯の口縁部・体部破片が合わせて５点出土している。

灰釉陶器は椀(３)２点、皿２点が出土しており、このなかの皿の１点は SD1945 出土のものと接合する。

瓦は丸瓦と平瓦である。

SD1941（第８図）

調査区中央南半部の地山面で検出した東西溝(第８図)で、長さ約５m 検出している。方向はほぼ東西発掘基準線に一致する。上端幅約 0.5m、底面幅約 0.2m、深さ約 0.2m で、断面形は緩やかなU字形をなす。堆積土は黄褐色地山細粒を含む灰褐色土である。

本溝は SB1881・1885 建物跡、SI1904 竪穴住居跡と重複していずれよりも新しい。

遺物は須恵器と土師器が少量出土している。須恵器では杯・甕、土師器では非ロクロ調整の甕、ロクロ調整の内黒の杯、調整不明の内黒の杯、甕がある。このなかで須恵器の杯には、底部が回転糸切り無調整のもの、回転ヘラ削り調整のものが、また土師器ではロクロ調整の内黒の杯に、底部の切り離しがヘラ切りで底部と体部下端が回転ヘラ削り調整のものがみられる。

（６） 土　　壙

SK1912（第 26・47 図）

調査区中央北半部の地山面で検出した土壙である(第 26 図)。平面形は南東部が多少張り

出す隅丸方形で、規模は東西約 0.8m、南北約 0.9m である。壁は比較的急に立ち上がり、深さは約 0.6m 残っている。堆積土は5層に分けられ、黄褐色地山ブロックを多量に含む灰褐色土と炭化物を多量に含む黒褐色土の互層になっている。

本土壙は SB1884 建物跡、SK1913 土壙と重複していずれよりも新しい。また SB1886・1900 建物跡とも重複するが、直接切り合い関係がないため新旧関係は不明である。

遺物はすべて破片資料であるが、各堆積層から比較的多量の須恵器・土師器、微量の須恵系土器・灰釉陶器が出土している。須恵器には杯・長頸瓶・瓶類・甕、土師器には非ロクロ調整・ロクロ調整・調整不明の杯・甕がある。このうち須恵器の杯には底部が回転糸切り無調整のもの、回転糸切りで手持ちヘラ削り調整のもの、ヘラ切り無調整のものがみられ、回転糸切り無調整のものが最も多い。また土師器の杯はすべて内黒で、ロクロ調整のものには底部が回転糸切り無調整のものと回転ヘラ削り調整のものがみられ、前者が多い。

須恵系土器は、杯類の口縁部と体部の小破片が6点、また灰釉陶器は、椀(第 47 図 11)と小破片であるが皿2点が出土している。

SK1913（第 26 図）

調査区中央北半部の地山面で検出した土壙である(第 26 図)。平面形は東西に長い楕円形をなし、規模は長径約 1.9m、短径約 0.8m である。壁は緩やかに立ち上がり、深さは約 15cm 残っている。堆積土は1層で、黄褐色地山・岩盤小ブロックを含む褐灰色土である。

なお本土壙は SB1884・1886 建物跡、SK1912 土壙、SD1911 溝と重複し、SB1884 より新しいが、その他のものよりは古い。

遺物はいずれも破片資料であるが、須恵器の杯3点・甕1点と土師器で調整不明の内黒の杯5点が出土している。

SK1914（第 24 図）

調査区東半部南半の地山面で検出した土壙である(第 24 図)。平面形は南半部が西側へ張り出す不整方形をなし、規模は南北約 3.8m、東西 1.7～2.7m である。壁は緩やかに立ち上がり、深さは 20cm 前後残っている。底面は平坦で、多少南へ傾斜している。堆積土は1層で、黄褐色地山小ブロック・細粒と多量の炭化物を含む黒褐色土である。

本土壙は SB1899 建物跡、SI1904 竪穴住居跡、SK1915 土壙と重複し、SK1915 より古く SB1899、SI1904 より新しい。

遺物はいずれも破片資料であるが、少量の須恵器と比較的多量の土師器の他須恵系土器が微量出土している。須恵器には杯・蓋・甕があり、杯には底部が回転糸切り無調整のもの、ヘラ切り無調整のもの、ヘラ切りで手持ちヘラ削り調整のものがある。土師器には非

ロクロ調整・ロクロ調整・調整不明の杯と甕があり、杯は両黒で調整不明の2点を除きすべて内黒であり、ロクロ調整のものには底部が回転糸切り無調整のものがみられる。須恵系土器は杯類の体部破片2点である。この他中世陶器が1点出土しているが、これは混入したものと考えられる。

SK1915（第24図）

調査区東半部南半の地山面で検出した土壙である(第24図)。平面形は南北に長い楕円形をなし、規模は長径約1.3m、短径約0.6mである。壁は緩やかに立ち上がり、深さ約20cm前後残っている。堆積土は1層で、少量の黄褐色地山小ブロック・細粒と多量の炭化物を含む黒褐色土である。

本土壙は、SI1904竪穴住居跡、SK1915土壙と重複し、いずれよりも新しい。

遺物はいずれも破片資料であるが、須恵器の杯・甕の体部破片が各1点、土師器では非ロクロ調整とロクロ調整の甕の体部破片が各1点出土している。

SK1916（第26・47図）

調査区中央部北半の地山面で検出した小土壙である(第26図)。平面形は東西に長い卵形のような楕円形をなし、規模は長径約1.2m、短径約0.8mである。壁は緩やかに立ち上がり、深さは30cm弱残っている。底面は平坦である。堆積土は1層で、黄褐色地山・岩盤小粒や細粒と多量の炭化物を含む黒褐色土である。

本土壙は、SB1886B建物跡、SD1911溝と重複し、いずれよりも新しい。またSB1900建物跡と重複するが、直接切り合いがないため新旧関係は不明である。

遺物はいずれも破片資料であるが、少量の須恵器・土師器の他微量の須恵系土器とが出土している。須恵器には杯・甕の他器種不明の小破片が1点あり、杯には底部が回転糸切り無調整のものがみられる。土師器には非ロクロ調整の杯・甕、ロクロ調整の杯・両黒の耳皿(第47図14)・甕、調整不明の杯・甕があり、杯はすべて内黒のものである。このなかのロクロ調整の杯には底部が回転糸切り無調整のもの、ヘラ切りで手持ちヘラ削り調整(12)のものがあり前者の量が多い。

須恵系土器は杯類の体部破片2点である。

SK1918（第18図）

調査区西半部の地山面で検出した土壙である(第18図)。平面形は多少歪んだ東西に長い楕円形をなし、規模は長径約2.3m、短径約1.2mである。壁は緩やかに立ち上がり、深さは30cm前後残っている。底面は平坦である。堆積土は1層で、明黄褐色岩盤小粒と多量の炭化物を含む灰黄褐色粘質土である。

本土壙は、SB1884・1886・1889建物跡、SI1903竪穴住居跡、SK1920・1954土壙と

重複し、いずれよりも新しい。

遺物はいずれも破片資料であるが、比較的多量の須恵器・土師器、少量の須恵系土器・瓦の他漆紙が出土している。須恵器には杯・蓋・長頸瓶を含む瓶類・甕があり、この中の杯には底部が回転糸切り無調整のもの、ヘラ切りで手持ちヘラ削り調整のものがみられ、前者が主体を占める。土師器には非ロクロ調整の甕、ロクロ調整の杯・高台杯・甕、調整不明の杯・甕があり、杯はすべて内黒である。このうちロクロ調整の杯には底部が回転糸切りで手持ちヘラ削り調整のもの、回転ヘラ削り調整のものがみられる。須恵系土器には杯類・高台杯・鉢がある。瓦は丸瓦ⅡB類6点と平瓦ⅡB類3点である。

漆紙は底面から数点出土している。その内1点は縦 5.1cm、横 7.8cm の大きさで、漆を間に挟んで二つ折にされたものがさらに4重に折れ重なった状態で出土した。展開すると外径 18cm 前後、内径約 9 cm のドーナツ形になる。墨痕は確認できるが、紙がだいぶ風化しているため判読できない。この他墨痕確認できるものが1点あるが、小破片で文字の一部だけであるためやはり判読できない。

SK1920（第 18・32 図）

調査区西半部で検出した小土壙である(第 18 図)。平面形はほぼ円形をなし、規模は径約 0.8m である。壁は緩やかに立ち上がり、深さは 20cm 前後残っている。底面は平坦である。堆積土は1層で、黄褐色地山細粒と炭化物を含む灰黄褐色土である(第 32 図)。

なお本土壙は、SI1903 竪穴住居跡、SK1918・1954 土壙と重複し、SI1903・SK1954 より新しいが SK1918 より古い。

遺物はすべて破片資料であるが、須恵器では瓶類1点、甕3点、土師器ではロクロ調整の甕1点、調整不明の内黒の杯1点が出土している。

SK1929（第 7・45・47 図）

調査区の南東隅で検出した土壙であり、南半部はさらに調査区外へ続いている(第 7 図)。平面形・規模は東西約 8 m、南北 2.2m 以上の不整円形をなすとみられる。壁は途中で屈曲しており、屈曲より下部は比較的急に立ち上がるが、上部は緩やかに立ち上がる。深さは約 1.2m 残っており、底面はほぼ平坦である。堆積土は黄褐色地山細粒・岩盤小ブロックや炭化物を含む黒褐色土、暗褐色土、褐色土灰、褐色土、灰黄褐色土で、含有物の多寡で9層に細分される。このなかの上部には基本層序の第2B層である黄褐色地山細粒と多量の炭化物を含む黒褐色土(1・2a・2b)、第3層である灰白色火山灰層(3)、第4層である黄褐色地山細粒と多量の炭化物を含む黒褐色土(4)がみられる(第 45 図)。

本土壙は、SD1910 溝と重複しこれより新しい。

なお、堆積層中に灰白色火山灰層がみられることから本土壙は露出しており、自然堆積

で埋没したことが知れる。

遺物はほとんどが破片資料であるが、堆積層第1・2・4・5・8層から比較的多量の須恵器と極めて多量の土師器が、堆積層第2・4層から少量の須恵系土器、堆積層第1・2・4層から微量の灰釉陶器のほか瓦、鉄製品、漆紙が出土している。

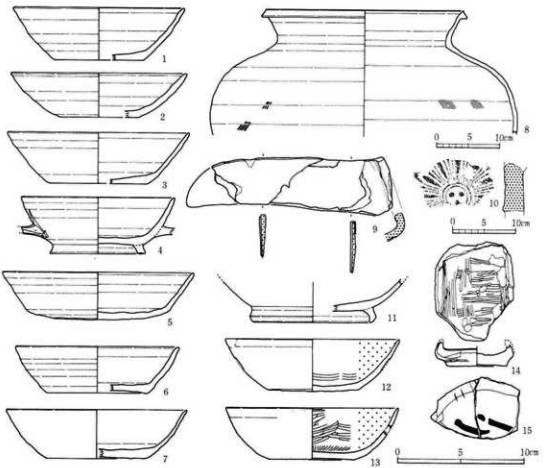
第1層から出土したものには須恵器の杯と土師器の杯・甕および灰釉陶器、軒丸瓦がある。須恵器の杯には底部が回転糸切り無調整のもの、手持ちヘラ削り調整のものがある。土師器には非ロクロ調整・ロクロ調整・調整不明のものがあり、このなかでは圧倒的にロクロ調整のものが多く、杯はすべて内黒のものである。ロクロ調整の杯では、底部が回転糸切り無調整、ヘラ切り無調整、手持ちヘラ削り調整、回転ヘラ削り調整のものがみられる。灰釉陶器は皿の小破片であり、軒丸瓦は311細弁蓮華文(第47図10)で、各1点出土している。

第2層から出土したものには須恵器の杯・甕(8)と土師器の杯・甕および須恵系土器、灰釉陶器、鉄製品がある。須恵器の杯では底部が回転糸切り無調整、ヘラ切り無調整・手持ちヘラ削り調整(2)、回転ヘラ削り調整、ヘラ切りで手持ちヘラ削り調整のものがみられ、この中では回転糸切り無調整のものが主体を占めており、この他双耳付きのもの(4)もみられる。土師器は第1層と同様に圧倒的にロクロ調整のものが多く、底部の切り離し技法・調整では回転糸切り無調整、ヘラ切り無調整、手持ちヘラ削り調整、回転ヘラ削り調整のものがみられる。須恵系土器は杯類の小破片である。灰釉陶器は段皿の破片1点である。この他鉄製品として鎌の刃(9)が1点出土している。

第4層から出土したものには須恵器では杯・高台杯・長頸瓶を含む瓶類・甕、土師器では非ロクロ調整の甕、ロクロ調整杯・高台杯・甕、調整不明の杯・甕があり、この他灰釉陶器が1点ある。須恵器の杯では底部が回転糸切り無調整、ヘラ切り無調整、ヘラ切りで手持ちヘラ削り調整、手持ちヘラ削り調整のもの(1・3)がみられる。土師器はロクロ調整のものが主体を占め、杯はすべて内黒のものである。ロクロ調整の杯には底部が回転糸切り無調整、ヘラ切りで手持ちヘラ削り調整、手持ちヘラ削り調整、回転ヘラ削り調整のものがみられ、回転糸切り無調整のものが主体を占める。須恵系土器は杯と高台杯が各1点であり、灰釉陶器は口縁部の小破片で皿とみられる。

第5層から出土したものには須恵器では杯・高台杯・甕、土師器ではロクロ調整の甕、調整不明の杯・甕がある。須恵器の杯には底部が回転ヘラ削り調整のものがみられる。

第8層から出土したものには須恵器では杯・高台杯・甕、土師器ではロクロ調整の杯・甕、調整不明の杯・甕がある。須恵器の杯には底部がヘラ切り無調整、手持ちヘラ削り調整のもの(5)がみられる。土師器のロクロ調整の杯は、内黒で底部から体部下端にかけて



番号	層位	種類	器種	備考	箱番号
1	SK1929-4層	須恵器	坏	手持ちヘラ削り	7986
2	SK1929-2層	須恵器	坏	手持ちヘラ削り	7986
3	SK1929-4層	須恵器	坏	手持ちヘラ削り	7986
4	SK1929-2層	須恵器	高台坏	貼耳	7986
5	SK1929-8層	須恵器	坏	手持ちヘラ削り	7986
6	SK1954-2層	須恵器	坏	ヘラ切り	7972
7	SK1954-3層	須恵器	坏	ヘラ切り無調整	7972
8	SK1929-2層	須恵器	甕		7986
9	SK1929-2層	鉄製品	鎌の刃		
10	SK1929-1層	瓦	軒丸瓦	311 細弁蓮華文	8030
11	SK1912-5層	灰釉陶器	椀		8002
12	SK1916 堆積層	土師器	坏	ロクロ調整、内黒	7978
13	SK1954-1・2層	土師器	坏	ロクロ調整、内黒	7972
14	SK1916 堆積層	土師器	耳皿	ロクロ調整、両黒	7978
15	SK1954-5層	須恵器	坏	墨書	7972

第 47 図　SK1912・1916・1929・1954 土壙出土の遺物

回転ヘラ削り調整されたものである。

軒丸瓦以外の瓦については出土点数を集計していないが、平瓦では第Ⅳ期のものが出土している。

SK1954（第 18・32・47 図）

調査区西半部北寄りの地山面で検出した土壙である(第 18 図)。東端部を近世以降の溝に壊されているが、平面形・規模は東西 3 m 以上、南北約 4 m の方形をなすと考えられる。壁は緩やかに立ち上がり、深さは約 40cm 残っている。堆積土は黄褐色地山小ブロック・細粒、炭化物を含むにぶい黄褐色粘質土・灰黄褐色粘質土・暗褐色土で、含有物の多寡で 6 層に細分される(第 32 図)。

本土壙は、SB1884・1886・1889・1900 建物跡、SI1903 竪穴住居跡、SK1918・1920 土壙、SD1911 溝と重複し、SB1900・SK1918・1920、SD1911 より古いが、その他のものよりは新しい。

遺物は比較的多量の須恵器・土師器、少量の須恵系土器および瓦・砥石 1 点が出土している。第 1・2 層から出土したものには須恵器の杯・高台杯・蓋・瓶類・甕、土師器では非ロクロ調整の杯・甕、ロクロ調整の杯・高台杯・甕の他調整不明の杯・甕があり、杯・高台杯はすべて内黒のものである。このなかで須恵器の杯には底部が回転糸切り無調整のもの、ヘラ切り無調整のもの、回転ヘラ削り調整のもの、手持ちヘラ削り調整のもの(第 47 図 6)がある。またロクロ調整の土師器の杯には底部が手持ちヘラ削り調整のもの(13)がある。須恵系土器は杯類の小破片 20 点である。

瓦は丸瓦 4 点、平瓦 3 点出土しており、丸瓦にはⅡB 類 a タイプ・b タイプが、また平瓦にはⅠC 類 a タイプ、ⅡB 類がそれぞれみられる。

第 3 層から出土したものには須恵器の杯・蓋、土師器では非ロクロ調整・調整不明の甕および瓦がある。このなかで須恵器の杯には底部がヘラ切り無調整のもの(7)がみられる。瓦は平瓦のⅡB 類あるいはⅡC 類 2 点が出土している。

第 4 層から出土したものには須恵器の杯・甕、土師器では非ロクロ調整の甕、ロクロ調整の杯の他須恵系土器とみられる杯の小破片 2 点、平瓦 1 点がある。須恵器の杯は底部がヘラ切りで回転ヘラ削り調整のものである。平瓦は類不明の物である。

第 5 層から出土したものには須恵器の杯、土師器では非ロクロ調整の甕がある。須恵器の杯は底部がヘラ切りで手持ちヘラ削り調整で、墨書がみられるもの(15)である。

SK1956（第 18・31 図）

SI1902 竪穴住居跡と重複してこれより新しい土壙である(第 18 図)。平面形は南北に長い楕円形をなし、規模は長径約 1.8m、短径約 0.6m で、深さは約 20cm 以上残っている。

堆積土は黄褐色地山小ブロックを多量に含むにぶい黄褐色土である。

遺物は須恵器の杯と土師器では非ロクロ調整の杯・甕と調整不明の高台杯、須恵系土器の杯類が出土している。このなかで須恵器の杯は底部と体部下端が手持ちヘラ削り調整のものであり、また土師器の杯・高台杯はすべて内黒のものである。

（7） 堆積層出土の遺物

堆積層から出土した遺物については整理作業が完了していないためここでは現段階で判明していることだけを記述する。

1．第4層出土の遺物

第4層から出土したものには図示できるものはないが、土器では須恵器と比較的多量の土師器がある。須恵器には杯・瓶類・甕があり、土師器には非ロクロ調整・ロクロ調整・調整不明の杯・甕がある。このなかで土師器の杯はいずれも内黒であり、ロクロ調整のものには底部が回転糸切りで無調整のもの、回転ヘラ削り調整のもの、手持ちヘラ削り調整のものがみられる。

2．第2B層出土の遺物

第2B層から出土したものには、土器では須恵器・土師器・須恵系土器・灰釉陶器が、瓦では平瓦・丸瓦・文字瓦があり、この他鉄製品では刀子、石製品では紡錘車、硯では風字硯・円面硯・転用硯がある。このなかで図示できるものは第48図に示してある。

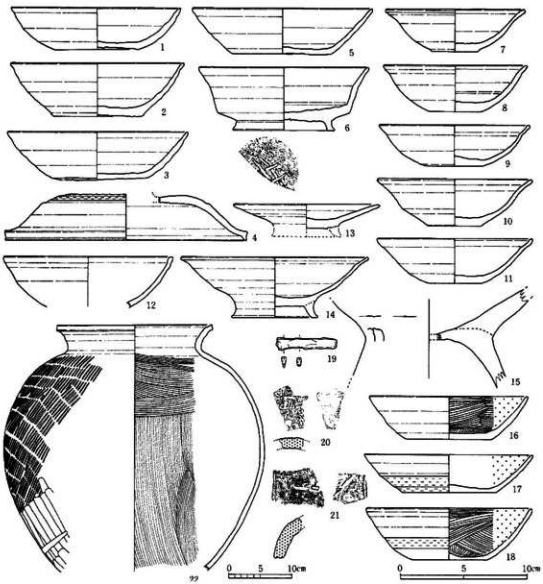
3．第2A層出土の遺物

第2A層から出土した遺物には、土器では須恵器・土師器・須恵系土器・灰釉陶器・かわらけ・中世陶器・白磁・青磁が、瓦では軒丸瓦・丸瓦・平瓦があり、この他鉄製品では釘、土製品では土鈴、硯では風字硯・転用硯がある。このなかで図示できるものは第49図に示してある。

4．第1層出土の遺物

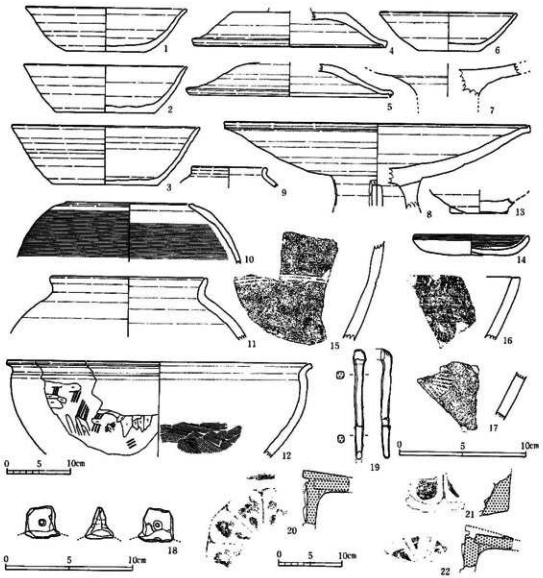
第1層から出土した遺物には、土器では須恵器・土師器・須恵系土器・灰釉陶器・かわらけ・中世陶器・白磁・青磁が、瓦では軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・文字瓦があり、この他鉄製品では刀子・釘、硯では風字硯がある。このなかで図示できるものは第50図に示してある。

註　『平城宮木簡』　奈良国立文化財研究所　1975



番号	層位	種類	器種	備考	遺番号	番号	層位	種類	器種	備考	遺番号
1	第2B層	須恵器	坏	ヘラ切り無調整	7991	12	第2B層	須恵系土器	坏		7992
2	第2B層	須恵器	坏	糸切り無調整	7991	13	第2B層	須恵系土器	高台皿		7992
3	第2B層	須恵器	坏	手持ちヘラ削り調整	7991	14	第2B層	須恵系土器	高台坏		7992
4	第2B層	須恵器	蓋		7991	15	第2B層	須恵系土器	高台鉢		7992
5	第2B層	須恵器	坏	ヘラ切り無調整	7991	16	第2B層	土師器	坏	ロクロ調整、内黒	7994
6	第2B層	須恵器	高台坏	底部ヘラ書き	7991	17	第2B層	土師器	坏	ロクロ調整、内黒	7994
7	第2B層	須恵系土器	小型坏		7992	18	第2B層	土師器	坏	ロクロ調整、内黒	7994
8	第2B層	須恵系土器	小型坏		7992	19	第2B層	鉄製品	刀子		8032
9	第2B層	須恵系土器	小型坏		7992	20	第2B層	瓦	丸瓦	刻印「物」A	8031
10	第2B層	須恵系土器	小型坏		7992	21	第2B層	瓦	丸瓦	刻印「吉」	8031
11	第2B層	須恵系土器	小型坏		7992	22	第2B層	須恵器	壺		7995

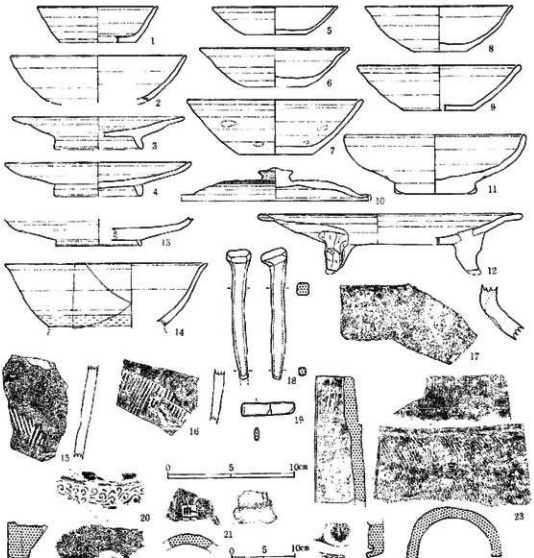
第48図　第2B層出土の遺物



番号	層位	種類	器種	備考	箱番号
1	第2A層	須恵器	坏	底部：回転糸切り無調整	7996
2	第2A層	須恵器	坏	底部：ヘラ切り→手持ヘラ	7996
3	第2A層	須恵器	坏	底部：回転糸切り無調整	7996
4	第2A層	須恵器	蓋	つまみ欠損	7996
5	第2A層	須恵器	蓋	つまみ欠損	7996
6	第2A層	須恵系土器	坏		7997
7	第2A層	須恵系土器	高坏		7997
8	第2A層	須恵器	高坏		7996
9	第2A層	須恵器	短頸瓶		7996
10	第2A層	須恵器	無頸瓶		7996
11	第2A層	須恵器	短頸瓶		7995

番号	層位	種類	器種	備考	箱番号
12	第2A層	須恵器	鉢		7976
13	第2A層	かわらけ	坏	ロクロ調整	8002
14	第2A層	かわらけ	坏	手ずくね	8002
15	第2A層	中世陶器	三筋壺		8002
16	第2A層	中世陶器	擂鉢		8002
17	第2A層	中世陶器	甕	外面に押印	8002
18	第2A層	土製品	土鈴	つまみ印	8002
19	第2A層	鉄製品	釘		
20	第2A層	瓦	軒丸瓦	221	8030
21	第2A層	瓦	軒丸瓦	250か251あるいは新種の可能性あり	8030
22	第2A層	瓦	軒丸瓦	320	8030

第49図　第2A層出土の遺物



番号	層位	種類	器種	備考	箱番号	番号	層位	種類	器種	備考	箱番号
1	第1層	須恵器	小型坏	底部：ヘラ切り→手持ヘラ	7999	13	第1層	灰釉陶器	皿		8002
2	第1層	須恵器	坏		7999	14	第1層	灰釉陶器	椀		8002
3	第1層	須恵器	高台皿		7999	15	第1層	中世陶器	甕	外面に押印	8002
4	第1層	須恵器	高台皿		7999	16	第1層	中世陶器	甕	外面に押印	8002
5	第1層	須恵系土器	小型坏		7999	17	第1層	中世陶器	甕		8002
6	第1層	須恵系土器	坏		7999	18	第1層	鉄製品	釘		
7	第1層	須恵系土器	坏		7999	19	第1層	鉄製品	刀子		
8	第1層	須恵系土器	坏		7999	20	第1層	瓦	軒平瓦	720番台	8030
9	第1層	須恵系土器	坏		7999	21	第1層	瓦	丸瓦	刻印「伊」	8031
10	第1層	須恵器	壺		7991	22	第1層	瓦	軒丸瓦	200番台	8030
11	第1層	かわらけ	坏	ロクロ調整	8009	23	第1層	瓦	丸瓦	刻印「古」	8031
12	第1層	須恵系土器	三足皿		799						

第50図　第1層出土の遺物

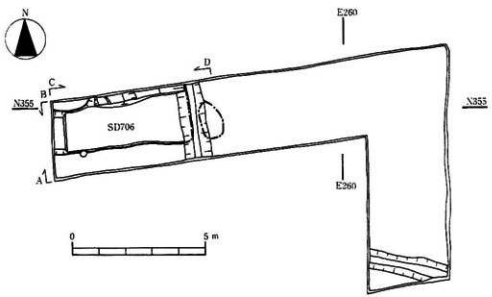
３．北西地区

北西地区で検出した遺構には SD706 溝がある。

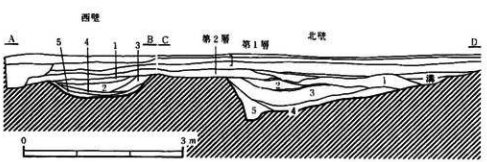
SD706（第 51・52 図）

調査区西端部の地山面で検出した東端部が北へほぼ直角に曲がる東西溝で、さらに調査区の西と北へ延びる(第 51 図)。本溝は、第 23 次調査で検出されている SD706 の東延長線上に位置し、規模が類似することから、SD706 に続くものと考えられる。方向は東西溝が南上端部でみると東で約５度北へ偏している。規模は、東西溝部分で上端幅約 1.7m、底面幅約 1.2m で、深さは約 35cm 残っている。南北溝部分では東壁が極めて緩やかに立ち上がっており、上端幅約 3.7m、底面幅約 0.7m で、深さは約 60cm 残っている。

堆積土は東西溝でみると５層に細分され(第 52 図)、いずれも自然堆積と考えられる。1



第 51 図　北西地区検出遺構全体図



第 52 図　SD706 溝断面図

・3層は黄褐色地山細粒、岩盤小ブロック・細粒を含む褐灰色土、2・4層は少量の黄褐色地山細粒・岩盤小ブロックを含む褐灰色粘質土、5層は黄褐色地山の崩落土である。

遺物は須恵器・土師器・須恵系土器のほか瓦が出土している。

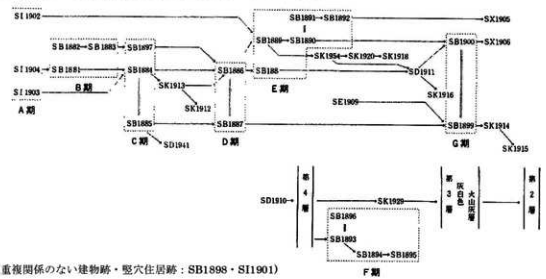
5．考　察

今回の第56次調査では前述したように東・西・北西の3地区の調査を実施し、このなかの西地区では多数の掘立柱建物跡をはじめ、竪穴住居跡・土器埋設遺構・溝・土壙などを検出した。ここでは最初に西地区で検出した建物跡・竪穴住居跡について遺構期の設定と年代について検討し、次に東・北西両地区で検出した主な遺構について東地区からみてゆくことにする。そして最後に今回の調査成果とこれまでの調査成果を合わせてまとめることにする。

Ⅰ．西　地　区

1．遺構期の設定

西地区では掘立柱建物跡26棟と竪穴住居跡4棟を検出している。これらを含めた主な遺構と堆積層との重複関係を整理すると次のようになる。



（重複関係のない建物跡・竪穴住居跡：SB1898・SI1901）

以上の重複関係を軸にし、建物跡の配置関係、柱穴の規模・形状・埋土の特徴、竪穴住居跡の諸特徴を加えた検討から、検出した建物跡・竪穴住居跡は、以下のような7時期(A期～G期)に変遷する遺構期として把握できる(第53図)。

【A 期】

竪穴住居跡は建物跡と重複する場合いずれも建物跡より古く、特に SI1904 は重複関係のなかで最も古いものである。また竪穴住居跡は、重複関係のない SI1901 を含めて、いずれも主柱穴・周溝が認められず、カマドが廃絶時に取り払われて埋め戻されているという共通した様相を呈していることから、多少の時間幅があるにしても建物より古い同時期の一連のものとみられる。以上より最も古い遺構期の A 期は、これら 4 棟の SI1901～1904 竪穴住居跡で構成されると考えられる。

【B 期】

建物跡のなかで重複関係の最も古い SB1881・1882、また SB1882 と重複してこれより新しい SB1883 は、建物跡の方向がいずれも東西発掘基準線に対して東で南に偏している。そしてこのような方向の建物跡が他にみられないことから、これら SB1881～1883 の 3 棟の建物跡は同一時期の建物跡と考えられる。

【C 期】

B 期の SB1881 と重複して新しい SB1884 は、その南約 6 m に位置する SB1885 と柱筋をほぼ揃えて南北に並んでいることや、柱間寸法が極めて類似していることから、計画的に配置された同時期の建物と考えられる。また SB1897 は、B 期の SB1883 より新しく、後述する D 期の SB1886 より古いことから C 期の建物跡と考えられる。

【D 期】

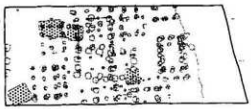
SB1886 と SB1887 は、それぞれ C 期の SB1884・1885 より新しい。そして北に位置する SB1886 は南側に、また南に位置する SB1887 は北側にそれぞれ廂を持ち、両建物は西妻の柱筋を揃えて相対するように南北に並ぶことから、計画的に配置された同時期の建物と考えられる。

【E 期】

D 期の建物跡より新しく、柱穴の埋土に第 4 層の黒褐色土を含まない SB1888～1892 建物跡を E 期のものと考えた。柱穴は規模が小さく形状が方形・不整円形とヴァラエティーに富む。このなかで SB1890 と SB1891 は東西側柱筋をほぼ揃えて南北に並ぶことから、計画的に配置された同時期の建物とみられる。また SB1892 は須恵系土器の埋設遺構である SX1905 より古い。

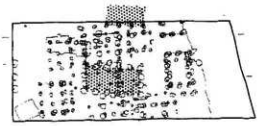
【F 期】

これまでの建物跡や竪穴住居跡とは重複しない SB1893～1896 である。これらの各建物跡は、黒褐色土である第 4 層上面で検出していることから、柱穴の埋土に第 4 層の黒褐色土が顕著に認められ、このことは E 期までの建物跡では見られない特徴である。SB1893

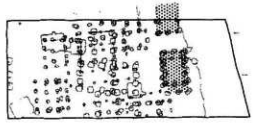


A 期 8 世紀中頃
SI1901～1904

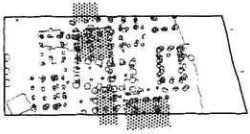
E 期 9 世紀
SB1888～1892



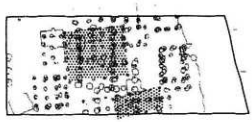
B 期 8 世紀後半
SB1881～1883



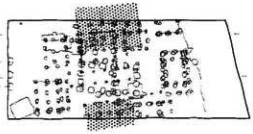
F 期 9 世紀
SB1893～1896



C 期 9 世紀初頭頃
SB1884・1885・1897・1898



G 期 10 世紀
SB1899・1900



D 期 9 世紀
SB1886・1887

第 53 図　西地区検出建物跡・竪穴住居跡の遺構期変遷図

と SB1896A、SB1894・1895 と SB1896B・C は東・西側柱筋を揃えて南北に並ぶことからそれぞれ計画的に配置された同時期の建物と考えられる。

【G 期】

D 期の SB1887 や E 期の SB1888 より新しく、柱穴の形状が円形で、埋土に第 4 層と類似する黒褐色土である第 2 B 層を多量に含むことで共通する SB1900・1899 である。SB1900 建物跡は須恵系土器の埋設遺構である SX1906 より古い。

なお、この他建物跡では重複しない SB1898 があるが、建物の方向・柱穴の規模などから C 期の建物跡と考えられる。

2．遺構期の年代

A 期については、土器の出土量はさほど多くないが、いずれの竪穴住居跡からも土師器では非ロクロ調整のものだけが出土している。このなかで杯には国分寺下層式の範疇に入るとみられる体部外面に段のあるものがあり、年代はその特徴からおよそ 8 世紀中頃と考えられる。

B 期の SB1881 は、A 期の竪穴住居跡が埋め戻されてた後に建てられた最も古い建物跡であることから B 期の年代は、A 期の年代とさほど隔たっているとは考え難い。また SB1881 では柱穴からロクロ調整の土師器が出土していないが、柱抜取穴から少量のロクロ調整の土師器が出土していることより、B 期の年代は 8 世紀の後半頃と考えられる。

C 期の年代については、出土遺物が極めて少ないため遺物から検討することはできないが、前述の B 期と後続する D 期との関係からおよそ 9 世紀の初め頃と推定しておく。

D 期では SB1886・1887 の柱穴・柱抜取穴から須恵器と土師器が出土している。このなかの土師器では SB1886B の柱穴・柱抜取穴と SB1887 の柱穴からロクロ調整のものが共に出土していることから、D 期の年代は 9 世紀代と考えられる。

E 期では SB1888～1892 の柱穴・柱抜取穴から須恵器と土師器が出土している。このなかの土師器では、SB1888・1889 の柱穴からロクロ調整のものが主体的に出土していることから、E 期の年代は 9 世紀代と考えられる。

F 期では SB1893 の柱抜取穴、SB1894・1895 柱穴・柱抜取穴、SB1896A・B・C 柱抜取穴から須恵器とロクロ調整の土師器が出土している他、SB1896C の柱抜取穴から須恵系土器の可能性のあるものが 1 点出土していることから、年代は 9 世紀の後半頃と考えられる。

G 期では柱穴・柱抜取穴から共に多量の須恵系土器が出土しており、また SB1900 が須恵系土器の埋設遺構である SX1906 に切られていることから、年代は 10 世紀代と考えられる。

以上をまとめると次表のようになる。

遺構期	遺　構	特　徴	年　代
A　期	SI1901～1904	カマドが取り払われ、埋め戻されている。	8 世紀中頃
B　期	SB1881～1883	建物の方向は東西発掘基準線に対して、東で南へ偏している。	8 世紀後半頃
C　期	SB1884・1885・1897・1898	SB1884・1885 は柱筋を揃えて南北に並ぶ。建物の方向は東西発掘基準線に対して、若干北で西へ偏している。	8 世紀末～9 世紀初め頃
D　期	SB1886・1887	SB1886 は南側に、SB1887 は北側にそれぞれ廂をもち相対するように西妻の柱筋を揃えて南北に並ぶ。	9 世紀代
E　期	SB1888～1892	SB1890 と SB1891 は柱筋を揃えて南北に並ぶ。柱穴は小規模の方形を原則とするが、バラツキがみられる。	
F　期	SB1893～1896	柱穴の埋土にこれまでのものにはみられない黒褐色土(4 層)を含む。SB1893～1895 と SB1896 はほぼ柱筋を揃えて南北に並ぶ。	(後半頃)
G　期	SB1899・1900	柱穴の形状がこれまでのものにはみられない円形をなし、柱穴の埋土は黒褐色土(2B 層)が主体である。柱穴の埋土に須恵系土器を含む。	10 世紀

Ⅱ．東　地　区

東地区で検出した主な遺構には、SB1930 建物跡、SF300 築地に伴う城外側の大溝である SD1815 がある。

SB1930 建物跡は、南北 3 間以上、東西 4 間の東西に廂を持つ掘立式の南北棟建物跡である。年代は、柱穴から遺物が出土していないが、柱穴を覆う第 3 層から出土した少量の土器のなかで、土師器には確実にロクロ調整と断定できるものかみられないことから、奈良時代と考えられる。

SD1815 大溝は平安時代の外郭東辺築地である SF300 に伴う城外側の南北大溝である。外郭東門地区を対象にした第 54 次調査(註 1)と外郭東辺中央部を対象にした第 52 次調査(註 2)では 2 時期の重複かみられたが、今回の調査では重複状況は確認できなかった。

なお、本溝は堆積層上半部に 10 世紀前半頃降灰したと考えられる灰白色火山灰層がみられることから、10 世紀前半頃にはかなり埋没していたことが知れる。

この他、奈良時代の外郭東辺築地である SF380 の想定位置の西側にあたる調査区東端部では、第 1 層直下で焼土・炭化物・瓦を多量に含む黄褐色土を確認している。これは築

地の火災による崩壊土とみられる。そしてこの築地の焼失が 780 年の伊治公呰麻呂の乱によるものと考えられることから、伊治公呰麻呂の乱による築地の火災は、外郭東門から南へは少なくとも本地区まで及んでいたことが判明した。

Ⅲ．北西地区

北西地区では SD706 溝を検出している。本溝は調査区内で北へ屈折しているが、東西溝の部分が第 23 次調査(註 3)で検出している SD706 溝の東延長線上に位置していることから、SD706 溝に接続するものと考えられる。また本溝の北へ屈折した部分の続きは、本地区の北に位置する第 13 次調査区内で検出されていないことから、両調査区間の未調査部分で止まると推定される。

この SD706 溝の性格については、東西溝部分の方向が平安時代の外郭東門から城内側へ続く道路の方向とほぼ一致するとみられ、外郭東門の手前で北へ屈折して適当な位置で止まると推定されることから、道跡の南側溝の可能性が考えられる。

Ⅳ．ま と め

最初に今回の調査成果を整理し、その後今回の調査を含めた本地区を対象としたこれまでの調査成果をまとめることにする。

今回の第 56 次調査の成果を整理すると次のようになる。

（1） 東・西・北西の各地区では 8 世紀中頃から 10 世紀にかけての建物跡 27 棟・竪穴住居跡 4 棟をはじめとして、その他に SF300 築地に伴う城内外の大溝、平安時代の道路の南側溝とみられる溝、土器埋設遺構や多数の柱穴・ピット・土壙・溝などを検出している。

（2） これらの遺構のなかで、西地区で検出した建物跡・竪穴住居跡では、8 世紀中頃～10 世紀にかけて変遷する 7 時期(A 期～G 期)の遺構期を把握することができた。このことは、今後本地区における官衙全体の変遷を検討してゆく上で、良好な資料になると考えられる。

（3） この他注目される遺構としては、西地区で検出した G 期の SX1905 土器埋設遺構がある。SX1905 は、自然石 6 個を納めた須恵系土器の甕の口縁部上に須恵系土器の杯類 12 個を重ねて小土壙に埋設したもので、地鎮の跡の可能性が考えられる。

（4） 東地区では奈良時代とみられる SB1930 建物跡の他、奈良時代の SF380 築地の崩壊土と平安時代の SF300 築地に伴う城外の大溝を検出している。この中で、SF380 築地は 780 年の伊治公呰麻呂の乱によって SB1762 外郭東門と同様に焼失したことが判明した。

（5） 北西地区では平安時代の外郭東門から城内側へ通ずる道路の南側溝とみられる溝を

検出している。

以上のこととこれまでの調査成果を考え合せると、本地区における官衙遺構はかなり広範囲にわたって分布していることが明らかになった(第 54 図)。

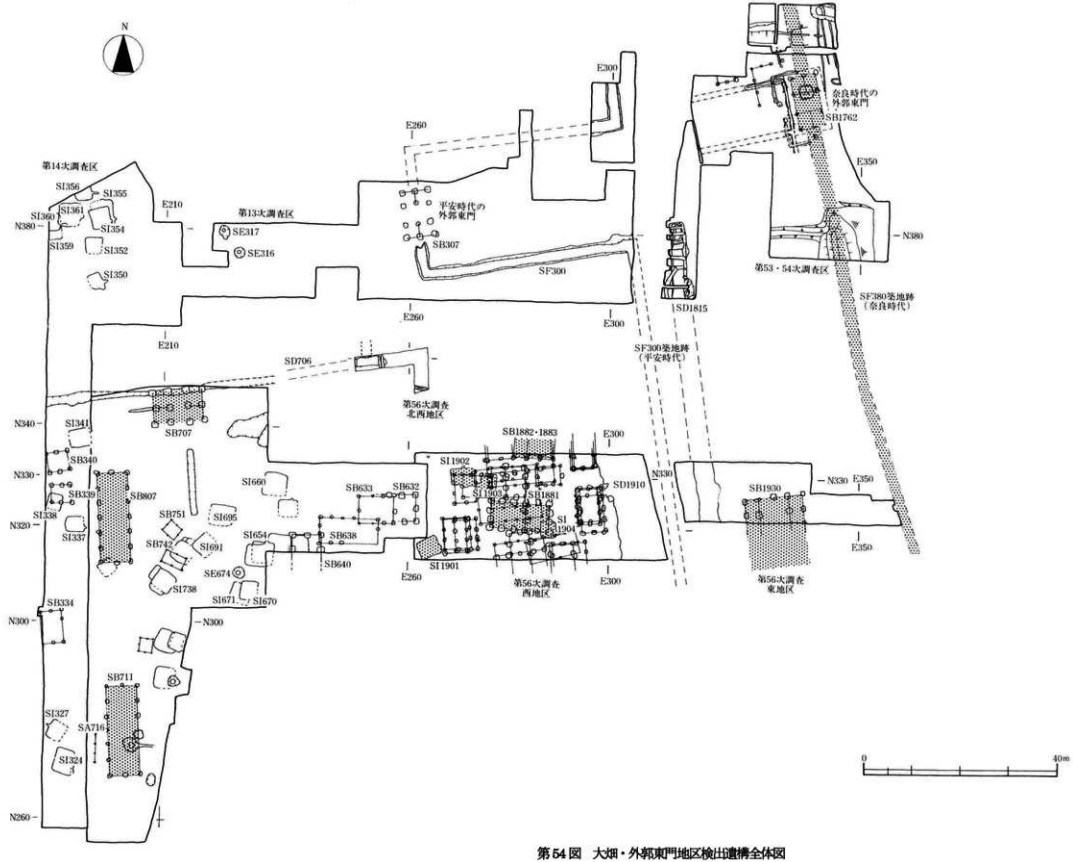
奈良時代には SB1762 外郭東門・SF380 築地とともに、SF380 築地のすぐ内側である今回の調査の東地区に建物跡 1 棟、また西地区の中央部で 8 世紀中頃とみられる竪穴住居跡 4 棟とこれに後続する建物跡 3 棟、さらに西方の第 23 次調査区内で八脚門とその南側の 2 棟の南北棟建物跡というように、遺構の密度は希薄であるが広範囲にわたって建物跡が分布していることが判明した。

その後、この奈良時代の SB1762 外郭東門と SF380 東辺築地は、780 年の伊治公呰麻呂の乱によって焼失してしまう。そしてこれらの一時的な修復後に、位置を西側へ移動し、平安時代の SB307 外郭東門と SF300 東辺築地が新たに造営されている。この平安時代には、外郭東門の南側の築地に近接した西地区周辺一帯が建物跡の集中する地区となっており、それに対してその西側の第 13・14・23 次調査区内は竪穴住居跡が集中する地区となっている。このように建物跡と竪穴住居跡の存在する地区が異なることは、平安時代には本地区のなかでも場所の使われ方に違いがあったと考えられる。

註 1 :宮城県多賀城跡調査研究所「第 53・54 次調査」『多賀城跡－宮城県多賀城跡調査研究所年報 1988』1989　P. P3～58

註 2 :宮城県多賀城跡調査研究所「第 52 次調査」『多賀城跡－宮城県多賀城跡調査研究所年報 1987』1988　P. P48～85

註 3 :宮城県多賀城跡調査研究所「第 23 次調査」『多賀城跡―宮城県多賀城跡調査研究所年報 1974』1975　P. P5～38



第54図　大畑・外郭東門地区検出遺構全体図

Ⅲ　第 57 次調査

1．調査の目的と経過

多賀城の外郭東辺南端部には、通称「雀山」と呼ばれる独立小丘陵がある。作貫地区から南南東に張り出す小丘陵と雀山の間は長さ約 120m 程の沖積地となっている。外郭東辺区画施設はこの雀山を南東隅とし、沖積地を横断して作貫・大畑・大久保地区の丘陵の東斜面を通って北に延びている。

外郭東辺南端部ではこれまでに第 11 次調査(1970 年)、第 24 次調査(1974 年)、環境整備に伴う緊急調査(1975 年)、第 41 次調査(1982 年)を実施し、外郭東辺区画施設として SF225 材木列、SA1321～1324 材木列を検出している。その結果、多賀城の外郭東辺南端部の沖積地における区画施設は、８世紀末(政庁Ⅲ期)以降一貫してこれらの材木列による塀であることが明らかになっている。しかし、多賀城創建期・Ⅱ期にまで遡る外郭東辺区画施設の実態については明らかにし得なかった。

また、外郭東辺の中央部では第 52 次調査(1987 年)・第 55 次調査(1988 年)を実施し、第 52 次調査では築地に関連する SX1742・1748 整地層、SD1709・1710 南北溝、SD1749 溝状遺構、SA1743 柱穴群を検出し、第 55 次調査では SA1850 材木塀・SF300 築地を検出している。第 55 次調査の結果、①ここの外郭東辺区画施設には５時期の変遷があること、②外郭区画施設の設置時期は不明であるが、当初は材木塀で材木塀には２時期の変遷があること、③政庁Ⅲ期以降のある時期に材木塀から築地に構造が代わり、３時期の変遷を経て 10 世紀の前半には築地はかなり崩壊していたことが明らかとなっている。第 52 次調査でも築地と関連する遺構には２時期あり、９世紀以降～10 世紀前半と想定されている。したがって、外郭東辺中央部においても、多賀城創建期・Ⅱ期にまで遡る外郭東辺区画施設の実態については明らかにし得ていない。

一方、外郭東辺北半部に位置する東門地区の第 53 次調査(1987 年)・第 54 次調査(1988 年)では、これまで考えていた外郭東門の東側で政庁Ⅰ期～Ⅲ期にかけて存続した外郭東門・築地が発見され、政庁Ⅲ期のある時期に外郭東門と築地が西側に新設され、それが政庁Ⅳ期まで存続したことが明らかとなっている。

今回の第 57 次調査の調査対象地区は、外郭東辺南端部に近く、政庁東側の作貫地区から南南東に張り出す丘陵の突端である(第１・55 図)。そして、前述のような外郭東辺におけるこれまでの調査結果を踏まえ、低湿地から丘陵にかかる地域での外郭区画施設の位置を確定してその構造と変遷を把握し、低湿地と丘陵の外郭区画施設の関係を明らかにするこ

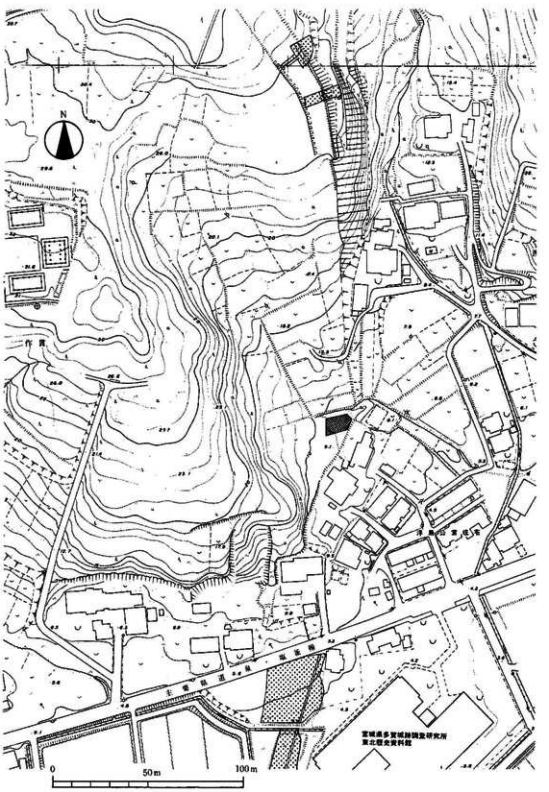
とを目的として調査することにした。調査に先立ち、外郭東門から調査対象地区周辺までを踏査した結果、調査対象地区である多賀城市作貫 23－ 1 の公有地の東端付近に外郭区画施設が位置すると予想されたので、発掘面積も約 80 ㎡と少なく設定し、調査の状況に応じて拡張することにした。

10 月 12 日に調査区の設定と機材搬入を行い、表土除去作業を開始し、10 月 18 日に表土除去作業を終了した。同日、表土直下で SD1879 大溝を検出し、この大溝に直交する幅 1.5 m の試掘トレンチを設定して、大溝の埋土を掘り下げ始めた。SD1879 大溝の試掘トレンチの掘り下げは 10 月 20 に終了した。この試掘によって、①この大溝が幅約 12.5m以上、深さ約 2 m もあり、地山礫層を約 1 m 掘り下げていること、②埋土 3 層から中世陶器の甕体部破片が 1 点出土したことから、中世の大溝であることが判明した。一方、この試掘に並行して 10 月 19 日～21 日に作貫地区から原点移動とレベル移動を行った。10 月 23 日～26 日には第56次調査の遺構平面図の実測を行ったので、この期間は第57次調査の現場は閉じた。

10 月 27 日にはグリッドを設定し、調査区南半の SD1879 大溝の掘り下げを開始し、10 月 31 日に SD1879 大溝の掘り下げを終了した。11 月 1 日・2 日には SD1789 大溝の掘り上げ状況と壁面の写真撮影を行い、調査区南壁のセクション図を実測した。11 月 6 日・7 日には SD1879 大溝の北壁セクション図を実測し、調査区北半の東側の SD1879 大溝をさらに掘り下げた。11 月 7 日～13 日までは調査担当者の怪我のため、現場を閉じた。

11 月 14 日から SD1879 大溝によって土手状の高まりとなっていた調査区東側の精査を開始し、この土手状の高まりの上面で SK1872～1875・1876・1878 土壙を検出した。これらの土壙のうち、SK1875・1878 土壙の埋土には 10 世紀前半に降灰した灰白色火山灰のブロックが含まれ、10 世紀前半以降であることが明らかとなった。しかし、当初の目的であった築地・材木塀などの外郭区画施設は検出されなかった。また、この土手状の高まりの南半部で拳大～径 30cm 前後の大きさの安山岩礫が密集して発見され、これが人為的な施設であるかどうか問題となった。土手状の高まりの上部は整地層と思われる土層で、下部が自然堆積層となっており、複数の遺構が重複していることが予想された。

そこで、これらの問題点を解明するため、土手状の高まりの北側と南側の断ち割りを行った(11 月 17 日・12 月 6 日)。その結果、①土手状の高まりの堆積層上部が 10 世紀前半よりは古い SX1871 整地層であり、南半部の安山岩礫の密集部分もその一部であること、②SX1871 整地層の下位に SD1870A・B 大溝があることが判明した。その後、平面図・断ち割り部の断面図の作成と補足調査を行い、12 月 20 日までに埋め戻し・機材撤収を完了し、調査を終えた。



第 55 図　第 57 次調査区と周辺の地形

2．発見された遺構と遺物

今回の調査で検出した主な遺構には、大溝２・整地層１・土壙８がある。これらの遺構は整地層との新旧関係で、(１)SX1871 整地層よりも古い大溝、(２)SX1871 整地層、(３)SX1871 整地層を掘り込む土壙群と大溝に大別される。以下、この順にこれらの遺構の概要とその主な出土遺物について述べる。

（１） SX1871 整地層よりも古い大溝

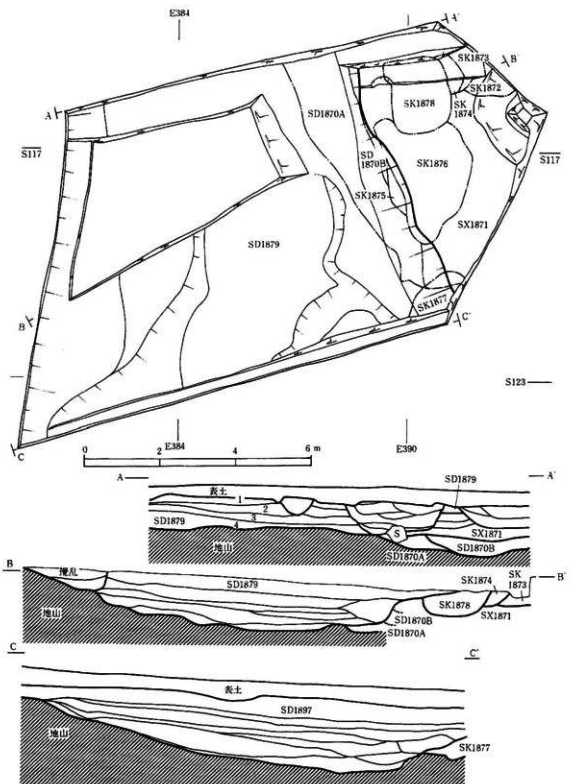
最も新しい SD1879 大溝の底面・地山礫層上面、及び調査区東側の土手状高まりの断ち割り部で SD1870A・B 大溝を検出した。

〔**SD1870A 大溝**〕（56～58 図）

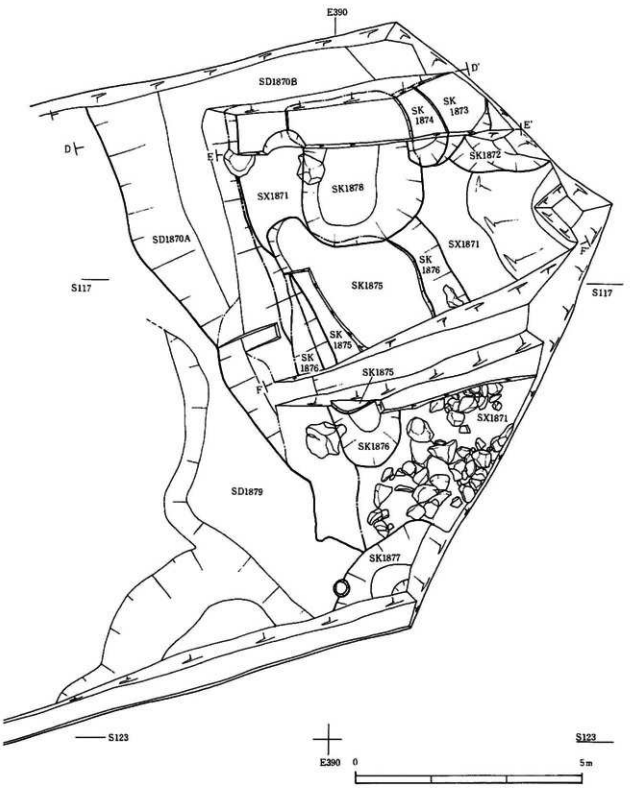
長さ約 7.5m 検出した南北大溝で、さらに調査区外の北西に延びている。南は SK1877・SD1879 大溝に切られているが、さらに調査区外の南東に延びていると推定される。大溝の南北方向は発掘南北基準線に対して北で西に約 25° 偏している。大溝の西肩は SD1879 大溝に壊され、東肩は SD1870B 大溝に壊されているため、大溝の断面形状・規模はよくわからない。残存する部分では、断面が浅い皿状で、上端幅が 2.4m 以上、底面幅が 1.4 m 以上、深さ 57cm 以上で、地山礫層(拳大～径 50cm 以上の安山岩礫を多量に含む礫層)を約 80cm 掘り下げて構築されている。調査区東側の土手状高まりの北側と南側の断ち割り部での底面との比高は、約 4.6m 離れた南側が 10cm 低く、北西から南東に緩やかに傾斜している。埋土は拳大前後の大きさの安山岩礫と砂を多量に含む黒褐色粘質シルト層で、自然堆積と推定される。直接の重複関係は、SD1870B 大溝・SX1871 整地層・SK1875・SK1877 土壙・SD1879 大溝よりも古く、調査区内で最も古い。遺物は出土しなかった。

〔**SD1870B 大溝**〕（第 56～58 図）

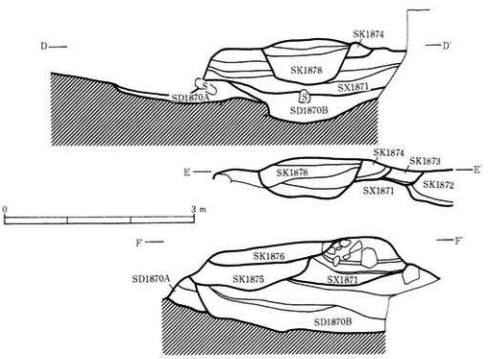
長さ約５m 検出した南北大溝で、さらに調査区外の北東に延びている。南は SK1877・SD1879 大溝に切られているが、さらに調査区外の南東に延びていると推定される。大溝の南北方向は発掘南北基準線に対して北で西に約 25° 偏しており、SD1870A 大溝の方向とほぼ一致し、SD1870A 大溝よりも約 1.5m 前後東側に寄っている。大溝の東肩は調査区外にあるため、大溝の断面形状・規模はよくわからない。残存する部分では、断面が浅い皿状で、上端幅が 4.5m 以上、底面幅が 2.5m 以上、深さ１m で、地山礫層(拳大～径 50 cm 以上の安山岩礫を多量に含む礫層)を約１m 掘り下げて構築されている。調査区東側の土手状高まりの北側と南側の断ち割り部での底面の比高は、約 4.6m 離れた南側が 40cm 低く、北西から南東に緩やかに傾斜している。



第 56 図　第 57 次調査検出遺構全体図



第 57 図　第 57 次調査検出遺構詳細図

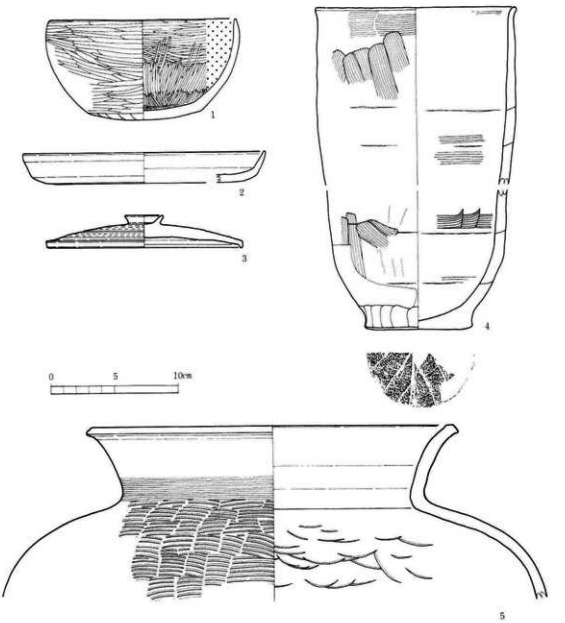


第 58 図　断ち割り部の断面

埋土は挙大前後の大きさの安山岩礫と砂を多量に含む粘質シルト層で、北側の断ち割り部では砂利層と植物遺存体を多量に含むグライ化土層の互層となっており、南側の断ち割り部でも一部グライ化しており、自然堆積と推定される。

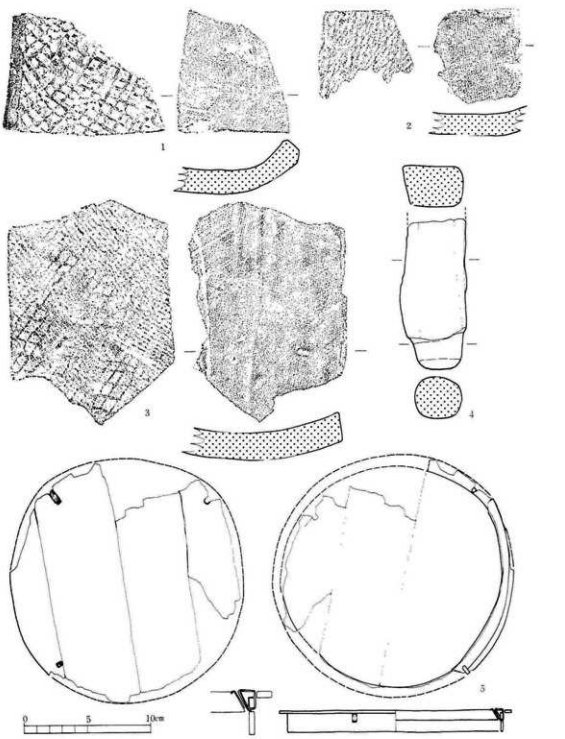
直接の重複関係は、SD1870A 大溝よりも新しく、SX1871 整地層・SK1875・SK1877・SD1879 大溝よりも古い。

出土遺物には、①ロクロ調整によらず(以下、「非ロクロ調整」という)、内面が黒色処理された(以下、「内黒」という)土師器の椀 1 点(第 59 図 1)、②非ロクロ調整の土師器の甕 4 点(第 59 図 4)、③底部が回転ヘラケズリ調整された須恵器の盤 1 点(第 59 図 2)、④底部が手持ちヘラケズリ調整された須恵器の杯 1 点、⑤リング状のつまみをもち、天井部の低い須恵器の蓋 3 点(第 59 図 3)、⑥須恵器の大甕(第 59 図 5)、⑦平瓦ⅠC 類 a タイプ 1 点(第 60 図 3)、⑧平瓦ⅠC 類 b タイプ 1 点(第 60 図 1)、⑨平瓦ⅡB 類 2 点(第 60 図 2)、⑩丸瓦Ⅱ類 1 点、⑪「円形樺皮結合曲物 A」(註 1)蓋 1 点(第 60 図 5)、⑫軸受け状の木製品(第 60 図 4)、⑬加工木材、⑭木製品製作時の削りかす、⑮ウメ・草本類などの種子や樹皮・木片などの自然遺物がある。「円形樺皮結合曲物 A」蓋は、円板内面の周縁を一段低く作り、ここに側板を立てて、円板に 2 孔 1 対の結合孔を各 4 ヶ所穿ち、樺皮紐と木釘で結合したもので、近畿の古代で用いられた円形曲物蓋の製作技術と同様である。



番号	層 位	種 類	器種	特 徴	箱番号
1	D8-S	土師器	椀	内面:ミガキ→黒色処理, 外面:ミガキ, 底部:手持ちヘラケズリ	7677
2	D8-4	須恵器	壺	内外面:ロクロナデ, 底部:回転ヘラケズリ	7677
3	D8-5	須恵器	蓋	リング状つまみ, 内面:ロクロナデ, 外面:ロクロケズリ・ナデ	7677
4	D8-S	土師器	甕	内面:ヨコナデ, 外面:ナデ, 煤付着, 底部:木葉痕	7677
5	D8-5	須恵器	甕	口頸部内外面:ロクロナデ, 体部外面:平行叩き目, 体部内面:当て	7677

第 59 図　SD1870B 溝出土遺物(1)



番号	層 位	種 類	器 種	特 徴	箱番号
1	D8-5	瓦	平瓦	Ⅰc類 b タイプ、凸面 格子叩き目、凹面 重複する布目	7677
2	D8-3	瓦	平瓦	Ⅱa類、凸面 縄叩き目、凹面 重複する布目→ナデ	7677
3	D8-2	瓦	平瓦	Ⅰc類 a タイプ、凸面 縄叩き目→格子叩き目、凹面 糸切り痕→重複する布目	7677
4	D8-⑤	木製品		一端が断面円形状に厚盛、軸受けか?	
5	D8-⑤	曲物底			

第 60 図　SD1870B 溝出土遺物(2)

（2） SX1871 整地層（第 56～58 図）

長さ約 7.5m、幅約 4.5m、最大厚 50cm 検出した整地層で、北側・南側・東側は調査区外に延びている。西肩は SD1879 大溝ですべて壊され、東は新しい撹乱で大きく壊されており、検出した段階では土手状の高まりとなっていた。この土手状の高まりの南半部では、埋土に 20～50cm 前後の安山岩の礫を多量に含み、北半部では砂礫・粘質土ブロックを不均一に含む。直接の重複関係は SD1870A 大溝・SD1870B 大溝より新しく、SK1874～1878 土壙・SD1879 大溝よりも古い。

出土遺物には、①非ロクロ調整の内黒土師器有段杯 1 点(第 61 図 1)、②ロクロ調整の内黒土師器杯 1 点(第 61 図 2)、③非ロクロ調整の土師器甕 2 点、④底部が手持ちヘラケズリ調整された須恵器杯 1 点、⑤天井部の低い須恵器の蓋 2 点、⑥内面に漆が付着した須恵器甕体部破片 1 点、⑦平瓦ⅠC 類 a タイプ(第 61 図 3)、⑧平瓦ⅡB 類(第 61 図 4)などがある。

（3） SX1871 整地層を掘り込む土壙群と大溝

〔SK1872 土壙〕（第 56～58 図）

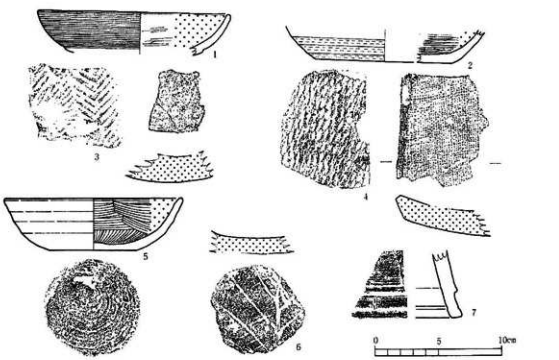
土手状の高まりの北東部の表土直下、SX1871 整地層・SK1873 土壙の堆積層上面で検出した。南部が後世の撹乱に、北西部が SK1873 土壙によって大きく壊され、北東部が調査区外に延びるため、平面形状・大きさは不明である。現状では径 1.4m 以上、断面形は浅いU字状を呈し、深さ約 55cm である。掘り方は SX1871 整地層を掘り込んでおり、底面は SX1871 整地層となっている。埋土は 2 層に分かれ、下部ににぶい褐色シルト質粘土が薄く自然堆積し、上部はφ 1～10mm前後の砂礫を多量に含む褐色シルト土で人為的に埋められている。遺物は出土しなかった。

〔SK1873 土壙〕（第 56～58 図）

土手状の高まりの北東部の表土直下、SX1871 整地層・SK1872 土壙・SK1874 土壙の堆積層上面で検出した。南西部が SK1874 土壙によって壊され、北東部が調査区外に延びるため、平面形状・大きさは不明である。現状では径 1 m 以上で、断面形は浅い皿状を呈し、深さ約 25cm である。掘り方は SX1871 整地層・SK1872 土壙を掘り込んでおり、底面はこれらの堆積層となっている。埋土は 2 層に分かれ、下部ににぶい褐色シルト質粘土が薄く自然堆積し、上部は拳大の安山岩礫とφ 1 ～ 5 mm 前後の砂礫・風化凝灰岩礫を多く含む褐色シルト土で人為的に埋められている。遺物は出土しなかった。

〔SK1874 土壙〕（第 56～58 図）

土手状の高まりの北東部の表土直下、SX1871 整地層・SK1873 土壙・SK1878 土壙の堆積層上面で検出した。南西部が SK1878 土壙によって壊されているため、平面形状・大



番号	遺 構	層 位	種 類	器 種	特 徴	箱番号
1	SX1871	D8-③	土師器	坏	外面:有段、ヨコナデ・ケズリ、内面:ミガキ→黒色処理	7677
2	SX1871	D8-③	土師器	坏	外面・底部:回転ヘラケズリ、内面:ヘラミガキ→黒色処理	7677
3	SX1871	D8-③	瓦	平瓦	ⅠC類aタイプ、凸面:矢羽根状叩き目、凹面:布目	7677
4	SX1871	D8-②	瓦	平瓦	ⅡB類、凸面:縄叩き目、凹面:布目→ナデ	7677
5	SX1876	K5-1	土師器	坏	外面:ロクロナデ、内面:ミガキ→黒色処理、皮膜状炭化物付着	7678
6	SK1876	K5-1	土師器	甕	底部:木葉痕、内面に漆付着	7678
7	SK1875	K5-2	硯	円面硯	内外面:ロクロナデ、窯	7678

第 61 図　SX1871・SK1875・SK1876 出土遺物

きさは不明である。現状では径 60cm 以上、断面形は浅い皿状を呈し、深さ約 35cm である。掘り方は SX1871 整地層・SK1873 土壙を掘り込んでおり、底面はこれらの堆積層となっている。埋土は２層に分かれ、下部ににぶい褐色シルト質粘土が薄く自然堆積し、上部はφ１～５mm 前後の砂礫・風化凝灰岩礫を多く含む褐色シルト土で人為的に埋められている。出土遺物には、①内黒土師器杯１点、②須恵器甕体部破片、③丸瓦ⅡB 類 a タイプ１点がある。

〔SK1875 土壙〕（第 56～58 図）

土手状の高まりの中央部の表土・SK1876 土壙・SD1879 大溝の堆積層直下，SX1871 整地層の堆積層上面で検出した。平面形は不整楕円形(長径約 2.7m、短径約 1.9m)で、平面的にほぼ重複する SK1876 土壙で埋土上部が壊され、西肩は SD1879 大溝で一部壊されている。断面形は浅いU字状を呈し、深さ約 50cm 以上である。掘り方は SD1870A 大溝・SD1870B 大溝・SX1871 整地層を掘り込んでおり、底面はこれらの堆積層となっている。

埋土はφ2～20mm前後の風化凝灰岩礫を多量に含み、再堆積した灰白色火山灰ブロックを含む褐色粘質シルトでしまり良く、人為堆積と推定される。

出土遺物には、①内黒土師器杯1点、②非ロクロ調整の土師器甕体部破片、③円面硯1点(第61図7)、④底部が回転ヘラケズリ→ナデ調整された須恵器杯1点、⑤外面がロクロケズリ、内面がロクロナデ調整された須恵器蓋1点、⑥須恵系土器の杯1点、⑦丸瓦Ⅱ類1点、⑧平瓦ⅡB類、⑨鉄滓などがある。

〔SK1876土壙〕(第56～58図)

土手状高まりの中央部の表土・SD1879大溝の堆積層直下、SX1871整地層・SK1878土壙の堆積層上面で検出した。平面形は不整楕円形(長径約3.5m、短径約2m)で、断面形は浅い皿状を呈し、深さ約45cmである。掘り方はSX1871整地層・SK1875土壙を掘り込んでおり、底面はこれらの堆積層となっている。平面的にはSK1875土壙とほぼ重複する。埋土はφ2～10mm前後の風化凝灰岩礫・炭を多量に含む暗褐色粘質シルトでしまり良く、人為堆積と推定される。

出土遺物には、①底部が回転糸切り無調整の内黒土師器杯1点(第61図5)、②非ロクロ調整の土師器甕体部破片、③底部内面に漆が付着し、漆容器に使用されたことがわかる土師器甕底部破片1点(第61図6)、④須恵器高台杯1点、⑤丸瓦Ⅱ類、⑥平瓦ⅡB類aタイプ1点、⑦平瓦ⅡB類、⑧鉄滓などがある。

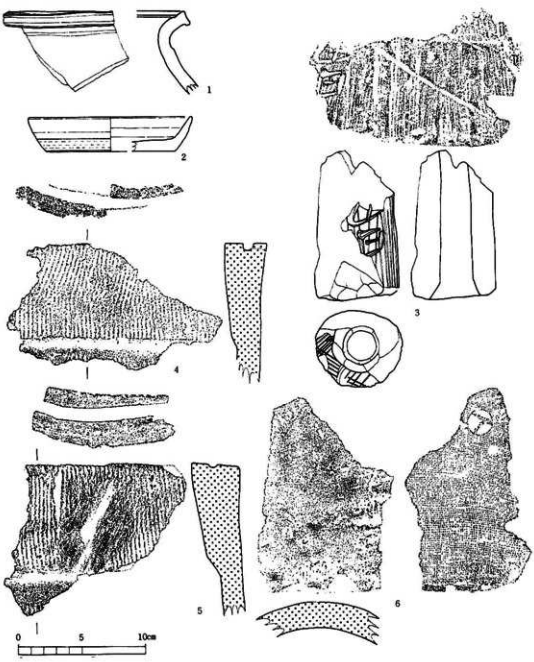
〔SK1877土壙〕(第56～58図)

土手状高まりの南西部のSD1879大溝の堆積層直下、SX1871整地層・地山面上面で検出した。南東部が発掘外に延びるため、平面形状・大きさは不明である。現状では、径約1.75m以上、深さ約60cm以上である。掘り方はSX1871整地層・地山礫層を掘り込んでおり、底面はSX1871整地層の堆積層と地山礫層となっていて凸凹である。埋土は礫を多量に含む暗褐色粘質シルトで、SD1879大溝の影響を受けて一部グライ化しているが、人為堆積と推定される。

出土遺物には、①底部が回転糸切り→ナデ調整の須恵器杯1点、②土師器甕体部破片がある。

〔SK1878土壙〕(第56～58図)

土手状高まりの北部の表土直下、SX1871整地層・SK1874土壙の堆積層上面で検出した。平面形は不整楕円形(長径約2.1m、短形約1.6m)で、断面形は浅いU字状を呈し、深さ約70cmである。掘り方はSX1871整地層・SK1874土壙を掘り込んでおり、底面はこれらの堆積層となっている。埋土は4層に分かれ、φ2～5mm前後の風化凝灰岩細礫を多量に含み、再堆積した灰白色火山灰ブロックを含む暗褐色シルトで、しまり良く、人為堆積



番号	層　位	種　類	器　種	特　徴	図番号
1	D1−3c	中世陶器	壺		7676
2	D1−5	須恵器	坏	外面：ロクロナデ・回転ヘラケズリ、内面：ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ	7683
3	D1−5	輸羽口		外面：筋状圧痕→ヘラ描き文字「日」「刀」?	7676
4	D1−5b	瓦	軒平瓦	単弧文軒平瓦 640-a1 タイプ、顎面：縦位縄叩き目 平瓦接合部：縄叩き目→斜格子状ヘラキザミ	7680
5	D1−3	瓦	軒平瓦	単弧文軒平瓦 640-a1 タイプ、顎面：縦位縄叩き目（II類）	7682
6	D1−2	瓦	丸　瓦	II B 類 a タイプ、凸面：縄叩き目→ロクロナデ、凹面：布わせ目、刻印記号	7682

第 62 図　SD1879 大溝出土遺物

と推定される。

出土遺物には、①内黒土師器杯、②非ロクロ調整の土師器甕体部破片、③底部回転ヘラケズリ無調整の須恵器杯１点、④天井部の低い須恵器蓋１点、⑤須恵器甕口縁部・体部破片、⑥須恵系土器杯、⑦丸瓦ⅡＢ類・Ⅱ類、⑥平瓦ＩＡ類・ⅡＢ類、⑦輪羽口１点、⑧鉄滓などがある。

〔SD1879 大溝〕（第 56～58 図）

表土直下で長さ約８m 検出した最も新しい大溝で、さらに調査区外の南と北に延びている。大溝の南北方向は、発掘基準線に対して北で西に約 30° 偏している。断面形は浅い不整形な皿状で、東肩はやや急激に立ち上がり、西肩は検出していないが、なだらかに立ち上がる。上端幅は 12.5m 以上で、底面幅は約４m 前後、深さは約２m である。また、大溝は拳大～径 50cm 以上の礫を多量に含む地山礫層を約１m 掘り下げて構築されている。埋土下部は地山礫層に由来する礫を多量に含むグライ化した砂礫層で、上部は粘質シルト層であり、いずれも自然堆積層である。

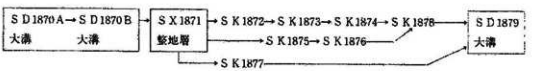
出土遺物には、①中世陶器の口縁部破片１点(第 62 図 1)、体部破片４点、②灰釉陶器の杯口縁部破片１点・体部破片１点、器形不明体部破片１点、③外面に簾状の圧痕とヘラ描き文字のある輪羽口１点(第 62 図３)、④土師器の杯・高台杯・甕、⑤須恵器の杯・高杯・高台杯・蓋・甕、⑥須恵系土器の杯・高台杯・高台皿、⑦軒平瓦 640(第 62 図４・５)、⑧平瓦ＩＡ類ａタイプ・ＩＡ類ｂタイプ・ＩＢ類ｂタイプ・ＩＣ類ａタイプ・ⅡＢ類ｂタイプ・ⅡＢ類、⑨刻印丸瓦ⅡＢ類ａタイプ(第 62 図６)、丸瓦ⅡＢ類・Ⅱ類、⑩鉄滓、⑪馬の歯や種不明の橈骨・上腕骨などがある。このうち、中世陶器は埋土の５ｂ・３ｃ・３層から出土しており、同一個体をいくつか含む可能性がある。胎土・焼き・器形などの特徴から、13 世紀前半の常滑窯製品と考えられる(註２)。

註１　奈良国立文化財研究所　1985『木器集成図録　近畿古代編』奈良国立文化財研究所史料第 27 冊

註２　赤羽一郎氏(愛知県教育委員会)・藤沼邦彦氏(東北歴史資料館)の御教示による。

３．考　　察

今回の調査で検出した主な遺構には、大溝２・整地層１・土壙８がある。これらの遺構は整地層との新旧関係で、(１)SX1871 整地層よりも古い大溝、(２)SX1871 整地層、(３)SX1871 整地層を掘り込む土壙群と大溝に大別された各遺構の重複関係と埋土の堆積状況をもとに、各遺構の新旧関係を整理すると以下のようになる。



次に、この新旧関係をもとに各遺構の出土遺物と埋土の堆積状況からみた年代観とを加え、各遺構の所属時期・年代について検討する。

①SD1870B 大溝からは非ロクロ調整の内黒土師器杯・土師器甕、底部回転ヘラケズリ調整の須恵器盤、底部手持ちヘラケズリ調整の須恵器杯が出土しており、須恵系土器は出土していない。また、須恵器の盤・蓋の形態・製作技法の特徴は、8世紀中葉に比定される硯沢窯跡出土品(註3)に類似している。土師器・須恵器の出土点数は少ないが、これらの土器群は「多賀城跡出土土器の変遷」(註4)における A 群土器に相当する。また、出土した瓦は政庁Ⅰ期の平瓦ⅠC類 a タイプ・ⅠC類 b タイプと政庁Ⅱ期の平瓦ⅡB類である。したがって、出土した土器・瓦から見れば SD1870B 大溝の所属時期・年代の上限は政庁Ⅱ期以降、8世紀後半以降と考えられる。下限については、SX1871 整地層の所属時期・年代に検討を加えた後に改めて述べる。

②SX1871 整地層からは非ロクロ調整の内黒土師器有段杯・土師器甕、ロクロ調整の内黒土師器杯、底部手持ちヘラケズリ調整の須恵器杯が出土しており、須恵系土器は出土していない。土師器・須恵器の出土点数は少ないが、これらの土器群は「多賀城跡出土土器の変遷」(註4)における A 群土器・B 群土器に相当する。また、出土した瓦で時期のわかるものには政庁Ⅰ期の平瓦ⅠC類 a タイプが1点あるのみで、他には時期の特定できる瓦はない。したがって、出土した土器・瓦から見れば、B 群土器の年代が SX1871 整地層の所属時期の上限(＝SD1870B 大溝の時期の下限)を示すことになる。B 群土器の年代は8世紀後半～9世紀初頭、政庁Ⅱ・Ⅲ期に比定されているので、SX1871 整地層の所属時期・年代の上限(＝SD1870B 大溝の時期の下限)は政庁Ⅱ期、8世紀後半ということになる。下限については、SX1871 整地層よりも新しい土壙の所属時期・年代に検討を加えた後に改めて述べる。

③SK1875・SK1878 土壙は埋土に再堆積した灰白色火山灰(10 世紀前半に宮城県内に降灰した地域的なテフラ)のブロックを含む。また、SK1875・SK1878 土壙からは須恵系土器杯が出土しており、須恵系土器の出現年代は 10 世紀前半と考えられている。したがって、SK1875・SK1878 土壙の上限年代は 10 世紀前半以降に位置づけられる。下限については埋土に灰白色火山灰ブロックを含むことから、上限年代に近いと考えられる。なお、SK1875 土壙は SX1871 整地層を掘り込んでいるので、SX1871 整地層の下限年代は 10 世

紀前半以降になる。

④SK1872～1874 土壙はSX1871整地層を掘り込み、SK1878土壙に一部壊されている。SX1871 整地層の上限年代が８世紀後半、SK1878 土壙の上限年代が 10 世紀前半以降に位置づけられることから、SK1872～1874 土壙は上限年代が８世紀後半、下限年代が 10 世紀前半以降に位置づけられる。ただし、SK1872～1876・1878 土壙はいずれも SX1871 整地層を掘り込み、人為的に埋められている可能性が高い土壙であり、近接した時期の所産と考えられる。したがって、SK1872～1874 土壙の年代は SK1875・SK1878 土壙の上限年代である 10 世紀前半以降にほぼ相当すると考えられる。

⑤SD1879 大溝からは 13 世紀前半まで遡る可能性がある中世陶器が出土し、中世以降の遺物が出土していないので、SD1879 大溝は中世ないし中世以前の大溝と考えられる。

⑥SD1870B 大溝は SD1870A 大溝よりも約 1.5m 東側に寄ってほぼ重複し、方向もほぼ一致するので、SD1870A 大溝を改修した可能性が高い。したがって、出土遺物がないため不確かであるが、SD1870A 大溝の所属時期・年代も SD1870B 大溝に近い可能性がある。

⑦SK1877 土壙は SX1871 整地層を掘り込み、SD1879 大溝に覆われている。したがって、上限年代は８世紀後半で、下限年代は 13 世紀前半となる。

次に各遺構の性格について若干の検討を加える。

①SD1870A・B 大溝は政庁Ⅱ期ないしそれ以降の南北大溝で、方向が発掘南北基準線に対して北で西に約 25° 偏している。外郭東辺付近に位置する大溝であるが、外郭東辺を区画するかどうかは部分的な検出に留まっているため、将来の検討に委ねたい。

②SX1871 整地層は政庁Ⅱ期～Ⅳ期、８世紀後半～10 世紀前半の間に位置づけられ、南半部では埋土に 20～50cm 前後の安山岩の礫を多量に含む。埋土に含まれる安山岩の礫は基盤の礫層に含まれるものであり、この整地が行われた時期に付近で基盤の礫層まで掘削する事業が行われたことを示している。今回の調査は外郭東辺区画施設を確認することが主目的であった。しかし、外郭東辺区画施設は検出されず、外郭東辺区画施設はおそらく調査区の東側に存在していたと考えられる。そして基盤の礫層まで掘削する事業が行われたことを示す SX1871 整地層は、外郭東辺区画施設の築地に伴う大溝の掘削と関連する可能性も考えられる。

③SX1871 整地層を掘り込む SK1872～1876・1878 土壙は、SX1871 整地層を掘り込む一連の土壙で、10 世紀前半以降に位置づけられると考えられる。性格については不明であり、人為的に埋め戻されていると考えられる。

④SD1879 大溝は上端幅 12.5m、深さ約２m の大溝である。埋土中から 13 世紀前半まで

遡る可能性がある中世陶器が出土しているので、中世ないし中世以前の時期に位置付けられる。掘削の時期については不明確であるが、古代だとすれば外郭東辺区画施設の築地の内側に伴う大溝の可能性もある。いずれにせよ部分的な検出に留まっているため、将来の検討に委ねたい。

註3　宮城県教育委員会　1987『硯沢・大沢窯跡ほか　仙台－松島道路建設関係遺跡調査報告書』宮城県文化財調査報告書第116集

註4　白鳥良一　1980　「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』　多賀城跡調査研究所　P. P1～38

4．ま　と　め

今回の調査は外郭東辺区画施設を確認することが主目的であった。しかし、外郭東辺区画施設は検出されず、外郭東辺区画施設はおそらく調査区の東側に存在していたと考えられる。基盤の礫層まで掘削する事業が行われたことを示すSX1871整地層は、外郭東辺区画施設築地に伴う大溝の掘削と関連する可能性も考えられる。

Ⅳ 付　章

1．関連研究・普及活動

平成元年度は多賀城跡の発掘調査の他に以下のような関連研究や普及活動を行った。

(1) 多賀城関連遺跡の発掘調査

当研究所では多賀城に関連する古代遺跡について計画的な調査研究を実施している。本年度は多賀城関連遺跡第４次５か年計画の初年度にあたり、加美郡宮崎町鳥嶋字東山から鳥屋ヶ崎字八幡裏に所在する東山遺跡を対象として実施してきた。本遺跡としては第４年次にあたり、調査期間は６月19日から10月３日まで、事業費は7,000千円(50%国庫補助)である。この成果は多賀城関連遺跡発掘調査報告書第15冊「東山遺跡Ⅳ」として刊行する。

(2) 多賀城跡の環境整備

平成元年度の環境整備事業は第４次５か年計画の最終年次にあたり、総事業費27,112千円(国庫補助50%)で実施した。対象地区は外郭東門・大畑地区のうち市道市川線の北側の地区で、面積は約6,700㎡である。主な工事内容は外郭東辺・北辺沿いに巡れることを計画の前提として、園路工、広場工、および休息展望所などの便益施設設置工である。

この他に、第５次５か年計画対象地区の地形測量(縮尺１：200)の作成を実施した。

(3) 遺構調査研究事業

本事業は多賀城跡で検出した建物、塀跡などの遺構について、その保存・活用を目的として、他遺跡における類例とも検討しながら基礎的な調査研究を行うものである。本年度は遺構調査研究事業、第３次５か年計画の第２年次として西日本で最も調査が進んでいる伯耆国府跡(鳥取県)と陸奥鎮守府であった胆沢城跡(水沢市)に関する発掘データの収集を主に実施した。

(4) 現地説明会の開催

発掘調査の成果を一般に公開するため下記の現地説明会を実施した。

「多賀城跡第56・57次調査について」　平成元年12月２日　説明者　後藤秀一・柳沢和明

「東山遺跡第４次調査について」　平成元年９月９日　説明者　丹羽　茂・村田晃一

(5) 他機関への発掘調査などの協力

史跡城生柵跡　　中新田町教育委員会　　高野芳宏・丹羽　茂・村田晃一

(6) 講演会などへの協力

古川雅清「史跡公園の整備手法」一迫町ふるとピア懇談会　　H１．４．20

高野芳宏「出土遺物と文字について」石巻文化センター古文書解読講座　H１．７．22

古川雅清「史跡整備とその問題点」わくや万葉の里づくり（仮称）涌谷町職員研修　H１．８．９

桑原滋郎「胆沢城セミナー、－多賀城をたずねて－」水沢市成人大学講座　H１．９．13

古川雅清「特別史跡多賀城跡」宮城県研修センター初任者研修　H１．10．13

古川雅清「遺跡保存整備課程－官衙Ⅱ」奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター埋蔵文化財技術者研修　H１．10．20

（7） 研究発表など

桑原滋郎「東北地方の寺院と官衙の問題」　シンポジウム“福島県における古代土器の諸問題”　H１．11．19

桑原滋郎「８　古代の行政施設－多賀城－」　『歴史のふるい都市群３－東北地方太平洋側の研究』　大明堂

桑原滋郎「宮城県内の古代寺院について」　『中新田町史研究第２号』

後藤秀一「多賀城跡第56次調査」第16回古代城柵官衙遺跡検討会　H２．２．17

村田晃一「東山遺跡第４次調査」第16回古代城柵官衙遺跡検討会　H２．２．17

古川雅清「整備計画と覆屋建設」月刊文化財(318号)第一法規出版

（8） そ の 他

桑原滋郎　多賀城市文化財保護委員、中新田町史編纂委員、多賀城市史編纂・執筆委員、仙台市郡山遺跡調査指導委員、秋田城環境整備指導委員、盛岡市志波城跡史跡整備委員、水沢市胆沢城跡保存管理策定委員、平泉遺跡群発掘調査指導委員、関和久上町遺跡発掘調査指導委員、会津若松市大戸窯跡群調査研究指導委員、多賀城市総合計画策定に係るビジョン懇談会委員

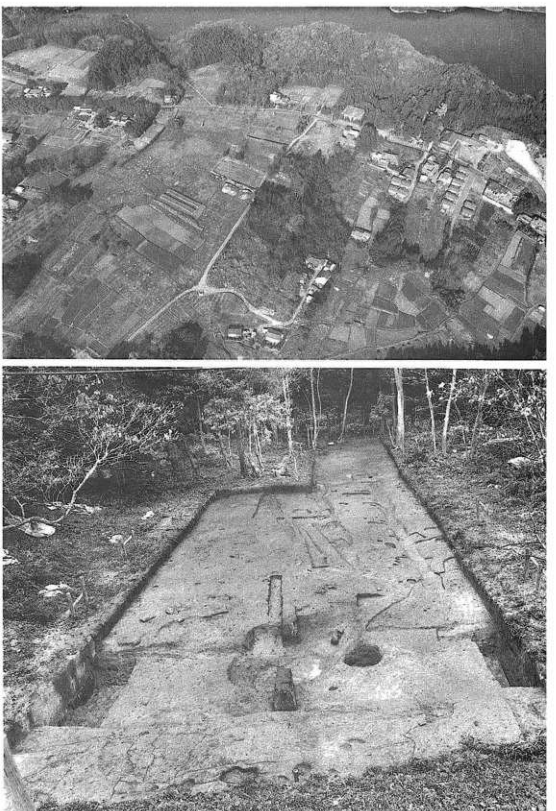
高野芳宏　多賀城市史執筆委員、古川市宮沢遺跡環境整備委員、仙北町払田柵環境整備審議委員、会津坂下町大江古屋敷遺跡発掘調査指導

古川雅清　古川市宮沢遺跡環境整備委員、仙台市旧石器の森・原始古代村基本構想策定委員、松山町千石城跡保存整備基本計画策定委員、田尻町中沢目貝塚保存計画策定委員、わくや万葉の里づくり（仮称）整備委員、山王囲遺跡整備計画策定指導、仙北郡払田柵環境整備審議委員、盛岡市志波城跡史跡整備策定委員、秋田城跡環境整備現地指導

２．研究成果刊行物

（1）『多賀城跡』　宮城県多賀城跡調査研究所年報・1988　1989．３

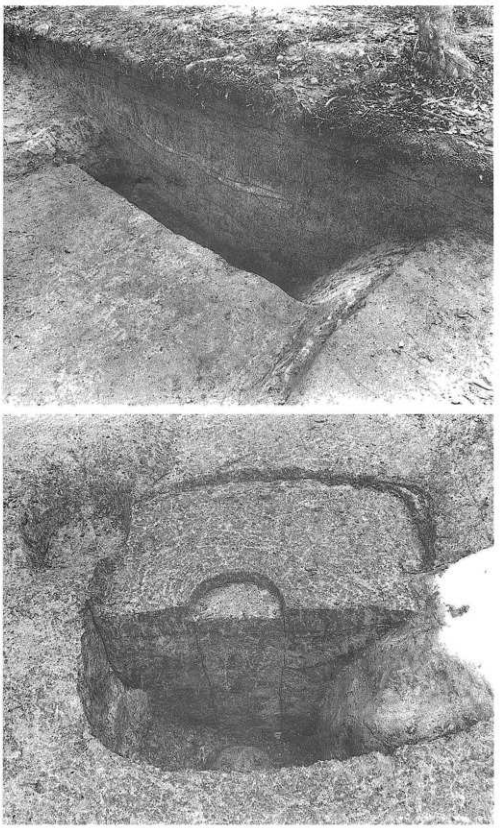
（2）『東山遺跡Ⅲ』　多賀城関連遺跡発掘調査報告書第14冊　1989．３



図版 1　第 56 次調査

上：大畑地区全景（南東上空より）

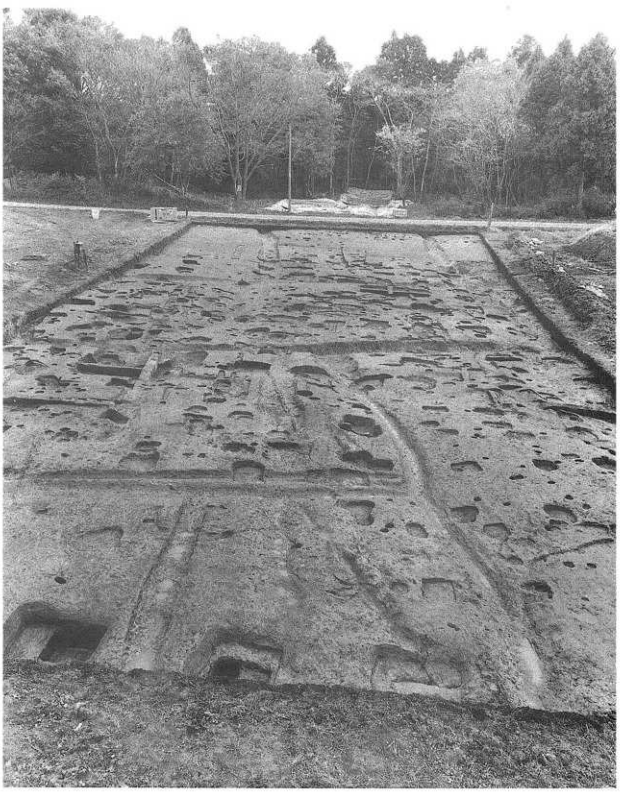
下：東地区全景（西より）



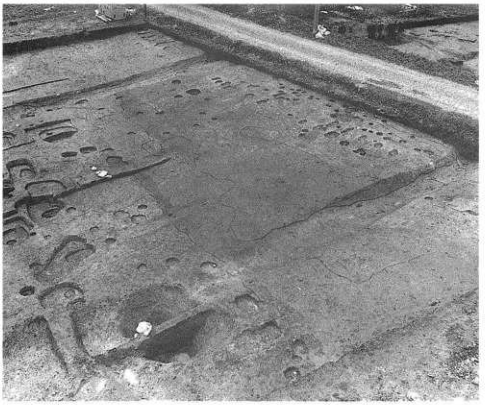
図版２　第 56 次調査

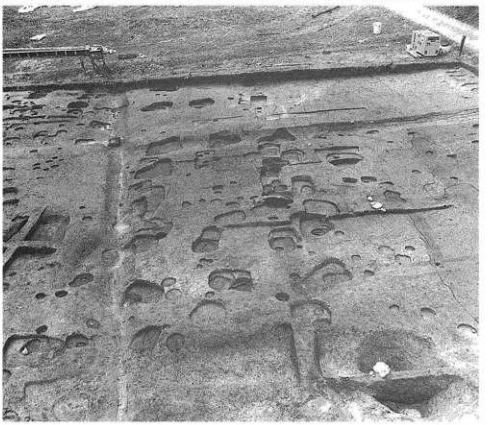
上：SD1815 溝断面図（南壁）

下：SB1930 建物跡東側柱列（廂）北端の柱穴



図版３　第 56 次調査　西地区全景（西から）





図版 4　第 56 次調査

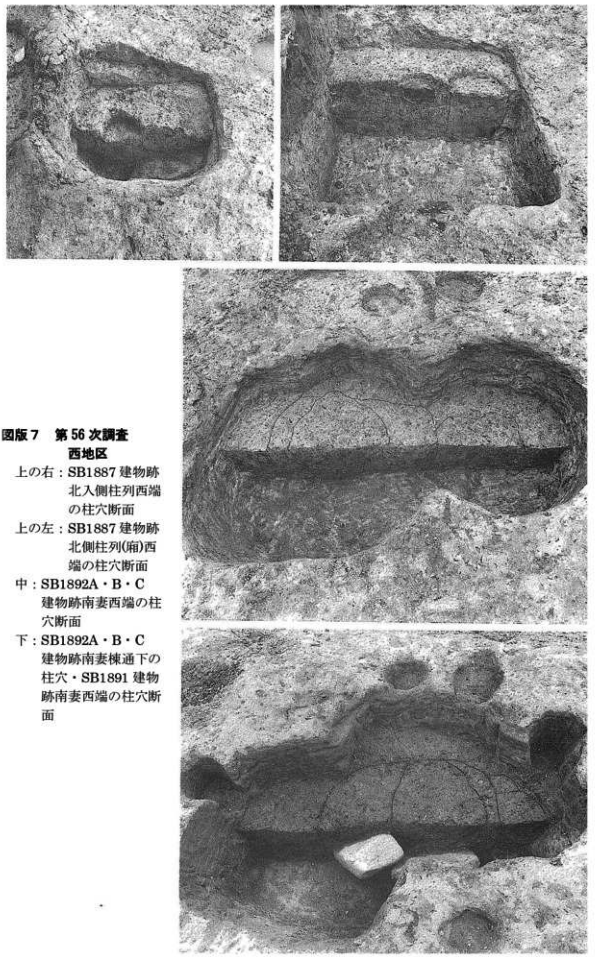
上：西地区東端部　SD1910 大溝と堆積層の状況（南西より）
下：西地区東端部　SB1893～1895（手前側）・SB1896（奥）（南より）

図版５　第 56 次調査

上：西地区中央部（南から）
下：西地区西半部（南から）

図版6　第56次調査
西地区

上：SB1881 建物跡東妻南端の柱穴断面
中：SB1881 建物跡間仕切りの柱穴断面
下：SB1886 建物跡南入側柱列西端の柱穴断面



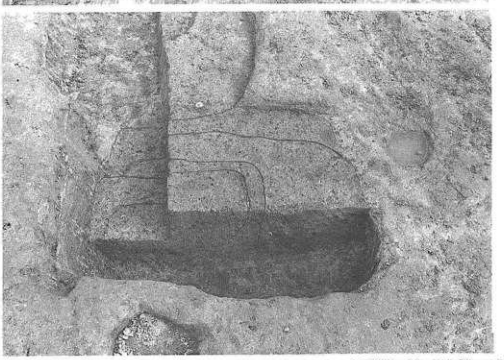
図版7　第56次調査
西地区

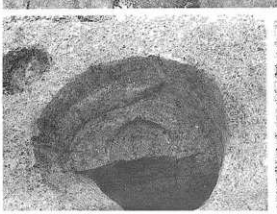
上の右：SB1887建物跡北入側柱列西端の柱穴断面

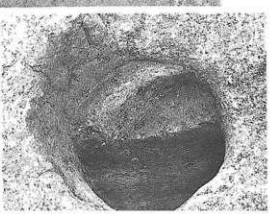
上の左：SB1887建物跡北側柱列(廂)西端の柱穴断面

中：SB1892A・B・C建物跡南妻西端の柱穴断面

下：SB1892A・B・C建物跡南妻棟通下の柱穴・SB1891建物跡南妻西端の柱穴断面







図版8　第56次調査
西地区

上：SB1891 建物跡南妻棟直下柱穴 SB1892 南妻東端の柱穴断面（北から）

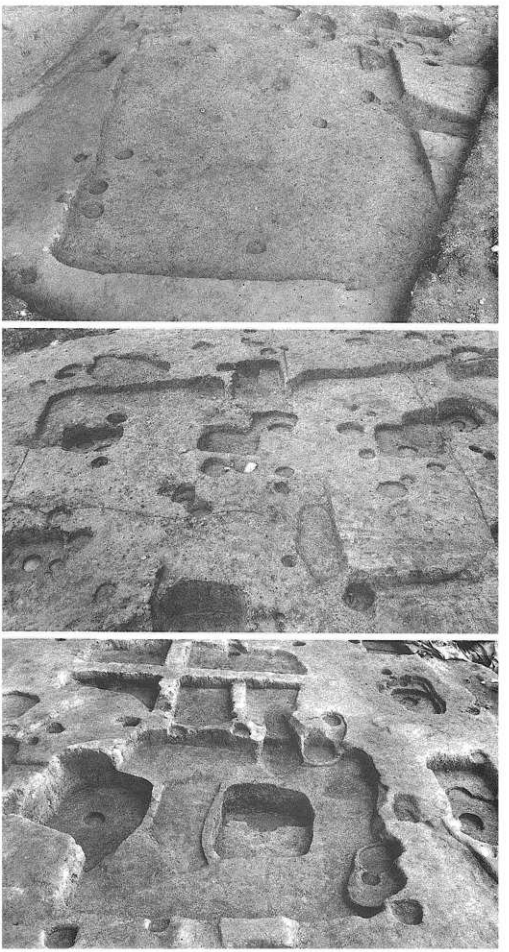
中：同上（西から）

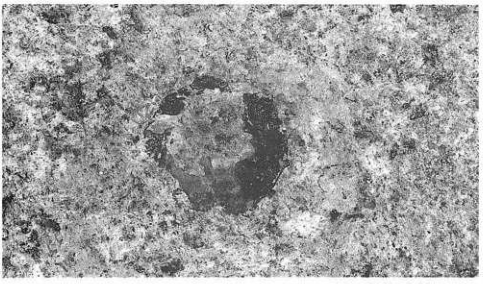
下の右：SB1900 建物跡北東隅柱穴断面

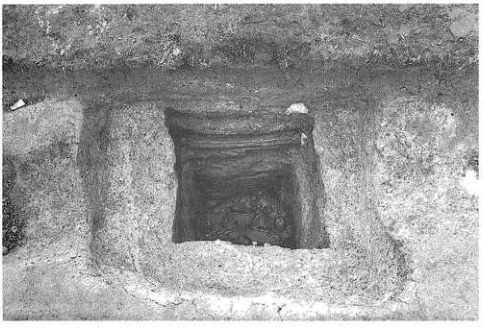
下の左：SB1900 建物跡身舎北東隅柱穴断面

図版９　第 56 次調査
西地区

上：SI1901 住居跡
(南西より)
中：SI1902 住居跡
(南より)
下：SI1904 住居跡
(西より)

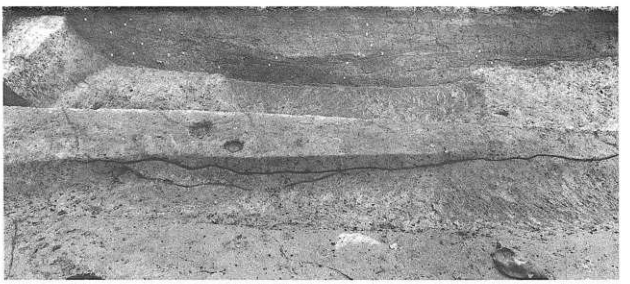






図版 10　第 56 次調査
西地区

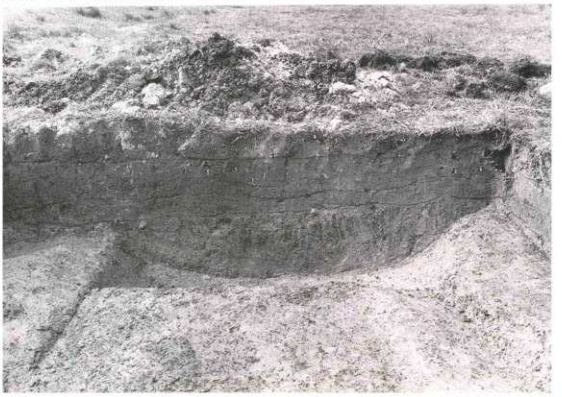
上：SI1903 住居跡
(東から)
中：SI1903 住居跡
出土の漆紙文書
下：SE1909 井戸
(北から)



図版 11　第 56 次調査　西地区

上：SD1910 溝・SK1929 土壙断面(調査区南壁)

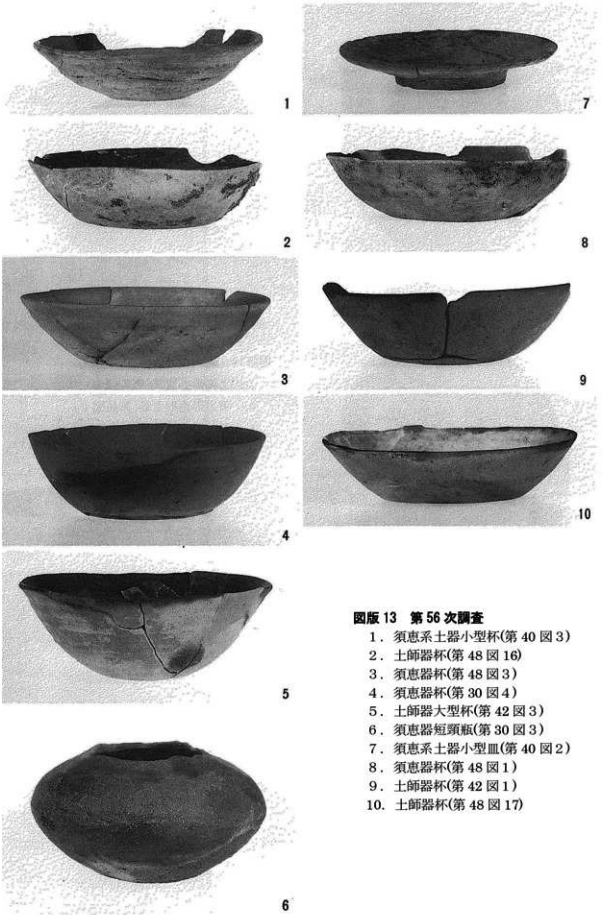
下：SX1905 土器埋設遺構(北東より)



図版 12　第 56 次調査
北西地区

上：北西地区西半部
SD706 溝
（東より）

下：SD706 溝断面
（調査区西壁）



図版 13　第 56 次調査

1．須恵系土器小型杯(第 40 図 3)
2．土師器杯(第 48 図 16)
3．須恵器杯(第 48 図 3)
4．須恵器杯(第 30 図 4)
5．土師器大型杯(第 42 図 3)
6．須恵器短頸瓶(第 30 図 3)
7．須恵系土器小型皿(第 40 図 2)
8．須恵器杯(第 48 図 1)
9．土師器杯(第 42 図 1)
10．土師器杯(第 48 図 17)

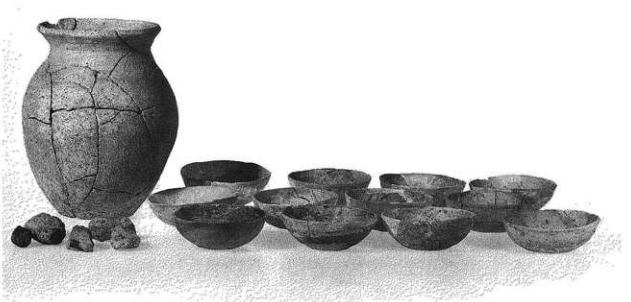
1

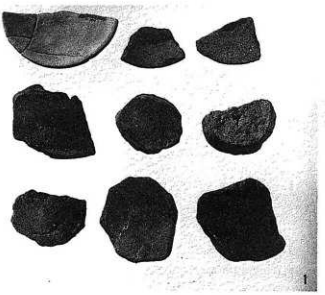
2

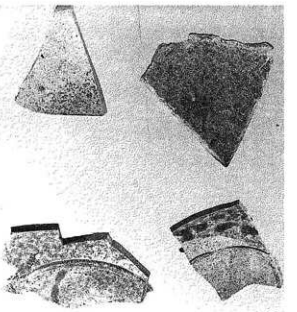
3

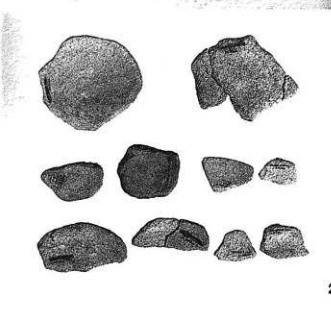
図版 14　第 56 次調査

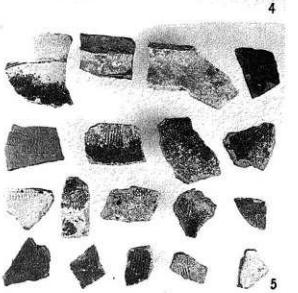
1．土師器小型甕(第 40 図 1)
2．須恵器鳥形土器(第 46 図 1)
3．須恵器ヘラ書き(第 48 図 6)
4．SX1905 土器埋設遺構出土
　の須恵系土器(第 37 図)

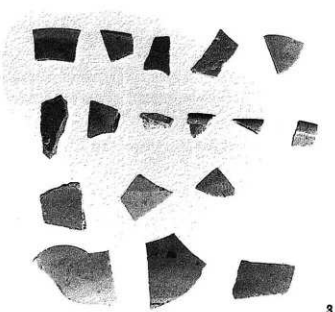






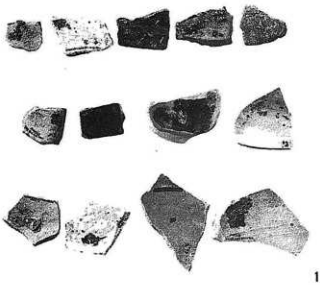




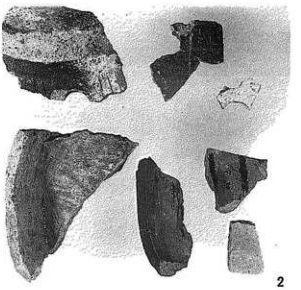


図版 15　第 56 次調査

1．各層出土のかわらけ
2．各層出土のかわらけ
3．各層出土の青磁・白磁
4．各層出土の灰釉陶器
5．各層出土の中世陶器



1



2

3a

3b

4

5

6

7

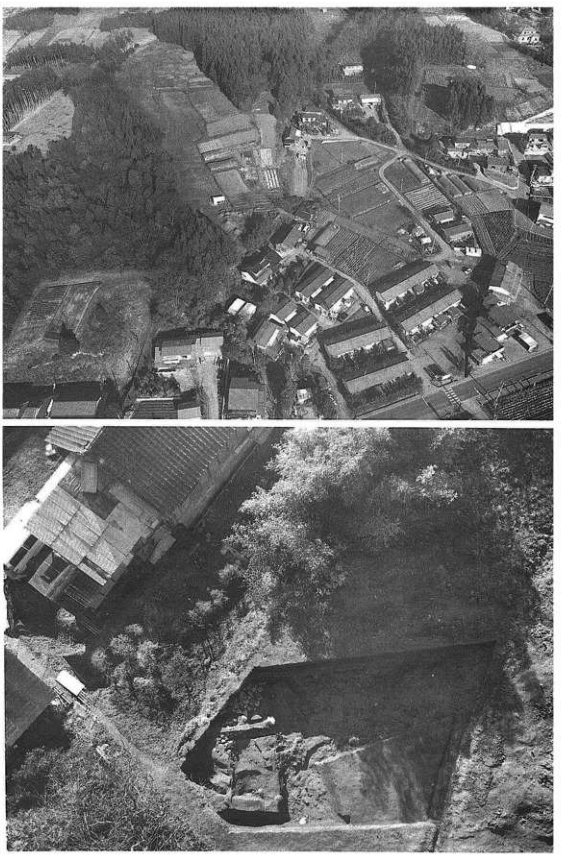
8

9

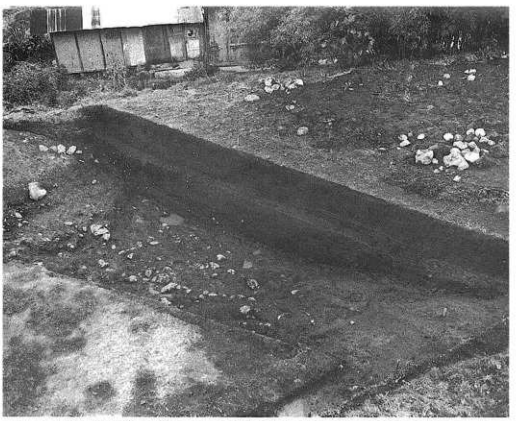
10

図版 16　第 56 次調査

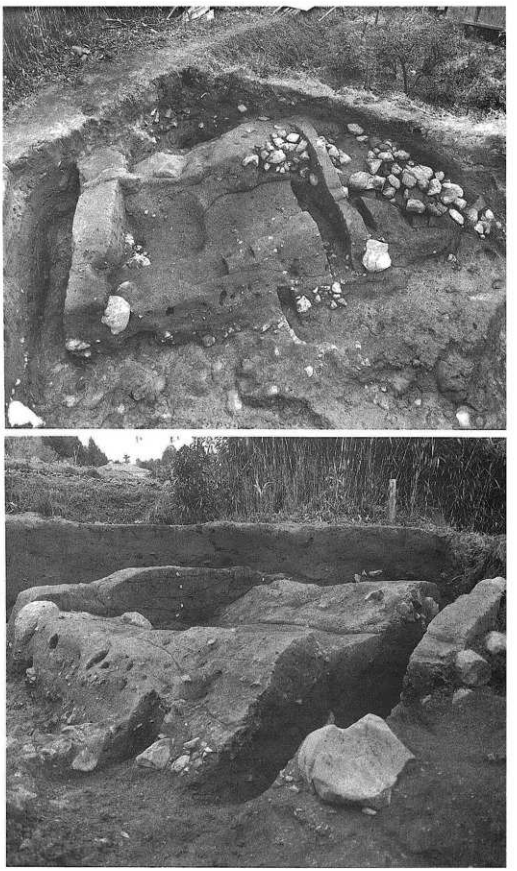
1．各層出土の漆の付着した土器片
2．各層出土の硯（風字硯・円面硯）
3．曲物の蓋（第 44 図 16）
4．櫛（第 44 図 13）
5．石製の巡方（第 28 図 10）
6．石製の紡錘車（第２B 層）
7．石製の紡錘車（第２B 層）
8．刀子（第 44 図 14）
9．鎌の刃（第 47 図９）
10．各層出土の釘・刀子



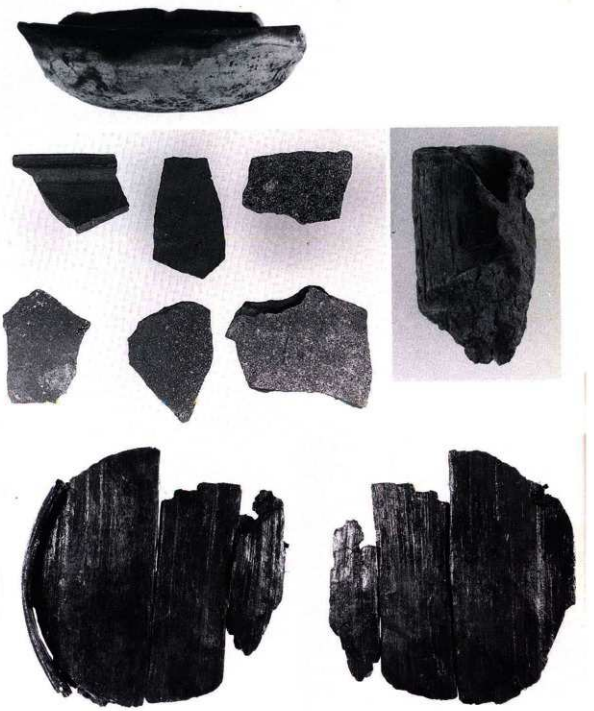
図版 17　第 57 次調査　　上：発掘調査地区遠景(南上空から)
下：発掘調査地区全景(真上から)



図版 18　第 57 次調査　上：SD1879 の断面(北西から)
下：調査区東半部の遠景(西から)



図版 19　第 57 次調査　上：調査区東半部の近景(西から)
下：調査区東半部の近景(南西から)



図版 20　第 57 次調査

1．土師器杯(第 61 図 5)
2．中世陶器(第 62 図 1)
3．輪羽口(第 62 図 3)
4．曲物蓋(第 60 図 5)

宮城県多賀城跡調査研究所年報　1989
多　賀　城　跡

平成２年３月２５日印刷
平成２年３月３１日発行

発行者　宮城県多賀城跡調査研究所
多賀城市浮島字宮前 133
TEL(022)368-0101
印刷所　小泉印刷株式会社